

第一節 買賣ノ通則

第一款 買賣ノ性質及成立

第二十四條 買賣ハ當事者ノ一方カ物ノ所有權又ハ其支分權ヲ移轉シ又ハ移轉スル義務ヲ負擔シ他ノ一方又ハ第三者カ其定マリタル代金ノ辨濟ヲ負擔スル契約ナリ
買賣契約ハ下ノ規定ニ從フ外有償且雙務ナル契約ノ一般ノ規則ニ從フ

第二十五條 買賣ハ當事者ノ承諾ノミヲ以テ完全ニ成立ス
然レトモ當事者ハ買賣ノ成立ヲ各自ノ證據ニ供スル公正證書又ハ私署證書ノ調製ノ條件ニ繫ラレムルコトヲ得

第二十六條 賣渡又ハ買受ノ一方ノミノ豫約アルトキハ要約者カ財產編第三百八條ノ條件及ヒ區別ニ從ヒテ契約ノ取結ヲ要求スル時ヨリ諾約者ハ其豫約ニ於テ定メタル代價及ヒ條件ヲ以テ契約ヲ取結フ義務ヲ負擔ス

第二十七條 諾約者カ契約ヲ取結フコトヲ拒ムトキハ裁判所ハ買賣カ成立シタリトノ判決ヲ爲ス
不動産權ノ買賣ニ關スルトキハ其判決ヲ登記ス
賣渡ノ豫約ヲ登記シタルトキハ右判決ハ登記ニ之ヲ附記ス共登記ハ賣主ノ承繼人ニ對シ既往ニ溯リテ效力ヲ生ス

第二十八條 賣渡及ヒ買受ノ相互ノ豫約アルトキハ當事者ノ一方ハ前條ニ從ヒ他ノ一方ニ對シテ契約ノ取結ヲ強要スルコトヲ得
裁判所ハ此場合ニ於テ當事者ノ意思ヲ解釋シ買賣ノ豫約カ即時ノ買賣ノ效力有スルモノト判決シ又期間ノ定アルトキハ其期間ハ履行ノミニ適用セラルルモノト判決スルコトヲ得

第二十九條 前四條ニ從ヒ當事者ノ雙方又ハ一方カ日後賣渡及ヒ買受ノ契約ヲ取結フ義務又ハ單ニ證書ヲ作ル義務ヲ負擔シタル場合ニ於テ豫約ノ擔保トシテ手附ヲ授受シタルトキハ契約ヲ取結フコト又ハ證書ヲ作ルコトヲ拒ム一方ハ其與ヘタル手附ヲ失ヒ又ハ其受ケタル手附ヲ二倍ニシテ還償ス

第三十條 即時ノ買賣ニ於テハ手附ハ之ヲ與ヘタル者ノ利益ノ爲メニノミ解約ノ方法ト爲ル但買主ノ與ヘタル手附カ金錢ナルトキハ其地ノ慣習ニテ之ニ解約ノ性質ヲ付スル場合ノ外合意ニテ此性質ヲ明示スルコトヲ要ス
契約ノ全部又ハ一分ノ履行アリタルトキハ如何ナル場合ニ於テモ解約ヲ爲スコトヲ得ス

第三十一條 試驗ニテ爲ス買賣ハ事情ニ隨ヒ買主ノ適意ノ停止條件又ハ拒絕ノ解除條件ヲ帶ヒテ之ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得
試味ノ慣習アル日用品ノ買賣ハ適意ノ停止條件ヲ帶ヒテ之ヲ爲シタルモノト推定ス

第三十二條 前條ニ定メタル二箇ノ場合ニ於テ買主カ已レニ屬スル權能ノ行使ニ付キ期限ヲ定メサルトキハ短キ期間ニ於テ決答ス可キ催告ヲ受ク若シ其決答ヲ爲サシテ賣渡物ノ引渡ヲ受ケタルトキハ買主ハ承諾シタリトノ推定ヲ受ケ反對ノ場合ニ於テハ拒絕シタリトノ推定ヲ受ク

第三十三條 買賣ノ代價ハ全額ヲ以テセサルモ其目安ヲ契約ニ定ムルコトヲ要ス
又其代價ハ或ハ同種類ノ商品ノ現時又ハ近日ノ市價ニ委子或ハ契約ヲ以テ指定シタル第三者ノ評價ニ委ヌルコトヲ得
右評價カ錯誤ニ出テタルカ又ハ明カニ公平ニ反スルトキハ其評價ニ異議ヲ爲スコトヲ得但其異議ハ損失ヲ受ケタリト主張スル一方カ評價ヲ知リタル時直チニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三者ト當事者ノ一方トノ間ニ共謀ノ詐欺アルトキハ財產編第三百十二條及ヒ第五百四十四條ノ規定ヲ適用ス

當事者ハ元本又ハ無期若クハ終身ノ年金權ヲ以テ代價ヲ定ムルコトヲ得然レトモ第三者ハ元本ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ定ムルコトヲ得ス但當事者カ明示ニテ一層廣キ權限ヲ第三者ニ與ヘタルトキハ此限ニ在ラス

第三十四條 買賣契約ノ費用ハ當事者雙方平分シテ之ヲ負擔ス但雙方カ別段ノ定ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第二款 賣渡又ハ買受ノ無能力

第三十五條 配偶者ノ間ニ於テハ動産ト不動産トヲ問ハス賣買ノ契約ヲ禁ス

配偶者ノ一方カ他ノ一方ニ對シテ負擔スル眞實且正當ナル債務ヲ消滅セシムルニハ相互ニ代物辨濟ヲ爲スコトヲ得

右代物辨濟ハ相當ノ疏明ヲ爲セル後裁判所ノ認許ヲ得タルニ非サレハ配偶者ノ間ニ於テ有效且完全ナラス

又此代物辨濟カ不動産物權ヲ目的トスルトキハ其代物辨濟ハ登記中ニ右認許ヲ附記シタルニ非サレハ第三者ニ對シテ效力ヲ有セス

第三十六條 前條ニ基キタル銷除ノ訴權ハ賣渡又ハ認許ナキ代物辨濟ヲ爲シタル配偶者共相續人又ハ承繼人ノミニ屬ス但其訴權ハ財產編第五百四十四條以下ノ一般ノ規則ニ從フ

第三十七條 法律上、裁判上若クハ合意上ノ管理人ハ直接ニ自己ノ名ヲ以テスルモ間介人ニ依ルモ賣渡ノ任ヲ受ケタル財産ニ付キ協議上又ハ競賣上ノ取得者ト爲ルコトヲ得ス

此制禁ハ競賣ヲ處理シ又ハ指揮スルコトヲ法律ニ依リテ任セラレタル公吏ニ之ヲ適用ス

第三十八條 前條ノ規定ニ背キタル賣買ノ銷除訴權ハ原所有者共相續人及ヒ承繼人ノミニ屬ス

第三十九條 判事、檢事及ヒ裁判所書記ハ爭ニ係ル物權又ハ人權ニシテ其職務ヲ行フ裁判所ノ管轄ニ屬ス可キモノノ取得者ト爲ルコトヲ得ス

此制禁ハ右同一ノ條件ヲ以テ辯護士及ヒ公證人ニ之ヲ適用ス

第四十條 前條ヨリ生スル銷除訴權ハ讓渡人、權利ヲ爭フ相手方、其雙方ノ相續人及ヒ承繼人ニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

又權利ヲ爭フ相手方、其相續人又ハ承繼人ハ讓受人ニ讓渡ノ現價ト辨濟ノ日ヨリノ利息トヲ辨償シテ其權利ノ受戻ヲ爲スコトヲ得

右ノ規定ハ違背者ニ對スル懲戒ノ罰ヲ妨ケス

第三款 賣渡スコトヲ得サル物

第四十一條 賣買カ性質ニ因リテ一般ニ融通スルコトヲ得サル物又ハ特別法ヲ以テ各人ニ處分ヲ禁シタル物ヲ目的トスルトキハ其賣買ハ無効ナリ

此賣買ノ無効ハ抗辯ニ依ルモ訴ニ依ルモ當事者各自ニ之ヲ援用スルコトヲ得

當事者ノ一方カ詐欺ヲ以テ賣買ノ制禁ナルコトヲ隱蔽シタルトキハ損害賠償ノ責ニ任ス

第四十二條 他人ノ物ノ賣買ハ當事者雙方ニ於テ無効ナリ

然レトモ賣主ハ賣買ノ際其物ノ他人ニ屬スルコトヲ知ラサルニ非サレハ其無効ヲ援用スルコトヲ得ス

第四十三條 賣買契約ノ當時ニ於テ物カ既ニ全部滅失シタルトキハ其賣買ハ無効ナリ但賣主カ此滅失ヲ知リタルトキ又ハ買主ニ之ヲ知ラサル過失アルトキハ善意ノ買主ニ對スル損害賠償ヲ妨ケス

物ノ一分ノ滅失ノ場合ニ於テ買主之ヲ知ラサリシトキハ買主ハ其選擇ヲ以テ或ハ殘餘ノ部分カ用方ニ不十分ナルコトヲ證シテ賣買ヲ解除シ或ハ割合ヲ以テ代價ヲ減少シテ賣買ヲ保持スルコトヲ得

トヲ得但此二箇ノ場合ニ於テ賣主ニ過失ノルトキハ其損害賠償ヲ妨ケス
賣買解除ノ請求ハ買主カ一分ノ滅失ヲ知リタル時ヨリ六ヶ月ヲ過キ又代價減少ノ請求ハ此時ヨ
リ二个月ヲ過クレハ之ヲ受理セス

第二節 賣買契約ノ效力

第一款 所有權ノ移轉及ヒ危險

第四十四條 賣買契約ハ賣渡物ノ所有權ノ移轉及ヒ其物ノ危險ニ付テハ財産編第三百三十一條第
三百三十二條、第三百三十五條及ヒ第四百十九條ニ定メタル如キ普通法ノ規則ニ從フ

第四十五條 賣買ノ目的カ不動産ナルトキハ其契約ヲ以テ賣主ノ特定且善意ノ承繼人ニ對抗スル
ニハ財産編第三百四十八條以下ノ規定ニ從ヒテ登記ヲ爲スコトヲ要ス

財産編第三百四十六條及ヒ第三百四十七條ハ右同一ノ目的ヲ以テ有體動産及ヒ債權ノ賣買ニ之
ヲ適用ス

第二款 賣主ノ義務

第四十六條 賣主ハ定量物ノ所有權ヲ移轉スル義務ノ外尙ホ賣渡物ヲ引渡ス義務、引渡ニ至ルマ
テ其物ヲ保存スル義務及ヒ妨碍、追奪ニ對シテ買主ヲ擔保スル義務ニ任ス

第一則 引渡ノ義務

第四十七條 賣主ハ賣渡物ヲ其合意シタル時期及ヒ場所ニ於テ現存ノ形狀ニテ引渡ス責ニ任ス但
其保存ニ付キ懈怠アルトキハ買主ニ對シテ賠償ヲ負擔ス

引渡ノ時期及ヒ場所ニ付キ合意ヲ爲サザリシトキハ財産編第三百三十三條第六項及ヒ第七項ノ
規定ニ從フ

然レトモ買主カ代金辨濟ニ付キ合意上ノ期間ヲ得サリシトキハ買主ハ其辨濟ヲ受クルマテ賣渡

物ヲ留置スルコトヲ得

賣主ハ代金辨濟ノ爲メ期間ヲ許與シタルトキト雖モ買主カ賣買後ニ破産シ若クハ無資力ト爲リ
又ハ賣買前ニ係ル無資力ヲ隠蔽シタルトキハ尙ホ引渡ヲ遅延スルコトヲ得

第四十八條 賣主ハ契約ニ定メタル數量ヲ過不足ナク引渡スコトヲ要ス
然レトモ下ノ數條ニ定メタル場合及ヒ區別ニ從ヒテ賣主又ハ買主ハ約シタル數量ヨリ多ク讓渡
シ又ハ取得スル責ニ任ス

第四十九條 賣渡物カ特定不動産ニシテ契約ニ共全面積ヲ明言シ且各坪ノ代價ヲ指示シタル場合
ニ於テ現實ノ面積カ指示ノ面積ニ不足アルトキハ買主ハ面積ヲ擔保セサル旨ヲ明言シタルトキ
ト雖トモ割合ヲ以テ代價減少ノ要求ニ服ス

現實ノ面積カ指示ノ面積ニ超過アルトキハ買主ハ割合ヲ以テ代價補足ノ要求ニ服ス

第五十條 全面積ヲ明言シ唯一ノ代價ヲ以テ不動産ヲ賣渡シ其面積ノ不足ノ場合ニ於テ賣主ハ惡
意ナルトキ又ハ善意ナルモ面積ヲ擔保シタルトキ又ハ不足ノ坪數カ少ナクトモ二十分一ナルト
キニ非サレハ代價減少ノ要求ニ服セス

面積ヲ擔保セス又ハ面積ハ概算ナリトノ附記ハ惡意ナル賣主ノ責任ヲ減セス

超過ノ場合ニ於テハ買主ハ其超過カ二十分一ニ及ヘルトキニ非サレハ代價補足ノ要求ニ服セス
第五十一條 建物ノ存スルト否トヲ問ハス數箇ノ土地ヲ一箇ノ契約ヲ以テ其各箇ノ面積ヲ指示シ

唯一ノ代價ニテ賣渡シタル場合ニ於テ其面積カ一箇ノ土地ニ超過アリ一箇ノ土地ニ不足アルト
キハ其坪ノ箇數ニ從ハス價額ニ從ヒテ相殺ス

此相殺ノ後猶ホ原價二十分一ノ過不足アルトキハ割合ヲ以テ代價ヲ増加シ又ハ之ヲ減少ス
此規定ハ一箇ノ土地内ニ於テ別異ノ性質アル各部分ノ面積ヲ指示シタル場合ニモ之ヲ適用ス

第五十二條 買主ハ面積不足ノ爲メ代價減少ニ付キ權利ヲ有スル場合ニ於テ尙ホ損害ノ賠償ヲ要求スルコトヲ得又買主ハ約シタル面積カ其用方ニ必要ナルコトヲ證シテ契約ノ解除ヲモ請求スルコトヲ得但面積ヲ擔保セサル旨ヲ明言シタル買買ハ此限ニ在ラス
超過ノ場合ニ於テ買主ハ二十分一以上ノ代價補足ヲ辨償スルコトヲ要スルトキハ單純ニ契約ヲ解除スルコトヲ得

第五十三條 上ノ規則ハ目方、員數及ヒ尺度ヲ以テ指示シタル數量カ買主ニ於テ容易且即時ニ調査スルコトヲ得サル日用品及ヒ動産物ノ買買ニ之ヲ適用ス

第五十四條 前條條ヨリ生スル代價改正、損害賠償又ハ契約解除ノ訴權ハ不動産ニ付テハ一年間ニ付テハ一个月ノ期間ニ之ヲ行フコトヲ要ス
右期間ノ經過ハ買主ニ在テハ契約ノ日ヨリ買主ニ在テハ引渡ノ日ヨリ始マル

第五十五條 動産又ハ不動産ノ買買ニ於テ錯誤カ其物ノ品質ニ存スルトキハ財産編第三百十條ノ規定ヲ適用ス
第二則 追奪擔保ノ義務

第五十六條 他人ノ物ヲ賣買シタル場合ニ於テ擔保ノ事ニ付キ何等ノ特別ナル合意モ有ラザリシトキハ買主ハ未タ追奪ノ恐アルニ至ラザルトキト雖トモ買買無効ノ判決ヲ求ムルコトヲ得又買主カ契約ノ當時其物ノ賣主ニ屬セサルコトヲ知リ賣主カ之ヲ知ラザリシトキト雖モ亦同シ
第五十七條 買主カ惡意ナリシトキハ買買ノ無効及ヒ追奪擔保ノ效果ハ買主ニ其猶ホ負擔スル代價金辨濟ノ義務ヲ免カレンメ又ハ其既ニ辨濟シタル代金ヲ取戻スコトヲ許スニ在ルノミ
買主ハ買受物ノ價格カ減少シタルトキト雖モ右取戻ニ於テ代金ノ減少ヲ受クルコト無シ但價格ノ減少カ自己ノ詐欺ニ出テ又ハ自己ノ利益ト爲リタルトキハ此限ニ在ラス

如何ナル場合ニ於テモ買主カ其辨濟シタル代金ヲ取戻シタルトキハ物ノ占有ヲ買主ニ返還スルコトヲ要ス

第五十八條 買主ハ契約ノ當時善意ナリシトキハ右ノ外尙ホ左ノ諸件ノ辨償ヲ受ク

第一 買主ノ支拂ヒタル契約費用ノ部分

第二 買受物ニ付キ買主カ支拂ヒタル費用ニシテ所有者ヨリ其辨償ヲ受クルコトヲ得サルモ

第三 買受物ニ生シタル増價額但意外ノ事ニ因ルモ亦同シ

第四 所有者ノ請求後ニ收取シ之ニ返還スルコトヲ要スル果實

然レトモ買主ハ果實ニ換ヘテ之ニ對當スル時期間ノ買買代金ノ法律上ノ利息ヲ受クルコトヲ欲スルトキハ之ヲ請求スルコトヲ得
又善意ナル買主ハ此他所有者ノ回復ノ訴ニ對スル答辯ノ費用及ヒ擔保請求ノ費用等總テノ損害賠償ヲ普通法ニ從ヒテ請求スルコトヲ得

第五十九條 賣主ハ契約ノ當時善意ナリシトキハ財産編第三百八十五條ニ從ヒテ正當ニ豫見スルコトヲ得ヘカリシ限度ニ非サレハ前條ノ第二號第三號及ヒ末項ニ定メタル賠償ヲ負擔セズ

第六十條 善意ナル買主ハ契約後ニ賣渡物ノ他人ニ屬スルコトヲ覺知シタルトキハ買主ヨリ代金ヲ提供スト雖モ其物ノ引渡ノ請求ヲ受クルニ當リ買買ノ無効ヲ申立テ且抗辯ノ方法ニ依リテ擔保ノ定方ノ判決ヲ求ムルコトヲ得但買主カ追奪ノ場合ニ於ケル求償權ヲ拋棄スル旨ヲ明白ニ陳述シタルトキハ此限ニ在ラス

第六十一條 右覺知カ引渡後ニ在リタルトキハ買主ハ買主カ即時ニ擔保訴權ヲ行フヤ又ハ已レト立會ヒ第五十八條ニ從ヒテ現時負擔ノ賠償額ヲ評定スルヤニ付キ買主ヲ遲滞ニ付スルコトヲ得

此末ノ場合ニ於テ賣主ハ其受取リタル代金ト共ニ右評價ノ金額ヲ提供シテ供託シタルトキハ縱令擔保ノ請求アルモ此他ノ責任ヲ負擔セズ

供託シタル金額ヲ引取ルノ權利ヲ財產編第四百七十八條ニ從ヒテ行使シタル賣主ハ再ヒ本條ノ許與セル權能ヲ援用スルコトヲ得ス

第六十二條 他人ノ物ノ賣主ハ日後其物ノ所有者ト爲リタルトキハ買主ヲシテ賣買ヲ認諾スルヤ擔保訴權ヲ行フヤノ一ヲ擇マシムルコトヲ何時ニテモ催告スルコトヲ得

右同一ノ權利ハ他人ノ物ノ賣主ノ相續人ト爲リタル真所有者ニ屬ス

第六十三條 買受物ノ分割ノ部分カ完全所有權又ハ虛有權ニテ第三者ニ屬スル場合ニ於テ買主カ此部分ヲ取得スルヲ得サルコトヲ知レハ初ヨリ其物ヲ買ハサル可キ程ニ其性質又ハ廣狹ニ因リテ有益ナルコトヲ證スルトキハ全部追奪ノ爲メ定メタル如ク損害ノ賠償ヲ得テ契約ヲ解除スルコトヲ得

買主ハ契約ノ解除ヲ求メサルトキハ其受ケタル直接且現時ノ損失ノ限度ニ於テ賠償ヲ要求スルコトヲ得

第六十四條 買受物ノ不分ノ部分カ第三者ニ屬スルトキハ其部分ノ重要ノ如何ニ拘ハラズ買主ハ損害賠償ヲ得テ契約ヲ解除スル權利ヲ有ス

買主ハ契約ノ解除ヲ求メサルトキハ買受物ノ價格ノ減少シタルトキト雖モ常ニ此ニ對當スル買受代金ト契約費用トノ部分ヲ取戻シ又其價格ノ増加シタルトキハ其損害ノ賠償ヲ受ク

第六十五條 或ハ賣渡シタル土地ニ屬スルモノトシテ契約ニ於テ述ヘタル働方役ノ追奪アリタルトキ或ハ契約ニ於テ述ヘサル人爲ヲ以テ設定シタル受方地役ニ關シ又ハ財產ノ一分ニ存スル利益權、賃借權ニ關シテ第三者ノ要求アリタルトキハ第六十三條ノ規定ヲ適用ス財產ノ全部ニ

存スル利益權又ハ賃借權ニシテ其經過ス可キ殘餘時期カ建物ニ付テハ一ノ年土地ニ付テハ一ノ年ヲ超エサルモノニ關シテモ亦同シ

賣買ノ財產ノ全部ニ存スル利益權又ハ賃借權ノ繼續時期カ建物ニ付テハ一ノ年土地ニ付テハ一ノ年ヲ超エ可キトキハ買主ハ尙ホ自己ニ殘存セル權利ノ不十分ナルヲ證スルコトヲ要セスシテ前條ニ從ヒ賣買ヲ解除スルコトヲ得

第六十六條 契約ニ於テ述ヘタルト否トヲ問ハズ賣渡シタル土地ニ先取特權又ハ抵當權ノ負擔アリテ買主カ其代金ノ辨濟ノ前又ハ辨濟ノ時其土地ヲシテ此負擔ヲ免カレシムル爲メニ必要ナル方式ヲ履行セサルニ因リ賣主ノ債權者ノ爲メニ所有權ヲ取上ケラレタルトキハ買主ハ賣主ニ對シテ第五十八條及ヒ第五十九條ノ規定ニ從ヒテ擔保ノ求償權ヲ有ス

第六十七條 差押ヘタル財產ノ競落人カ追奪ヲ受ケタルトキハ被差押人ニ對シテ代金ノ返還ヲ求ムルコトヲ得若シ被差押人カ無資力ナルニ於テハ代金ノ配當ヲ受ケタル債權者ニ對シテ其代金ノ返還ヲ求ムルコトヲ得

競落人ハ差押人カ差押ノ際ニ其財產ノ債務者ニ屬セサルコトヲ知リタルニ非サレハ之ニ對シテ損害賠償ヲ要求スルコトヲ得又債務者カ其財產ニ存スル第三者ノ權利ヲ詐欺ヲ以テ隱蔽シタルニ非サレハ之ニ對シテ損害賠償ヲ要求スルコトヲ得

競賣條件書ノ調製及ヒ競落ノ處理ニ任シタル公吏ハ其職分ヲ缺キタル爲メ買主ノ錯誤ヲ惹起シタルニ非サレハ損害賠償ノ責ニ任セス

第六十八條 債權ノ賣主ハ當然自己ノ債權ノ存立及ヒ其有效ノ擔保ノ責ニ任ス

又賣主ハ明示ニテ債務者ノ有資力ノ擔保ヲ諾シタルニ非サレハ其擔保ノ責ニ任セス
有資力ノ擔保ニ任シタル場合ニ於テモ賣主ハ債權カ既ニ滿期ト爲リタルトキハ讓渡ノ日ニ於ケ

ル有資力ノミニ付キ且受取リタル代金ノ限度ニ從ヒテ其責ニ任ス但一層廣大ナル擔保ノ明約ト裏書ヲ以テ讓渡ス商證券ノ特別規則トヲ妨ケス

未タ満期ト爲ラサル債權ノ讓渡ニ於テ讓渡人カ他ノ特約ナクシテ債務者ノ將來ノ有資力ヲ擔保シタルトキハ其擔保ハ満期ヨリ一今年又無期年金權ニ付テハ其讓渡ヨリ十今年ニテ絶止ス

第六十九條 物權ト人權トヲ問ハス争ニ係ル權利ノ讓渡ニ於テハ讓渡人ハ特別ノ合意ナク且讓受人カ争アルコトヲ知リタルトキハ其主張ノ虛構ナラサルコトヲ擔保スルノミニシテ讓渡シタル權利ノ與ノ成立ヲ擔保セス

裁判上ト裁判外トヲ問ハス本權ニ關スル明白ノ争ノ目的タル權利ニ付テノミ右ノ規定ヲ適用ス讓渡人ハ其主張ノ虛構ナリシ場合ニ於テハ讓渡代金ノ返還ノ外讓受人カ正當ニ期望シタル利益ノ賠償ヲ負擔ス

第七十條 會社ニ於ケル自己ノ權利ヲ賣渡シタル者ハ其權利ノ存立及ヒ其賣買契約ニ示セル權利ノ廣狹ニ付テノミ擔保ノ責ニ任ス

會社ノ從前ノ營業ヨリ生シ既ニ清算済ト爲リタル賣主ノ權利及ヒ義務ハ買主ニ利害ノ關係ヲ及ホスコト無シ

賣主ト會社トノ間ニ於ケル特別ノ計算ニ付テモ亦同シ

第七十一條 上ノ場合ニ於テ無擔保ニテ賣買スルトノ契約ヲ爲シタルトキト雖モ買主カ追奪ヲ受ケタルニ於テハ買主ハ代金ヲ返還スル責ニ任ス但買主カ賣買ノ時ニ於テ追奪ノ危險アルコトヲ了知シタルトキハ買主ハ此返還ヲ負擔セス

賣主ハ買主ノ危險負擔ニテ賣買スルトノ契約ヲ爲シタルコトノミニ因リテ亦代金ヲ返還スル責ヲ免カル

然レトモ如何ナル場合ニ於テモ又如何ナル約款ニ依ルモ賣主ハ賣買ノ前後ヲ問ハス第三者ニ授與シタル權利ヨリ生スル妨礙又ハ追奪ノ擔保ヲ免カルコトヲ得ス

第七十二條 賣主カ擔保ノ義務ノ全部又ハ一分ヲ買主ノ惡意ノ故ヲ以テ免カレント主張スルトキハ賣渡物ニ關スル行爲カ第三者ノ利益ノ爲メニ登記シ有リト雖モ其登記ノミニテハ買主ノ惡意ヲ證スルニ足ラス尙ホ賣主ハ登記官吏ノ認證書ニ依リ又ハ其他ノ方法ヲ以テ買主カ賣買ノ前ニ此行爲ヲ了知シタル直接ノ證據ヲ供スルコトヲ要ス

第七十三條 財産編第三百九十九條及ヒ第四百條ハ擔保ノ爲メニスル賣主ノ召喚ニ付キ及ヒ追奪ヲ受ケタル買主カ擔保人ヲ訴訟ニ參加セシメサル爲メニ生スル失權ニ付キ之ヲ適用ス

第三款 買主ノ義務

第七十四條 買主ハ合意シタル時期ニ於テ代金ヲ辨濟スルコトヲ要ス又其時期ニ付キ特別ノ合意ナキトキハ引渡ノ時ニ於テ之ヲ辨濟スルコトヲ要ス

引渡ヲ日後ニ延フルノ合意アルトキハ代金ノ辨濟ヲモ暗ニ日後ニ延フルモノト推定ス買主カ引渡ノ爲メ恩惠期限ヲ裁判所ヨリ得タルトキハ買主ハ代金辨濟ノ爲メ同一ノ期間ヲ享有ス

代金辨濟ノ恩惠期限ハ引渡ノ爲メ賣主亦之ヲ享有ス

第七十五條 代金辨濟ノ場所ヲ合意セサルトキハ其辨濟ハ有體動産ニ付テハ引渡ヲ爲ス場所不動産、債權、争ニ係ル權利又ハ會社ニ於ケル權利ニ付テハ證書ノ交付ヲ爲ス場所ニ於テ之ヲ爲ス引渡ノ前又ハ後ニ代金ノ辨濟ヲ要求スルコトヲ得ヘキトキハ其辨濟ハ買主ノ住所ニ於テ之ヲ爲ス

第七十六條 買受物カ果實其他金錢ニ見積ルコトヲ得ヘキ定期ノ利益ヲ生スルトキハ買主ハ引渡

ノ時ヨリ當然代金ノ利息ヲ負擔ス

反對ノ場合ニ於テハ利息ハ特別ノ合意又ハ辨濟ノ催告ニ依ルニ非サレハ之ヲ負擔セス

第七十七條 買主カ物上訴權ニ因リテ妨碍ヲ受ケ又ハ妨碍ヲ受クル恐アル正當ノ事由ヲ有スルトキハ賣主カ其妨碍若クハ危險ヲ止マシムルマテ又ハ追奪アリタルニ於テハ代金ヲ返還スル爲メノ保證人ヲ立ツルマテ買主ハ此訴權ノ輕重ニ從ヒテ代金ノ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ拒ムコトヲ得此規定ハ買主カ買受物ノ他人ニ屬スルヲ直接ニ證スルコトヲ得ルトキハ賣買無効ノ判決ヲ求メ及ヒ擔保ノ訴權ヲ行フコトヲ妨ケス

第七十八條 買受ケタル不動産ニ付キ抵當權又ハ先取特權ノ登記アルトキハ買主ハ滌除ノ方式ヲ行フタル後ニ非サレハ代金ヲ辨濟スル責ナシ但法律上ノ期間ニ於テ滌除ヲ行フコトヲ要ス

第七十九條 前二條ノ場合ニ於テ賣主ハ其先取特權及ヒ第三者ニ對スル解除ノ權利ヲ保存スル爲メノ公示ヲ爲ササリシトキハ當事者雙方ノ名ヲ以テ買主ヲシテ猶豫ナク代金ヲ供託セシムルコトヲ得但共代金ハ當事者雙方ノ承諾又ハ裁判所ノ判決ニ依リ且諸手續ノ終了後ニ非サレハ之ヲ引取ルコトヲ得ス

第八十條 動産物ノ買主カ代金ヲ辨濟シタルト否トヲ問ハス引渡ヲ受クル權利ヲ有スル時ニ於テ其引渡ヲ受クルコトヲ拒ミタルトキハ賣主ハ財產編第四百七十四條乃至第四百七十八條ニ從ヒテ其賣渡物ノ提供及ヒ供託ヲ爲スコトヲ得然レトモ日用品其他速ニ取損ス可キ物ニ付テハ賣主ハ買主ノ爲メ之ヲ轉賣スルコトヲ得ルトキハ其轉賣ヲ爲スコトヲ要ス

第三節 賣買ノ解除及ヒ銷除

第一款 義務ノ不履行ニ因ル解除

第八十一條 當事者ノ一方カ上ニ定メタル義務其他特ニ負擔スル義務ノ全部若クハ一分ノ履行ヲ缺キタルトキハ他ノ一方ハ財產編第四百二十一條乃至第四百二十四條ニ從ヒ裁判上ニテ契約ノ解除ヲ請求シ且損害アレハ其賠償ヲ要求スルコトヲ得

當事者カ解除ヲ明約シタルトキハ裁判所ハ恩惠期限ヲ許與シテ其解除ヲ延ヘシムルコトヲ得然レトモ此解除ハ履行ヲ缺キタル當事者ヲ遲滞ニ付シタルモ猶ホ履行セサルトキニ非サレハ當然其效力ヲ生ゼス

第八十二條 買主カ辨濟其他ノ義務ヲ缺キタル爲メノ解除ハ買主ノ猶ホ代金ノ全部若クハ一分ノ負擔又ハ他ノ負擔ヲ明示シタル賣買證書ニ依リ登記ヲ爲シタルニ非サレハ賣主ヨリ轉得者ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得ス但債權擔保編第八十二條ノ規定ヲ妨ケス

第八十三條 辨濟期限ノ定アル動産ノ賣買ニ於テ其引渡ヲ實行シタルトキハ辨濟ヲ缺キタル爲メノ賣主ノ解除ノ權利ハ買主ノ他ノ債權者ヲ害シテ之ヲ行フコトヲ得ス

辨濟期限ノ定ナキ賣買ニ付テハ買主ハ引渡ヨリ八日內ニ賣買ヲ解除スルコトヲ得然レトモ善意ナル第三者ノ既得ノ物權ヲ害スルコトヲ得ス

第二款 受戻權能ノ行使

第八十四條 賣主ハ賣買證書ニ明記シタル受戻ノ約款ニ依リ買主ノ辨濟シタル代金ト費用ノ部分トヲ指定ノ期間ニ買主ニ返還スルニ於テハ其賣買ヲ解除ス可キコトヲ要約スルヲ得

右期間ハ不動産ニ付テハ五個年、動産ニ付テハ二個年ヲ超ユルコトヲ得ス此ヨリ長キ時期ノ要約ハ當然之ヲ此期限ニ短縮ス

一旦期間ヲ定メタル以上ハ右制限內ト雖モ之ヲ伸長スルコトヲ得ス然レトモ其伸長ハ之ヲ再賣買ノ豫約ト看做スコトヲ得此場合ニ於テハ第二十六條及ヒ第二十七

條ノ規定ニ從フ

買買後ニ於テ爲レ又ハ別證書ヲ以テ爲シタル受戻ノ要約ニ付テモ亦同レ
賣主ハ代金ノ半額以上ノ辨償ノ爲メ期限ヲ與ヘ且其期限カ受戻ノ爲メ定メタル期間ノ半以上ニ
及ヘルトキハ有效ニ受戻ノ權能ヲ要約スルコトヲ得ス

第八十五條 不動産ニ付テハ法律ノ定メタル期間ニ其定メタル條件ヲ以テ爲シタル受戻權能ノ行
使ハ買主カ第三者ニ授與シ又ハ第三者カ買主ノ權ニ基キテ取得シタル物權ヲ排除シテ其不動産
ヲ賣主ニ復セシム但賃借權ニレテ殘期ノ一个年ヲ超エサルモノハ此限ニ在ラス

動産物ニ付テハ受戻ノ權能ハ善意ニテ其動産物上ニ物權ヲ取得シタル第三者ニ對レテ之ヲ行フ
コトヲ得ス

第八十六條 賣主ノ債權者ハ賣主ニ代ハリテ受戻ノ權能ヲ行フコトヲ得

然レトモ買主ハ右債權者カ豫メ其債務者ノ無資力ヲ證シ且財産編第三百二十九條ニ從ヒテ受戻
權能ノ行使ノ爲メ裁判上ニテ賣主ニ代位スルヲ要求スルコトヲ得

買主ハ同一ノ場合ニ於テ鑑定人ノ評價シタル買受物ノ現時ノ價額ト第八十八條ニ從ヒテ賣主
リ己レニ返還ス可キ金額トノ差額ニ達スルマテ賣主ノ債務ヲ辨償シテ債權者ノ訴ヲ止ムルコト
ヲ得

第八十七條 賣主カ受戻ノ約款ニテ賣渡シタル物ヲ日後抵當トシ又ハ之ニ其他ノ物權ヲ負擔セシ
メタルトキハ其權利ノ效力ハ賣主又ハ其債權者ノ受戻權能ヲ行ヒタル後ニ非サレハ生セス

賣主カ受戻ニ服スル物ノ所有權ヲ讓渡シタルトキハ讓受人ハ自己ノ名ヲ以テ受戻ヲ爲スコトヲ
得然レトモ讓渡前ニ賣主カ他人ニ對シテ承諾シ且登記ヲ經タル此他ノ物權ヲ妨碍スルコトヲ得
ス但其擔保權ヲ失フコト無レ

第八十八條 賣主カ受戻ノ權能ヲ行ハントスルトキハ指定ノ期間ニ賣買代價及ヒ契約費用ノ外尙
ホ物ノ保存費用ヲ買主ニ辨償スルコトヲ要ス

買主カ右金額ヲ受取ルコトヲ拒ミタルトキハ賣主ハ猶豫ナク之ヲ供託スルコトヲ要ス

賣主ハ物ノ改良費用ヲモ辨償スルコトヲ要ス然レトモ裁判所ハ此辨償ニ付テハ賣主ニ猶豫ヲ許
スコトヲ得

買主ハ右金額ノ皆済ヲ受クルマテ其物ノ上ニ留置權ヲ有ス

第八十九條 不動産ノ共有者ノ一人カ其不分明ノ部分ヲ受戻約款ニテ賣リタル場合ニ於テ買主カ他
ノ共有者ヨリ促カサレタル競賣ニ因リテ競落人ト爲リタルトキハ賣主ハ前條ニ掲ケタル金額ニ
競賣ノ代金ヲ加ヘテ其不動産ノ全部ニ對スルニ非サレハ受戻ヲ爲スコトヲ得ス又買主ハ之ニ故
障ヲ述フルコトヲ得ス

買主カ自ラ競賣ヲ促シタルトキハ賣主ハ其賣渡シタル部分ニ付テノミ受戻ヲ爲スコトヲ得又買
主ハ全部ノ受戻ニ故障ヲ述フルコトヲ得

第九十條 孰レヨリ競賣ヲ促カシタルヲ問ハス買主ニ非サル共有者ノ一人又ハ外人ノ競落シタル
場合ニ於テ賣主ハ競賣ニ召喚セラレサリントキハ其賣渡シタル部分ニ付テノミ競落人ニ對シテ
受戻ノ權利ヲ有シ之ニ反スルトキハ其權利ヲ失フ

第九十一條 現物ヲ以テ分割シタルトキ賣主カ其分割ニ召喚セラレタルニ於テハ賣主ハ孰レヨリ
分割ヲ促カシタルヲ問ハス他ノ所有者ニ歸シタル部分ニ付キ何等ノ要求ヲモ爲スコトヲ得スシ
テ買主ニ歸シタル部分ノミヲ受戻スコトヲ得但買主ノ供與シ又ハ受取リタル補足代金ヲ賣主買
主ノ間互ニ計算スルコトヲ妨ケス

賣主カ分割ニ召喚セラレサリントキハ賣主ハ選擇ヲ以テ或ハ其分割ヲ認諾シ買主ニ對シテ前項

ニ示シタル權利ヲ行ヒ或ハ第八十八條ニ掲ケタル金額ヲ買主ニ辨償シ共有者ニ對シテ再分割ヲ促カスコトヲ得

第九十二條 不分割ノ共有者カ一箇ノ契約及ヒ唯一ノ代價ニテ其物ヲ受戻ノ約款ヲ以テ賣渡シタルトキハ買主ハ一分ニ付キ受戻ヲ受クル責ナシ

又買主ハ賣主ノ一人ヨリ爲ス全部ノ受戻ニ故障ヲ述フルコトヲ得

之ニ反シテ數人ノ共有者カ各別ノ契約ヲ以テ各自ノ部分ヲ賣渡シタルトキハ各別ニ受戻ヲ爲スコトヲ得但第八十九條及ヒ第九十一條ノ規定ハ之ヲ此場合ニ適用スルコトヲ得

第九十三條 數人ノ買主カ一箇ノ契約又ハ各別ノ契約ヲ以テ一箇ノ財產ヲ受戻ノ約款ニテ取得シタルトキ賣主カ買主ノ間ニ分割ヲ爲ササル前ニ受戻ヲ爲サント欲スルニ於テハ賣主ハ總買主ニ對シ又ハ一人若クハ數人ノ買主ニ對シテ各自ノ部分ニ付キ受戻ヲ爲スコトヲ得

既ニ分割ヲ爲シタルトキハ賣主ハ各買主ニ對シ分割又ハ競賣ニ因リテ各自ニ歸シタル部分ノミニ非サレハ受戻ヲ爲スコトヲ得ス

第三款 隠レタル瑕疵ニ因ル賣買廢却訴訟權

第九十四條 動産ト不動産トヲ問ハス賣渡物ニ賣買ノ當時ニ於テ不表見ノ瑕疵アリテ買主之ヲ知ラス又修補スルコトヲ得ス且其瑕疵カ物ヲシテ其性質上若クハ合意上ノ用方ニ不適當ナラシメ又ハ買主其瑕疵ヲ知レハ初ヨリ買受ケサル可キ程ニ物ノ使用ヲ減セシムルトキハ買主ハ其買買ノ廢却ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テハ買主ハ辨濟代金ト契約費用トヲ取戻シ其代金ノ利息ハ請求ノ日ニ至ルマテノ物ノ收益又ハ使用ト之ヲ和殺ス

第九十五條 買主カ隠レタル瑕疵ノ賣買廢却訴訟權ヲ行フ可キ程ニ重大ナルヲ證スルコト能ハス又

ハ物ヲ保有スルコトヲ欲スルトキハ買主ハ便益ヲ失フ割合ニ應シテ代價ノ減少ヲ請求スルコトヲ得

第九十六條 買主カ賣主ニ對シ賣買ノ廢却又ハ代價ノ減少ヲ得タルニ拘ハラズ賣主カ初ヨリ其瑕疵ヲ知リタルトキハ買主ハ尙ホ其受ケタル損害又ハ失ヒタル利益ニ付テノ賠償ヲ要求スルコトヲ得

第九十七條 隠レタル瑕疵ヲ擔保セストノ要約ハ賣主ヲシテ初ヨリ自ラ了知シ且詐欺ヲ以テ隱秘シタル瑕疵ニ付テノ責任ヲ免カレシメス

第九十八條 賣買ノ當時ニ於テ物ニ瑕疵アリタルコト共瑕疵ヨリ買主ニ損害ヲ生シタルコト及ヒ買主又ハ賣主カ其瑕疵ヲ了知シタルコトハ人證 鑑定其他ノ法律上ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證ス

第九十九條 賣買廢却 代價減少及ヒ損害賠償ノ訴ハ左ノ期間ニ於テ之ヲ起スコトヲ要ス

- 第一 不動産ニ付テハ六個月
- 第二 動産ニ付テハ三個月
- 第三 動物ニ付テハ一個月

右期間ハ引渡ノ時ヨリ之ヲ起算ス然レトモ此期間ハ買主カ瑕疵ヲ知レル證據アリタル日ヨリ共半ニ短縮ス但其殘期カ此半ヲ超ユルトキニ限ル

買主カ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ右期間ニ隠レタル瑕疵ヲ覺知スル能ハサリシコトヲ證スルトキハ其期間ノ滿了後ニ於テモ訴ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ意外ノ事又ハ不可抗力ノ止ミタル時ヨリ通常期間ノ三分一ヲ以テ新期間ト爲ス

第一百條 隠レタル瑕疵ニ基キタル代價減少ノ訴權ハ買主カ買受物ヲ無償又ハ有償ニテ讓渡シタル

モ之ヲ失ハス但有償ノ讓渡ノ場合ニ於テハ其瑕疵ノ爲メ買主カ損失ヲ受ケタルトキ又ハ讓受人ヨリ訴ヘラレ若クハ訴ヘラルルノ恐アルトキニ限ル

第百一條 買渡物カ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ全部又ハ半以上滅失シタルトキハ買買廢却訴權ヲ行フコトヲ得ス

滅失部分ノ多少ニ拘ハラズ代價減少ノ訴權ハ殘存部分ノ割合ニ應シテ存立ス

如何ナル場合ニ於テモ買主ハ隠レタル瑕疵ヨリ生スル全部又ハ一分ノ滅失ノ責ニ任ス

第百二條 合式ノ強制買却ハ買買廢却訴權ヲモ代價減少訴權ヲモ生セス

第百三條 或ル動物又ハ日用品ノ隠レタル瑕疵ニ付テハ特別法ヲ以テ其買買上ノ效果ヲ定ムルニ至ルマテ本法ノ規定ヲ適用ス

第四節 不分物ノ競買

第百四條 不分財產ノ分割ヲ爲スニ當リ共有者ノ一人タリトモ現物ノ分割ヲ拒ム者アルトキハ其財產ノ協議買却又ハ競買ヲ爲シ各共有者ノ權利ノ限度ニ應シテ其代金ヲ配當ス

第百五條 共有者カ共一人若クハ第三者ニ協議買却ヲ爲シ又ハ相互ノ間ニ競買ヲ爲スニ付キ一致ヲ得ル能ハサルトキ又ハ共有者中ニ失踪者若クハ無能力者アルトキハ裁判所又ハ裁判所ノ指定シタル公吏ノ前ニ於テ不分物ノ競買ヲ爲ス但民事訴訟法ニ定メタル競買方式ニ從フコトヲ要ス共同競買人ノ各自ハ常ニ競買ニ外人ノ參與ヲ許スヲ要求スルコトヲ得共有者ノ一人カ失踪シ又ハ無能力ナルトキハ外人ノ參與ハ當然且必要ナリトス

第百六條 共有者ノ一人カ不分物ノ全部ヲ取得シタルトキハ其競買又ハ協議買却ハ共有者間ノ分割ノ行爲ト看做サレ會社ノ分割ニ關シ規定シタル效力ヲ生ス

定シタル買買ノ效力ヲ生ス

第四章 交換

第百七條 交換ハ當事者ノ一方カ或ル物ノ所有權其他ノ權利ヲ他ノ一方ヨリ取得シ又ハ之ヲシテ諾約セシメ其對價トシテ或ル物ノ所有權其他ノ權利ヲ他ノ一方ニ移轉シ又ハ移轉スルコトヲ諾約スル契約ナリ

相互ノ權利ノ價額カ均一ナラサルトキハ金錢其他ノ物ノ補足ヲ以テ之ヲ均一ニス

金錢ノ補足カ交換ニ供シタル物ノ價額ヲ超ユルトキハ其契約ハ之ヲ買買ト看做ス

第百八條 當事者ハ交換ニ供シ又ハ諾約シタル物又ハ權利ニ對スル妨礙及ヒ追奪ノ擔保ヲ相互ニ負擔ス

當事者ノ一方カ他ノ一方ノ諾約シタル物又ハ權利ヲ取得スルコトヲ得サリントキハ其選擇ヲ以テ或ハ金錢ノ對價ヲ要求スルコトヲ得或ハ契約ノ解除ヲ請求シテ自己ノ供與シタルモノヲ取戻スコトヲ得但就レノ場合ニ於テモ損害アレハ其賠償ヲ受ク

右解除ノ權利ハ取戻ニ服スル不動産ニ付キ權利ヲ取得シタル第三者ニ對シテ之ヲ行フコトヲ得ス但財產編第三百五十二條第一項ニ從ヒテ請求ノ公示前ニ其第三者ノ權原ノ登記アリタルトキニ限ル

第百九條 買買ノ規則ハ左ノ例外ヲ以テ交換ニ之ヲ適用ス
交換ハ配偶者ノ間ニ之ヲ爲スコトヲ許ス但交換物ノ價額ノ差カ間接ノ利益ヲ成ストキハ贈與ヲ禁制シ又ハ之ヲ制限スル規則ニ從フ

當事者ノ一方又ハ雙方カ指定ノ期間ニ於テ任意ニ交換ヲ解除スルコトヲ要約シタルトキハ第二十七條ニ依リ買買ノ豫約ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ル條件ニ從フニ非サレハ其解除ヲ以

テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第五章 和解

第百十條 和解ハ當事者カ交互ノ讓合又ハ出捐ヲ爲シテ既ニ生シタル爭ヲ落著セシメ又ハ生スルコト有ル可キ爭ヲ豫防スル契約ナリ

和解ノ成立、有效、效力及ヒ證據ハ下ノ規定ヲ除ク外合意ニ關スル一般ノ規則ニ從フ

第百十一條 和解ハ法律ノ錯誤ノ爲メ之ヲ銷除スルコトヲ得ス但其錯誤カ相手方ノ詐欺ニ起因スルトキハ此限ニ在ラス

第百十二條 和解ハ偽造ノ書類又ハ無効ノ行爲ニ依リ承諾シタルコトヲ理由トシテ之ヲ銷除スルコトヲ得ス但此等ノ申立ヲ爲スヲ得ヘキ當事者ニ於テ其書類ノ偽造ヲ知ラス又ハ其行爲ヲ法律ニ於テ無効ナラレムル所ノ事實ヲ知ラザリトキハ此限ニ在ラス

第百十三條 定マリタル爭ニ付キ爲シタル和解ハ新ニ發見シタル證書ニ因リテ當事者ノ一方カ爭ノ目的ニ付キ何等ノ權利ヲモ有セス又ハ他ノ一方カ其目的ニ付キ完全且爭ノ可カラサル權利ヲ有スルコトノ顯ハレタルトキハ事實ノ錯誤ノ爲メ亦之ヲ銷除スルコトヲ得

確定シタル判決又ハ攻讐スルヲ得サル契約ニ因リ既ニ爭ノ落著シタル場合ニ於テ其判決又ハ契約ヲ知ラスシテ和解ヲ爲シタルトキモ亦同シ

然レトモ和解カ從前ノ原因ヨリ生スルコト有ル可キ總テノ爭ヲ落著セシメ又ハ之ヲ豫防スルヲ目的トシタルトキハ當事者ノ一方ノ利益タル確定證書ノ發見ハ其和解ノ銷除ヲ生セス但其證書カ相手方ノ所爲ニ因リテ控留セラレタルトキハ此限ニ在ラス

第百十四條 有效ノ和解ハ當事者ノ相互ニ追認シタル權利又ハ利益ニシテ既ニ生シ又ハ豫見シタル爭ノ目的タルモノニ付テハ當事者間ニ在テハ確定判決ノ權利ト均レキ認定ノ效力ヲ生ス此場

合ニ於テハ其權利又ハ利益ハ從前ノ原因ニ由リテ保持シタルモノト看做ス但當事者雙方ニ更改ヲ極ス意思アリントキハ此限ニ在ラス

之ニ反レテ相互ニ供與シ又ハ諾約シタル權利又ハ利益ノ全部若クハ一分ニレテ爭ノ目的タラザリシモノニ付テハ和解ハ物權又ハ人權ヲ生シ之ヲ移轉シ若クハ之ヲ消滅セシムル有價合意ノ規則ニ從フ

第六章 會社

第一節 會社ノ性質及ヒ設立

第百十五條 會社ハ數人カ各自ニ配當ス可キ利益ヲ收ムル目的ニテ或ル物ヲ共通シテ利用スル爲メ又ハ或ル事業ヲ成シ若クハ或ル職業ヲ營ム爲メ各社員カ定マリタル出資ヲ爲シ又ハ之ヲ諾約スル契約ナリ

第百十六條 商事會社ニ特別ナル規則ハ商法ヲ以テ之ヲ定ム

第百十七條 社員ノ出資ハ或ハ動産又ハ不動産ノ所有權若クハ收益權或ハ金錢又ハ技術、勞力ヲ以テスルコトヲ得

出資ハ不均一ナルコトヲ得

第百十八條 民事會社ハ當事者ノ意思ニ因リテ之ヲ法人ト爲スコトヲ得
此場合ニ於テハ會社ニ社名ヲ付シ且其契約ハ商事會社ノ公示ノ爲メ法律ニ規定シタル方式ニ從ヒテ之ヲ公示スルコトヲ要ス但社名ヲ付シ又ハ公示ヲ爲シタルトキハ其會社ヲ法人ト爲ス意思アリト推定ス

第百十九條 合意ノ一般ノ規則殊ニ當事者ノ承諾、能力、合意ノ目的、原因及ヒ證據ニ關スルモノハ會社ニ之ヲ適用ス

第二百一十條 會社ハ其目的ノ商事ニ在ラサルモ資本ヲ株式ニ分ツトキハ商法ノ規定ニ從フ

第二節 社員ノ權利及ヒ義務

第二百一十一條 會社ハ契約ノ日ヨリ開始ス但明示又ハ默示ニテ他ノ期限ヲ定メ又ハ條件ヲ附シタルトキハ此限ニ在ラス

各社員ハ會社ノ開始スル時ニ於テ其諾約シタル出資ヲ差入ルルコトヲ要ス之ヲ差入レサルトキハ其社員ハ出資ニ生スル果實及ヒ利息ヲ當然負擔ス且遲延ノ爲メ損害ヲ生シタルトキハ出資ノ金錢ヲ以テスルトキト雖モ其賠償ヲ負擔ス

第二百一十二條 技術又ハ勞力ノ出資ヲ諾約シタル社員カ其諾約ヲ缺キタルトキハ其社員ハ他ノ社員ノ選擇ニ從ヒ會社ニ對シテ或ハ其義務ノ履行ヲ缺キタル當時ヨリ會社ノ受ケタル損害ヲ賠償シ或ハ其勞力ヲ會社外ニ用非テ得タル利益ヲ分與スル責ニ任ス

第二百一十三條 動産ト不動産トヲ問ハス特定物ノ所有權ヲ出資ト爲スコトヲ諾約シタル社員ハ會社ニ對シ賣主ト同シク其物ノ妨碍、追奪又ハ面積、數量ノ不足及ヒ隠レタル瑕疵ニ付キ擔保ノ責ニ任ス

又社員カ物ノ收益權ノミヲ出資ト爲スコトヲ諾約シタルトキハ貸貸人ト同シク擔保ノ責ニ任ス
第二百一十四條 會社契約ヲ以テ社員中ヨリ一人又ハ數人ノ業務擔當人ヲ選任シタルトキハ其各員ハ受任ノ權限ヲ踰ユルコトヲ得ス

權限ノ定マラサル業務擔當人ハ共同又ハ各別ニテ通常ノ管理行爲ヲ爲スニ止マル
又業務擔當人ハ會社ノ目的中ノ重要ナル行爲ニ付テハ共同ニテノミ之ヲ爲スコトヲ得但異議アル場合ニ於テハ其行爲ヲ中止シ總社員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

第二百一十五條 會社契約ヲ以テ業務擔當人ヲ選任セサル場合ニ於テ總社員ノ一致ニテ之ヲ選任セサル間ハ社員ノ各自ハ前條ニ規定シタル行爲ヲ其條件ニ從ヒテ爲ス權ヲ有ス

第二百一十六條 會社契約ヲ以テ業務擔當人ニ選任セラレタル社員ハ正當ノ原因アルトキ又ハ其承諾及ヒ總社員ノ同意ヲ得タルトキニ非サレハ委任ノ期限内ニ之ヲ解任スルコトヲ得ス
會社設立以後ノ契約ヲ以テ選任シタル業務擔當人ハ之ヲ選任シタルト同一ノ方法ヲ以テ其承諾ヲ要セスレテ之ヲ解任スルコトヲ得

第二百一十七條 業務擔當人ヲ選任シタル方法ノ如何ヲ問ハス其中ノ一人又ハ數人ノ死亡、辭任又ハ解任アリテ此等ノ事件ノ爲メニ會社ノ解散セサルトキハ總社員ノ過半数ヲ以テ其補闕者ヲ選任ス

第二百一十八條 右ノ外會社定款ノ執行ニ關スル總テノ處分ハ亦社員ノ過半数ヲ以テ之ヲ定ム
定款ニ反スル行爲又ハ定款外ノ行爲ニ付テハ總社員ノ一致ヲ得ルヲ必要トス

本條ハ定款又ハ法律ノ之ニ反スル規定ヲ妨ケス
第二百一十九條 第三者カ會社ト業務擔當社員ノ一人トニ對シテ同性質ノ債務ヲ負擔シタルトキ其

第三者カ二箇ノ債務ヲ消滅セシムルニ足ラサル金錢又ハ有價物ヲ此社員ニ辨濟スルニ於テハ其社員ハ會社ノ債權額ト自己ノ債權額トノ割合ニ應スルニ非サレハ自己ノ債權ノ辨濟ニ之ヲ充當スルコトヲ得ス但債務者ノ爲シタル充當ヲ變更スルコトヲ得ス

然レトモ債務者カ正當ノ利益ナクシテ社員ノ債權額ノ全部ニ充當シタルトキハ社員ハ其辨濟ノ額内ヨリ右ノ割合ニ應スル部分ヲ會社ニ分與スル責ニ任ス
債務者又ハ社員カ有效ナル充當ヲ爲ササルトキハ財產編第四百七十二條ニ從ヒテ法律上ノ充當ノ規則ヲ適用ス

第二百三十條 業務擔當人タルト否トヲ問ハス社員ニシテ會社ノ債務者ヨリ會社ニ對スル債務ノ一

分ヲ受取リタル者ハ場合ノ如何ニ拘ハラズ會社ニ其利益ヲ得セシムルコトヲ要ス但自己ノ持分トシテ受取證書ヲ與ヘタルトキト雖モ亦同シ

第三百一十一條 業務擔當人タルト否トヲ問ハズ各社員ハ其過失又ハ懈怠ニ因リテ會社ニ加ヘタル損害ヲ賠償スル責ニ任ス

此損害ハ社員カ會社營業ノ他ノ事件ニ付キテ會社ニ得セシメタル利益ト相殺スルコトヲ得ス但其事件ノ互ニ連絡シタルトキハ此限ニ在ラス

第三百十二條 會社契約ヲ以テ業務擔當人ヲ選任セサルカ爲メニ業務ヲ取扱フ社員ハ自己ノ業務ニ於ケルト同一ノ注意ヲ加ヘサルトキニ非サレハ其過失ノ責ニ任セス

第三百十三條 各社員ハ會社資本中ニ於テ使用スルコトヲ得ル金額ナキトキハ會社ノ所屬物ニ關スル必要及ヒ保持ノ費用ヲ自己ノ權利ノ割合ニ應シテ分擔スル責ニ任ス

第三百十四條 業務擔當人タルト否トヲ問ハズ各社員ハ會社ヲシテ自己ノ出資外ニ會社ノ爲メ有益ニ立替ヘタル金額ヲ返還セシメ又ハ會社ノ利益ノ爲メ善意ニテ負擔シタル義務ヲ認諾セシメ又ハ會社ノ營業ノ爲メ自己ノ財産ニ受ケタル避クルヲ得サル損害ヲ賠償セシムルコトヲ得

第三百十五條 會社營業ノ爲メ社員ノ立替ヘタル金額ハ其使用ノ日ヨリ當然利息ヲ生ス之ニ反シテ各社員ハ自己ノ營業ノ爲メ會社資本中ヨリ引出シタル金額ニ付テハ當然會社ニ對シテ其利息ヲ負擔シ向ホ損害アルトキハ賠償ノ責ニ任ス

第三百十六條 社員ハ會社解散ノ際ニ現在スル資本ニ於ケル各自ノ持分ヲ會社契約又ハ其後ノ契約ヲ以テ隨意ニ定ムルコトヲ得但第三百十八條ニ掲ケタル二箇ノ場合ハ此限ニ在ラス

第三百十七條 社員ハ其一人又ハ數人ノ持分カ利益及ヒ損失ニ於テ同一ナラサルヲ合意スルコトヲ得

然レトモ利益ノミヲ豫見シテ右ノ持分ヲ定メタルトキハ損失ニ付テモ同一ノ定方ヲ合意シタリトノ推定ヲ受ク

如何ナル場合ニ於テモ受ケタル損失ヲ控除シ會社ノ貸方トシテ殘ル所ノモノニ非サレハ配當ス可キ利益ト看做サス又右貸方ヲ竭シタル後借方トシテ殘ル所ノモノニ非サレハ損失ト看做サス然レトモ會社ノ存立中ニ詐害ナクシテ既ニ爲シタル利益又ハ損失ノ一分ノ配當ハ之ヲ變更セス

第三百十八條 會社資本ノ全部又ハ會社ノ得タル利益ノ全部ヲ社員中ノ一人ニ歸ス可キ約款ハ無効ナリ

技術又ハ勞力ヲ出資ト爲シタル社員ニ非サル社員ニ全ク損失ノ負擔ヲ免カレシム可キ約款モ亦同シ

會社契約ニ右ノ約款ヲ附記シタルトキハ其約款ハ契約ヲシテ全ク無効ナラシム又日後ニ右ノ約款ヲ追加シタルトキハ其約款ハ契約ノ存立ヲ妨ケスシテ會社ノ清算ハ第四百十一條ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第三百十九條 社員ハ自己ノ選任セシメ又ハ選任ス可キ社員又ハ外人タル一人若クハ數人ノ仲裁人ヲシテ會社解散ノ際各自ノ持分ヲ定メシムルコトヲ會社契約又ハ其後ノ契約ヲ以テ合意スルコトヲ得

仲裁人ノ爲シタル定方ハ仲裁人カ仲裁ノ適法ノ方式又ハ仲裁契約ヲ以テ授ケラレタル條件ヲ履行セサルカ又ハ明カニ公平ヲ失シタルトキニ非サレハ之ヲ攻撃スルコトヲ得ス

右定方ノ無効ノ請求ハ此ニ因リテ害ヲ受ケタリト主張スル社員ニ在テハ其社員カ定方ノ執行ニ加ハリタルトキ又ハ其定方ヲ知リタルヨリ三個月ヲ經過シタルトキハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第四百十條 會社契約ヲ以テ持分ノ定方ヲ仲裁人ニ委任ス可キコトヲ定メタル場合ニ於テ少ナク

明治二十三年四月 法律 第二十八號 (民法財産取得編)

一五七

トモ社員ノ過半数カ仲裁人ヲ選任スルコトニ一致セサルトキハ裁判所ニ於テ其選任ヲ爲ス
選任セラレタル仲裁人カ定方ヲ爲スコトヲ欲セス又ハ之ヲ爲スコト能ハサルニ當リ社員カ共
選ニ付キ一致セサルトキモ亦同シ

第四百一十一條 社員自身ニテ若クハ仲裁人ヲ以テ持分ノ定方ヲ爲サス又ハ仲裁人ノ定方ノ無効ト
爲リタルトキハ會社資本及ヒ利益又ハ損失ハ社員ノ出資額ノ割合ニ應シテ之ヲ配當ス
社員ノ出資ト爲レタル技術又ハ勞力ノ評價ナキトキハ裁判所ハ各般ノ事情ヲ斟酌シテ其出資ノ
價額ヲ定ム

技術又ハ勞力ト財産トヲ出資ト爲シタル社員ハ前項ニ定メタル價額ノ外尙ホ其財産ノ價額ニ從
ヒテ計算シタル持分ノ配當ヲ受ク

第四百一十二條 各社員ハ自己ノ持分ニ第三者ヲ組合サシムルコトヲ得又其持分ヲ質入シ又ハ之ヲ
讓渡スコトヲ得然レトモ此等ノ行爲ハ之ヲ以テ會社ニ對抗スルコトヲ得ス但會社契約ヲ以テ社
員ニ此權利ヲ認許シタルトキハ此限ニ在ラス此場合ニ於テ會社カ社員ノ讓渡サント欲スル持分
ヲ消却スル爲メ先買權ヲ留保シタルトキハ自己ノ持分ヲ讓渡サントスル社員ハ會社カ其先買權
ヲ行フカ拋棄スルカニ付キ之ヲ遲滞ニ付スルコトヲ要ス

第四百一十三條 業務擔當人カ會社ノ名ヲ以テ又ハ會社ノ營業ノ爲メ有效ニ負擔シタル義務ハ會社
カ法人ヲ成セルトキハ各社員ノ一身上ノ債權者ニ先チ會社資本ヲ以テ之ヲ擔保ス
會社資本ノ不十分ナル場合又ハ訴追債權者ニ其資本ヲ示ササル場合ニ於テハ總社員ハ連帶シテ
會社ノ義務ヲ負擔ス會社カ法人ヲ成ササルトキモ亦同シ
右ノ場合ニ於テ各社員間ノ決算ハ第三百三十六條乃至第四百一十一條ニ規定シタル貸方及ヒ借方ニ
於ケル各自ノ持分ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第三節 會社ノ解散

第四百一十四條 會社ハ左ノ諸件ニ因リテ當然解散ス

第一 會社契約ヲ以テ指定シタル期間ノ滿了又ハ解除條件ノ成就

第二 會社ノ目的タル事業ノ成功又ハ其成功ノ不能

第三 會社資本ノ全部又ハ半額以上ノ損失

第四 社員ノ一人ノ技術勞力又ハ收益ヲ以テスル繼續ノ出資ヲ爲スノ不能

第五 社員ノ一人ノ死亡、禁治產、破產又ハ顯然ノ無資力但第四百一十七條ノ規定ヲ妨ケス

第四百一十五條 會社ハ左ノ諸件ニ因リテ之ヲ解散スルコトヲ得

第一 如何ナル場合ヲ問ハス社員ノ一致ノ意思

第二 會社ニ明示又ハ默示ノ一定ノ期間ナキ場合ニ於テ惡意ニ非ス又不和合ノ時期ニ非スシ
テ解散ノ請求ヲ爲ストキハ社員一人ノ意思

第三 會社ニ一定ノ期間アルトキト雖モ社員ノ一人ノ義務不履行ニ基キタル解除ノ訴又ハ正
當ノ理由ニ基キタル解散ノ請求

第四百一十六條 社員ハ會社ノ期間ノ滿了前ニ明示又ハ默示ニテ其期間ヲ伸長スルコトヲ得

默示ノ伸長ハ一定ノ期間ノ滿了後ニ於テ社員ノ一人タモ故障ヲ爲サシテ會社營業ノ繼續シタ
ル事實ヨリ生スルコトヲ得此場合ニ於テ會社ハ前條第二號ニ從ヒ社員ノ一人ノ意思ヲ以テ之ヲ
解散スルコトヲ得

第四百一十七條 社員ハ第四百一十四條第五號ニ掲ケタル原因ニ由リテ會社ヲ解散セス且闕員ノ持分
ヲ定メ他ノ社員ニテ之ヲ繼續スルヲ合意スルコトヲ得

又社員ハ死亡シタル社員ノ相續人又ハ無能力ト爲リタル社員ト共ニ會社ヲ繼續スルヲ合意スル

コトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ相續人又ハ無能力者ノ合式ノ代人ノ新ナル承諾ヲ要ス

第四節 會社ノ清算及ヒ分割

第四百十八條 會社ノ解散シタルトキハ社員ノ各自又ハ其承繼人ヨリ清算ヲ請求スルコトヲ得
清算ハ分割前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス但社員ノ多數カ全部又ハ一分ノ分割ヲ先ニスルコトヲ請求
シタルトキハ此限ニ在ラス

又會社ノ各債權者ハ清算前ニ分割ヲ爲スコトニ付キ故障ヲ申立ツルコトヲ得

第四百十九條 清算ハ左ノ諸件ヲ包含ス

第一 著手シタル業務ノ成就

第二 會社ノ債務ノ辨濟及ヒ其債權ノ取立

第三 各社員ト會社トノ間ノ特別ナル計算

第四 分割ス可キ貸方又ハ負擔ス可キ借方ニ於ケル各社員又ハ其代人ノ持分ノ指定

第五百十條 會社契約ニ清算人ノ選任及ヒ其權限ニ關スル約款ナキトキハ清算ハ或ハ總社員之ヲ
爲シ或ハ社員ノ一致ヲ以テ委任シタル一人若クハ數人ノ社員之ヲ爲シ或ハ社員ノ一致ヲ以テ選
任シタル第三者之ヲ爲ス

社員カ清算人ノ選任ニ付キ一致セサルトキハ裁判所ニ於テ之ヲ選任ス

第五百十一條 清算人ハ如何ナル場合ヲ問ハス速ニ毀損又ハ滅盡ス可キ物ヲ讓渡スコトヲ要ス

満期ト爲リタル債務ノ辨濟ノ爲メ必要ナルトキハ此他ノ動産ヲ讓渡スコトヲ得

不動産ニ付テハ清算人ハ社員ノ特別ナル委任ヲ受クルニ非サレハ之ヲ抵當トシ又ハ讓渡スコト
ヲ得ス

前項ノ讓渡ハ競賣競落ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス但協議上ノ讓渡ヲ許シタル場合ハ
此限ニ在ラス孰レノ場合ニ於テモ社員ノ過半數ヲ以テ決スルコトヲ要ス

清算人ハ社員ノ名ヲ以テ原告又ハ被告トシテ訴訟ヲ爲スコトヲ得

清算人カ會社ノ債務又ハ債權ニ付キ承諾シタル和解及ヒ仲裁ハ第三者ト通謀シタル詐欺ノ爲メ
ニ非サレハ之ヲ攻撃スルコトヲ得ス

第五百十二條 清算ニ於ケル總計算ハ社員ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

右ノ計算ヲ認可スルニハ社員ノ過半數ノ議決ヲ以テ足レリトス

此議決ハ總計算ニ付キ之ヲ爲シ又ハ計算ノ或ル部分ニ付キ各別ニ之ヲ爲スコトヲ得

認可ヲ得サル計算ニシテ仕直スコトヲ得ヘキモノナルトキハ清算人共費用ヲ以テ之ヲ爲ス若シ
仕直スコトヲ得サルトキハ清算人ハ代理ノ規則ニ從ヒ其過失ニ因リテ加ヘタル損害ノ責任
ス

清算人ノ受任シタル權限ニ依リ又ハ前條ニ從ヒテ爲シタル行爲ハ善意ナル第三者ニ對シテ之ヲ
取消スコトヲ得ス

第五百十三條 會社ノ清算後ハ不分ニテ存スル財産ノ分割ハ社員ノ各自又ハ其承繼人ヨリ之ヲ請
求スルコトヲ得但當事者カ財産編第三十九條ニ從ヒ不分ニテ存スルコトヲ會社ノ解散後ニ合意
シタルトキハ此限ニ在ラス

第五百十四條 分割部分ノ定方又ハ其配付ニ付キ當事者ノ一致セサルトキハ財産共通ノ分割ノ爲
メ別ニ定メタル規則ニ從フ

第五百十五條 會社資本中ノ物ニシテ分割ニ因リ各社員ニ歸シタルモノニ關スル共社員ノ權利ハ
會社解散ノ日ニ遡リテ效力ヲ有シ又清算中他ノ社員ヨリ其物ニ付キ第三者ニ授與シタル權利ハ

之ヲ解除ス

第五百十六條 分割者ハ分割ニ因リテ取得ス可キ權利ノ上ニ受クルコト有ル可キ妨碍及ヒ追奪ニ付キ其各自ノ部分ニ應シテ相互ニ擔保ヲ爲ス
分割者ノ一人カ無資力ナルトキハ其一人ノ負擔シタル賠償ノ部分ハ被擔保人ヲ併セテ他ノ共同分割者ノ間ニ之ヲ分ツ

第七章 射倖契約

總則

第五百十七條 射倖契約トハ當事者ノ雙方若クハ一方ノ損益ニ付キ其效力カ將來ノ不確定ナル事件ニ繫ル合意ヲ謂フ

第五百十八條 射倖契約ニハ其性質ニ因ルモノ有リ當事者ノ意思ニ因ルモノ有リ
博戲、賭事、終身年金權其他終身權利ノ設定、陸上、海上ノ保險及ヒ冒險貸借ハ性質ニ因ル射倖ノモノナリ
此他成立又ハ效力ヲ停止又ハ解除ノ偶成ノ條件ニ繫ラシムル契約ハ當事者ノ意思ニ因ル射倖ノモノナリ

第五百十九條 陸上、海上ノ保險及ヒ冒險貸借ハ商法ヲ以テ之ヲ規定ス

第一節 博戲及ヒ賭事

第六十條 博戲ハ博戲者ノ勇氣、力量、巧技ヲ發達ス可キ性質ナル體軀運動ヲ目的トスルニ非サレハ其義務履行ノ爲メ訴權ヲ許サス
賭事ニ基ク訴權ハ右ノ如キ體軀運動ヲ爲ス人ノ爲メ又ハ賭者ノ直接ニ關係スル農工商業ノ進歩ノ爲メニ非サレハ亦之ヲ許サス

右ノ博戲又ハ賭事ニ於テ諾約シタル金額又ハ有價物カ事情ニ照シテ過度ナリト見ユルトキハ裁判所ハ之ヲ減少スルコトヲ得ステ全ク其請求ヲ棄却スルコトヲ要ス

第六十一條 前條ノ場合ノ外博戲及ヒ賭事ハ自然義務ヲモ生セス且其債務ノ追認、更改又ハ保證ハ總テ無効ナリ
然レトモ右博戲又ハ賭事ニ因ル有能力者ノ任意ノ辨濟ハ之ヲ取戻スコトヲ許サス但勝者ニ於テ詐欺又ハ欺瞞アリタルトキハ此限ニ在ラス

第六十二條 官許ヲ得サル富講ハ訴權ナキ博戲及ヒ賭事ト同視ス
商品又ハ公ノ證券ノ投機ノ定期賣買ニ付テモ初ヨリ當事者カ諾約シタル金額又ハ有價物ノ引渡及ヒ辨濟ヲ實行スルニ意ナク單ニ相場昂低ノ差額ヲ計算スルノヨリ目的トシタルコトヲ被告ノ證スルトキモ亦同シ

第六十三條 前二條ノ場合ニ於テ被告ヨリ銷除ヲ申立テサルトキハ判事ハ職權ヲ以テ其銷除ヲ言渡スコトヲ得但契約又ハ請求ニ於テ博戲、富講又ハ相場差額ノ賭事カ債務ノ原因タルコトヲ明言セシトキニ限ル

第二節 終身年金權

第一款 終身年金權ノ設定

第六十四條 終身年金權ハ動産若クハ不動産ナル元本ノ讓渡ノ報酬又ハ既往若クハ將來ノ勸勞ノ報酬トシテ有價ニテ之ヲ設定スルコトヲ得
又贈與又ハ遺贈ヲ以テ無價ニテ之ヲ設定スルコトヲ得
又終身年金權ハ有價又ハ無價ニテ讓渡シタル元本ノ上ニ留存シテ之ヲ設定スルコトヲ得
第六十五條 終身年金權ハ對價物ノ供與者ニ非サル人ノ利益ノ爲メ之ヲ要約スルコトヲ得

此場合ニ於テハ要約者ト諾約者トノ間ニ在テハ有償契約ノ規則ニ從ヒ要約者ト得益者トノ間ニ在テハ贈與ノ規則ニ從フト雖モ贈與ノ方式ニ從フト要セス

第百六十六條 終身年金權ハ債權者若クハ債務者ノ終身ヲ期シ又ハ第三者ノ終身ヲ期シテ之ヲ設定スルコトヲ得

此末ノ場合ニ於テ契約カ有償ナルトキハ共成立ニ付キ第三者ノ承諾ヲ必要トス然レトモ此承諾前ニ辨濟シタル年金ハ之ヲ取戻スコトヲ得ス

第百六十七條 終身年金權ハ同時又ハ順次ニ數人ノ債權者ノ終身ヲ期シテ之ヲ設定スルコトヲ得此場合ニ於テハ財產編第百條ノ利益權ニ關スル規定ヲ適用ス

第百六十八條 有償ノ終身年金權ノ契約ハ其設定ノ爲メ終身ヲ期セラレタル人カ合意ノ當時ニ於テ既ニ死亡シタルトキハ當事者雙方其死亡ヲ知ラスト雖モ無効ナリ

右ノ人カ合意ノ當時ニ於テ既ニ罹レル疾病ノ爲メ六十日內ニ死亡シタルトキハ其契約ハ當然之ヲ解除ス

第百六十九條 無償ノ終身年金權ハ設定者ニ於テ之ヲ讓渡スコトヲ得ス且差押フルコトヲ得サルモノト定ムルコトヲ得

右約款ハ設定證書ニ記入シタルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

養料トシテ無償ニテ設定シタル終身年金權ハ當然讓渡スコトヲ得ス且差押フルコトヲ得サルモノナリ

本條ノ規定ハ贈與者ノ利益ノ爲メ贈與財產ノ上ニ留存シタル終身年金權及ヒ支拂時期ノ至リタル年金ニ之ヲ適用セス

第百七十條 終身年金權ノ讓渡及ヒ差押ノ禁止ハ共一事ノミヲ要約シタルトキト雖モ二事共ニ存立ス

第二款 終身年金權ノ契約ノ效力

第百七十一條 債務者ハ年金權ノ設定ノ爲メ終身ヲ期セラレタル人ノ生存中ハ其年金權ノ年金ヲ支拂フト要シ且買戻ヲ爲スコトヲ得ス但其買戻ニ付キ特別ノ合意アルトキハ此限ニ在ラズ

第百七十二條 年金ハ毎月又ハ此ヨリ長キ時期ニ於テ其支拂ヲ爲スコトキト雖モ債權者日割ヲ以テ之ヲ取得ス

然レトモ年金ヲ前拂スコトキハ債務者ハ既ニ支拂時期ノ始マリタル全一期分ヲ負擔ス

第百七十三條 債權者ハ解除ノ權利ヲ留保セサルトキハ年金支拂ノ欠缺ノ爲メ契約ノ解除ヲ請求スルコトヲ得ス只其債務者ノ財産中ニ於テ年金ヲ受クルニ足ル可キ部分ヲ差押ヘ之ヲ賣却セシメ其賣却代金ヨリ生スル利息ヲ以テ年金ノ支拂ニ充ツルコトヲ得但他ノ債權者ノ競取ヲ拒ムコトヲ得ス

終身年金權ヲ無償ニテ設定シ又ハ贈與若クハ遺贈ノ元本ノ上ニ留存シタルトキモ亦右ト同一ニ處辨ス

第百七十四條 終身年金權ノ債務者ハ年金權ノ設定ノ爲メ終身ヲ期セラレタル人カ支拂ノ時期ニ生存セシコトヲ債權者ヨリ生存認證書ヲ以テ證セサルトキハ其年金ノ支拂ヲ拒ムコトヲ得

此認證書ハ其人ノ現住地ノ受持公證人又ハ身分取扱人之ヲ交付ス

第三款 終身年金權ノ消滅

第百七十五條 有償ノ終身年金權ノ債務者カ年金支拂ノ爲メ諾約シタル擔保ヲ供セス又ハ供シタル擔保ヲ減少スルトキハ債權者ハ契約ノ解除ヲ請求スルコトヲ得但既ニ取得シタル年金ヲ返還スル責ナシ

贈與又ハ遺贈ノ元本ノ上ニ留存シタル終身年金權ノ債權者モ亦右ト同一ノ權利ヲ有ス
右ノ解除ハ年金權ノ設定ノ爲メ終身ヲ期セラレタル人カ確定判決前ニ死亡シタルトキハ之ヲ宣
告セス

第七十六條 普通法ニ於テ許シタル銷除及ヒ廢罷ノ原因ハ終身年金權ニ之ヲ適用ス

終身年金權ハ此他尙ホ更改、合意上ノ免除、混同、時效及ヒ要約シタル受戻ニ因リテ消滅ス

然レトモ終身年金權カ第六十九條及ヒ第七十條ニ從ヒ法律又ハ人爲ニ依リテ讓渡スコトヲ
得ス又ハ差押フルコトヲ得サルモノナルトキハ其年金權ハ時效ニ罹ラス

如何ナル場合ニ於テモ年金ハ支拂時期後五個年ニシテ時效ニ罹ル

第七十七條 終身年金權ハ其設定ノ爲メ終身ヲ期セラレタル人ノ死亡ニ因リテ消滅ス但第六
十八條ノ規定ヲ妨ケス

然レトモ終身ヲ期セラレタル人カ債務者ノ責ニ歸ス可キ不正ノ原因ニ由リテ死亡シタル場合ニ
於テ其年金權ヲ有償ニテ又ハ贈與若クハ遺贈ノ負擔トシテ設定シタルトキハ其契約又ハ惠與
ハ之ヲ解除ス且債務者ハ既ニ支拂ヒタル年金ヲ取戻サスニテ其取得シタル財産ヲ返還スルコト
ヲ要ス

右ト同一ノ死亡ノ場合ニ於テ其年金權ヲ直接ニ贈與シ又ハ遺贈シタルトキハ年金ノ支拂ハ裁
判所カ終身ヲ期セラレタル人ノ生命ノ繼續期ト推測スル期間之ヲ繼續セシム

第八章 消費貸借及ヒ無期年金權

第一節 消費貸借

第七十八條 消費貸借ハ當事者ノ一方カ代替物ノ所有權ヲ他ノ一方ニ移轉シ他ノ一方カ或ル時
期後ニ同數量及ヒ同品質ノ物ヲ返還スル義務ヲ負擔スル契約ナリ

第七十九條 當事者カ返還ノ時期ヲ定メザリシトキハ裁判所ハ當事者ノ意思ヲ推測シ且事情ヲ
斟酌シテ之ヲ定ム

返還ノ場所ノ定マラザリシトキハ無利息ノ貸借ニ付テハ貸主ノ住所又利息附ノ貸借ニ付テハ借
主ノ住所ニ於テ其返還ヲ爲ス

第八十條 不可抗力ニ因リテ借用物ヲ返還スルコト能ハサルトキハ借主ハ其物ノ不可抗力ニ罹
リシ日及ヒ場所ノ相場ニ從ヒテ算定シタル其物ノ價額ヲ負擔ス

第八十一條 貸主ニ屬セサル物ノ貸借ハ無効ナリ其貸借カ利息附ニシテ且借主カ善意ナリシト
キハ貸主ハ借主ニ對シテ擔保ノ責ニ任ス

然レトモ此貸借ハ左ノ場合ニ於テハ有效ナリ

第一 借主カ善意ニテ借用物ヲ消費シタルトキ

第二 借主カ時効ニ因リ眞所有者ノ回復ノ請求ヲ排却シタルトキ

第三 眞所有者カ貸借ヲ認諾シタルトキ

第八十二條 貸借物ニ借主ノ了知セシメテ貸主ノ了知シタル瑕疵アリテ借主爲メニ損
害ヲ受ケタルトキト雖モ貸主ハ無利息ノ貸借ニ付テハ其損害ノ責ニ任セス但貸主ニ詐欺アリ又
ハ加害ノ意思アリタルトキハ此限ニ在ラス

此貸借カ利息附ナルトキハ貸主ノ了知セザリシ隱レタル瑕疵ト雖モ之ヲ了知スルコトヲ得ヘキ
トキハ其責ニ任ス

此他買賣廢却訴訟ニ關スル第九十四條乃至第一百一條ノ規定ハ之ヲ消費貸借ニ適用スルコトヲ得
第八十三條 財産編第四百六十三條乃至第四百六十六條ハ正貨又ハ強制通用ノ紙幣ニテ爲シタ
ル消費貸借ニ之ヲ適用ス

然レトモ貸主カ財產編第四百六十五條ノ旨セル金貨若クハ銀貨ヲ以テ指定シタル價額ノ辨濟ヲ受ケ又ハ此等ノ正貨ノ一ヲ以テ辨濟ヲ受クルコトヲ要約スルニハ同性質ノ正貨又ハ他ノ正貨若クハ紙幣ヲ以テ對當ノ價額ヲ實際ニ貸付スルコトヲ要ス

第百八十四條 貸借ヲ金銀塊ニテ爲シタルトキハ借主ハ他ノ商品ノ貸借ノ如ク同一ノ性質重量及ヒ品格ノ金銀塊ヲ返還スルコトヲ要ス

第百八十五條 金錢、日用品又ハ商品ノ借主ハ使用ノ報酬トシテ元本ノ外ニ利息ノ名目ヲ以テ借物ノ割合ニ應スル金額又ハ有價物ノ辨濟ヲ約スルコトヲ得

第百八十六條 利息ハ要約シタルニ非サレハ借主ニ對シテ之ヲ要求スルコトヲ得ス
借主ヨリ利息ヲ辨濟ス可キノ合意アリテ其額ノ定ナキトキハ其割合ハ法律上ノ利息ニ從フ
要約セザレサル利息ヲ法律ノ制限内ニテ任意ニ辨濟シタル借主ハ之ヲ取戻シ又ハ之ヲ元本ノ辨濟ニ充當スルコトヲ得ス

第百八十七條 合意上ノ利息ハ法律上ノ利息ヲ超ユルコトヲ得但法律ヲ以テ特ニ定メタル合意上ノ利息ノ制限ヲ超ユルコトヲ得ス
法律ノ制限ヲ超ユテ顯然ニ利息ヲ定メタルトキハ之ヲ法律ノ制限ニ減却シ此制限ヲ超ユテ爲シタル辨濟ハ之ヲ元本ノ辨濟ニ充當シ又ハ之ヲ取戻スコトヲ得

債權者カ實際ニ貸付シタル元本ヲ超ユル元本ヲ認メシメ又ハ其他ノ方法ヲ以テ不正當ノ利息ヲ隱秘シタルトキハ債務者ハ其不正當ノ利息ヲ辨濟スルコトヲ要セス若シ辨濟シタルトキハ之ヲ取戻スコトヲ得

第百八十八條 貸主ハ支拂時期ノ至リタル利息ニ付キ異議ヲ爲サシテ元本ノ全部又ハ一分ヲ受取リタルトキハ其利息ヲ受取り又ハ之ヲ拋棄シタルトノ推定ヲ受ク但反對ノ證據アルトキハ此

限ニ在ラス
第百八十九條 十ヶ年ヲ超ユル期間ヲ以テ利息附ノ貸借ヲ爲シタルトキハ借主ハ如何ナル反對ノ合意アルモ十ヶ年後ハ常ニ辨濟ヲ爲ス權能ヲ有ス
然レトモ年賦金ヲ以テ利息ノ外尙ホ元本ノ幾分ヲ漸次ニ辨濟ス可キトキハ其取越辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第百九十條 第百八十六條乃至第百八十九條ノ規定ハ消費貸借ヨリ生スル義務ヲ除ク外金錢又ハ定量物ノ義務及ヒ合意上ノ法律上ノ利息ニ之ヲ適用ス

第二節 無期年金權ノ契約
第百九十一條 貸主ハ元本ノ要求ヲ爲スコトヲ自ラ禁止シ年金ノミヲ受取ルコトヲ要約スルコトヲ得之ヲ無期年金權ノ設定ト謂フ

此禁止ハ明示ナルカ又ハ明カニ事情ヨリ生スルコトヲ要ス
第百九十二條 無期年金ノ債務ヲ負擔スル借主ハ如何ナル反對ノ合意アルモ常ニ其受取りタル元本ノ辨濟ヲ爲スコトヲ得

然レトモ借主ハ十ヶ年ヲ超ユサル或ル時期前ニ辨濟ヲ爲ササルヲ約スルコトヲ得
右期間ハ常ニ之ヲ更新スルコトヲ得然レトモ亦十ヶ年ヲ超ユルコトヲ得ス若シ之ヲ超ユルトキハ十ヶ年ニ短縮ス

辨濟ハ反對ノ合意アラサルトキハ全部タルコトヲ要ス
債務者ハ六ヶ月前ニ辨濟ヲ爲ス意思ヲ債權者ニ豫告スルコトヲ要ス但當事者ニ於テ他ノ期間ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

債務者ハ自己ノ定メタル時期ニ於テ辨濟ヲ爲ササルトキハ其損害賠償ノ責ニ任ス然レトモ辨濟

ノ強要ヲ受クルコト無レ但更改アリタルトキハ此限ニ在ラス
第九十三條 債務者ハ財產編第四百五條第一號乃至第三號ニ依リテ尋常ノ債務者カ權利上ノ期限ノ利益ヲ失フ場合又ハ合式ノ付遲滞ヲ受ケタル後引續キ二個年間年金ノ辨濟ヲ缺キタル場合ニ於テハ元本辨濟ノ強要ヲ受ク

此末ノ場合ニ於テ裁判所ハ財產編第四百六條ニ從ヒ債務者ニ恩惠上ノ期限及ヒ分割辨濟ヲ許與スルコトヲ得

第九十四條 前二條ノ規定ハ不動産讓渡ノ代價若クハ條件トシテ設定レ又ハ無償ニテ設定シタル無期年金權ニ之ヲ適用ス

右孰レノ場合ニ於テモ辨濟ハ當事者ノ評定シタル元本ヲ以テ之ヲ爲シ又元本ノ評定ナキトキハ法律上ノ利息ノ割合ニ從ヒテ計算シタル年金ヲ生ス可キ元本ヲ以テ之ヲ爲ス

日用品ヲ以テ年金ニ充ツルトキハ辨濟ハ特別ノ合意アルニ非サレハ前十年間ノ其平均代價ニ基キ計算シタル元本ヲ以テ之ヲ爲ス

第九章 使用貸借

第一節 使用貸借ノ性質

第九十五條 使用貸借ハ當事者ノ一方カ他ノ一方ノ使用ノ爲メ之ニ動産又ハ不動産ヲ交付シ明示又ハ默示ニテ定メタル時期ノ後他ノ一方カ其借受ケタル原物ヲ返還スル義務ヲ負擔スル契約ナリ

此貸借ハ本來無償ナリ

第九十六條 借主ハ使用ノ物權ヲ取得セス單ニ貸主及ヒ其相續人ニ對シテ人權ヲ取得ス借主ノ權利ハ其相續人ニ移轉セス但其相續人カ當事者ノ意思ノ之ニ異ナルコトヲ證スルトキハ

此限ニ在ラス又其相續人カ他ヨリ同種ノ物ノ使用ヲ得ル爲メ裁判所ヨリ返還猶豫ノ期間ヲ受クルコトヲ妨ケス

第二節 使用貸借ヨリ生シ又ハ其貸借ニ際シテ生スル義務

第九十七條 借主ハ借用物ノ性質又ハ合意ニ因リテ定マリタル用方ニ從ヒ且貸借期間ニ非サレハ其物ヲ使用スルコトヲ得ス

借主ハ此他ノ使用又ハ期限後ノ使用ニ因リテ生スル借用物ノ滅失又ハ毀損ニ付テハ勿論又其使用ニ際シ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ生スル滅失又ハ毀損ニ付テモ其責ニ任ス

第九十八條 借主ハ自己ノ物ヲ用非テ借用物ノ滅失又ハ毀損ヲ免カレシムルコトヲ得ヘキトキ又ハ自己ノ物ト借用物トガ同時ニ危險ヲ受クルニ際シ自己ノ物ノミヲ救護シタルトキモ亦意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ生スル借用物ノ滅失又ハ毀損ノ責ニ任ス

第九十九條 借主ハ借用物保持ノ通常費用ヲ負擔シ貸主ニ對シテ其償還ヲ求ムルコトヲ得ス
第二百條 借主ハ合意セシ時期ニ於テ借用物ヲ返還スルコトヲ要ス其時期前ト雖モ許サレタル使用ヲ終リレトキハ亦同シ但第二百三條第二項ノ規定ヲ妨ケス

返還ノ時期ヲ定メ且物ノ使用カ繼續ス可キモノナルトキハ裁判所ハ貸主ノ請求ニ因リテ返還ノ爲メ相應ナル時期ヲ定ム

第二一一條 借主カ借用物ノ第三者ニ屬スルコトヲ了知スルトキト雖モ貸主又ハ其代人ニ之ヲ返還スルコトヲ要ス但第三者カ其返還ニ付キ合式ニ故障ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

此末ノ場合ノ外返還ハ貸主又ハ其代人ノ住所ニ於テ之ヲ爲ス

第二一二條 數人連合シテ同時又ハ交互ニ用ユル爲メ一箇ノ物ヲ借用シタルトキハ各自連帶ニテ上ノ義務ヲ負擔ス

第二百三條 貸主ハ明示又ハ黙示ニテ借主ニ許シタル期限前ニ貸付物ノ返還ヲ要求スルコトヲ得

然レトモ其物ニ付キ急迫ニシテ且豫期セサル要用ノ生シタルトキハ貸主ハ裁判所ニ請求シテ期限前ニ一時又ハ永久ノ返還ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百四條 貸主ハ借主カ借用物保存ノ爲メ支出シタル必要且急迫ナル費用ヲ之ニ辨償スル責ニ任ス

又貸主ハ貸付物ノ瑕疵ノ爲メニ借主ノ受ケタル損害ニ付テハ第八十二條第一項ノ規定ヲ適用ス

第二百五條 借主ハ前條ニ依リテ自己ノ受ク可キ賠償ヲ得ルマテ借用物ニ付キ留置權ヲ行フコトヲ得

第十章 寄託及ヒ保管

第一節 寄託

第二百六條 寄託ハ一人カ動産ヲ交付シ他ノ一人カ之ヲ看守シ要求次第直チニ原物ヲ返還スル契約ナリ

寄託ハ本來無償ナリ
寄託ニハ任意ノモノ有リ急迫ノモノ有リ

第一款 任意寄託

第二百七條 任意ノ寄託ハ寄託者カ寄託ノ時日、場所及ヒ受寄者ヲ自由ニ選擇スルコトヲ得ル場合ニ於テ成ルモノナリ

第二百八條 寄託ハ所有者ノミナラス尙ホ物ノ看守及ヒ保存ニ付キ利害ノ關係アル人又ハ其代理

人之ヲ爲スコトヲ得

又寄託ハ無能力者ノ法律上ノ代人之ヲ爲スコトヲ得

第二百九條 寄託ハ契約ヲ爲ス完全ノ能力ヲ有スル者ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス

然レトモ無能力者ハ猶ホ自己ノ手ニ存スル寄託物ノ返還又ハ寄託ニ因リテ得タル利益ノ返還ニ付キ民事上其責ニ任ス但背信ニ付テノ公訴ヲ妨ケス

第二百十條 受寄者ハ受寄物ノ看守及ヒ保存ニ付テハ自己ノ財産ニ加フルト同一ノ注意ヲ爲スコトヲ要ス

然レトモ受寄者カ自ラ求メテ寄託ヲ受ケ又ハ單ニ自己ノ利益ヲ目的トシ要用ニ從ヒ受寄物ヲ使用スルノ許諾ヲ得テ寄託ヲ受ケタルトキハ受寄者ハ善良ナル管理人ノ注意ヲ爲ス責ニ任ス但此末ノ場合ニ於テ受寄者カ其物ヲ使用シタルトキハ第九十八條ノ規定ヲ適用ス

第二百十一條 受寄物返還ノ遲滞ニ付セラレタル受寄者ハ普通法ニ從ヒ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因ル滅失ノ責ニ任ス

第二百十二條 寄託者カ受寄者ニ寄託物ノ性質ヲ隱秘シタルトキハ受寄者之ヲ知ラント探求スルコトヲ得ス又其性質ヲ受寄者ノミニ知ラレタル場合ニ於テモ受寄者之ヲ他人ニ漏泄スルコトヲ得ス若シ之ヲ漏泄シタル爲メ損害アルトキハ其賠償ノ責ニ任ス

第二百十三條 受寄者ハ受寄物ヲ使用シ又ハ其果實ヲ消費スルコトヲ得ス但此カ爲メ寄託者ノ明示又ハ黙示ノ許諾アリタルトキハ此限ニ在ラス

此許諾ハ寄託ニ使用貸借ノ性質ヲ與フルニ足ラス

第二百十四條 受寄者ハ其收取シタル果實及ヒ產出物ト又之ヲ金錢ニ換ヘサルヲ得サリシトキハ其代金ト共ニ原物ヲ返還スルコトヲ要ス但前條ノ規定ヲ妨ケス

受寄者カ受寄物ニ付キ或ル償金又ハ或ル權利若クハ利益ヲ取得シタルトキハ之ヲ寄託者ニ移轉スルコトヲ要ス

又受寄者カ故意ニテ受寄物ヲ消費シ讓渡シ又ハ隱匿シタルトキハ遲滞ニ付セララルコト無クシテ當然損害賠償ノ責ニ任ス但背信ニ付テノ公訴ヲ妨ケス

第二百十五條 受寄者ノ和續人カ受寄物ナルコトヲ知ラスシテ其物ヲ消費シ又ハ之ヲ讓渡シタルトキハ其和續人ハ此ニ因リテ得タル利益ノ額ニ滿ソルマテ賠償ノ責ニ任ス

右ノ規定ハ遺忘又ハ錯誤ニ因リ自己ノ物トシテ受寄物ヲ處分シタル受寄者ニ之ヲ適用ス

第二百十六條 寄託物ノ返還ハ寄託者又ハ其法律上若クハ合意上ノ代人ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二百十七條 返還ニ付キ場所ヲ定メサリシトキハ受寄者カ受寄物ヲ移置シタルモ其現在ノ場所ニ於テ之ヲ返還ス但寄託者ヲ詐害スル意思アルトキハ此限ニ在ラス

第二百十八條 寄託者ノ要求次第物ヲ返還ス可キ受寄者ノ義務ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一 受寄者カ其物ノ自己ニ屬スルコトヲ證スルコトヲ得ルトキ

第二 受寄者カ次條ニ從ヒテ留置權ヲ行フコトヲ得ルトキ

第三 受寄者カ拂渡差押ノ合式ノ告知ヲ受ケタルトキ

第四 受寄者カ受寄物ノ盜品ナルコトヲ覺知シ且其所有者ヲ知リタルトキ但此場合ニ於テ受寄者ハ所有者ニ其寄託ヲ受ケタルコトヲ通知シ且指定セル相應ノ期間ニ寄託者ト立會ノ上

ニテ其物ヲ要求ス可ク若シ此期間ヲ過クルモ立會ハサルトキハ寄託者ニ返還ヲ爲ス可キ旨ヲ催告スルコトヲ要ス

第二百十九條 寄託者ハ寄託物ノ保存ノ爲メ受寄者ノ支出シタル必要ノ費用ト其物ノ爲メニ受寄者ノ受ケタル損害トヲ賠償スルコトヲ要ス

右賠償ノ皆濟ヲ受クルマテ受寄者ハ受寄物ノ上ニ留置權ヲ行フコトヲ得

第二款 急迫寄託及ヒ旅店寄託

第二百二十條 寄託者カ火災洪水難船地震又ハ暴動ノ如キ不測ニシテ且不可抗ノ事變ニ因リ已ムヲ得ス寄託ヲ爲ストキハ之ヲ急迫ノ寄託ト謂フ

急迫ノ寄託ハ諸般ノ方法ニ依リ又ハ事情ヨリ生スル事實ノ推定ニ依リテ之ヲ證スルコトヲ得

此他急迫寄託ハ任意寄託ノ規則ニ從フ

第二百二十一條 旅店及ヒ下宿屋ノ主人ハ其止宿セシムル旅人ノ攜帶シタル手荷物ノ受託ニ付テハ之ヲ急迫ノ受寄者ト看做ス

舟車運送人其他水陸運送ノ營業人モ亦其運送ヲ任セラレタル荷物ニ付テハ之ヲ急迫ノ受寄者ト看做ス

然レトモ本條ノ受寄者ハ有償合意ヨリ生スル通常ノ義務ヲ負擔ス

第二節 保管

第二百二十二條 保管トハ數人ノ間ニ於テ爭論ノ目的タル物ヲ第三者ニ寄託スルヲ謂フ

保管ハ動産又ハ不動産ヲ目的トスルコトヲ得

保管ニハ合意上ノモノ有リ裁判上ノモノ有リ

第二百二十三條 合意上ノ保管ハ其保管ニ付テモ保管人ノ選定ニ付テモ當事者ノ承諾アルコトヲ要ス

裁判上ノ保管人ハ當事者カ其選定ニ付キ一致セサルトキニ非サレハ裁判所ハ職權ヲ以テ之ヲ選定スルコトヲ得

裁判所ハ當事者ノ一人ヲ保管人ニ選任スルコトヲ得

第二百二十四條 合意上ト裁判上トヲ問ハス保管人ハ報酬ヲ受クルコトヲ得此場合ニ於テ保管人ハ善良ナル管理人ノ通常ノ注意ヲ保管物ニ加フル責ニ任ス

第二百二十五條 裁判上ノ保管人ハ財産編第一百九條ニ從ヒテ保管物ヲ貸貸スルコトヲ得然レトモ合意上ノ保管人ハ當事者ノ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ貸貸スルコトヲ得ス

裁判上又ハ合意上ノ保管人ハ其占有ヲ保持シ又ハ之ヲ回收スル爲メ占有訴權ヲ行フコトヲ得保管人ノ占有ハ爭訟ニ於テ確定ニ勝テ得タル當事者ヲ利ス

第二百二十六條 保管ニ付シタル物ハ勝ヲ得タル當事者ニ之ヲ返還スルコトヲ要ス然レトモ保管人ハ自己ノ責任ヲ免カル爲メ當事者ノ許諾又ハ裁判所ノ命令ヲ求ムルコトヲ得

第二百二十七條 右ノ外合意上及ヒ裁判上ノ保管ハ尋常ノ寄託ノ規則ニ從フ

第二百二十八條 差押物ニ於ケル裁判上ノ保管及ヒ債務者カ辨濟ニ提供シテ債權者ノ受取ルコトヲ拒ミタル金錢若クハ有價物ノ供託ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

第十一章 代理

第一節 代理ノ性質
第二百二十九條 代理ハ當事者ノ一方カ其名ヲ以テ其利益ノ爲メ或ル事ヲ行フコトヲ他ノ一方ニ委任スル契約ナリ

代理人カ委任者ノ利益ノ爲メニスルモ自己ノ名ヲ以テ事ヲ行フトキハ其契約ハ仲買契約ナリ仲買契約ハ商法ヲ以テ之ヲ規定ス

第二百三十條 代理ハ默示ニテ之ヲ委任シ及ヒ之ヲ受諾スルコトヲ得

第二百三十一條 代理ハ無償ナリ但反對ノ明示又ハ默示ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス

第二百三十二條 代理ニハ總理ノモノ有リ部理ノモノ有リ

總理代理ハ爲ス可キ行爲ノ限定少キ代理ニシテ委任者ノ資産ノ管理ノ行爲ノミヲ包含ス代理力或ハ管理或ハ處分或ハ義務ニ關シテ一箇又ハ數箇ノ限定セル行爲ヲ目的トスルトキハ其代理ハ部理ナリ

第二百三十三條 凡ソ代理ハ總理ナルト部理ナルトヲ問ハス其目的タル行爲ヨリ必然ニ生ス可キ事柄ヲ暗ニ包含ス

然レトモ元本ヲ諸約スル委任ハ其辨濟ヲ爲ス委任ヲ包含セス

元本ヲ要約スル委任ハ其辨濟ヲ受クル委任ヲ包含セス

訴訟ヲ爲ス委任ハ仲裁人ヲ選任シ請求ニ承服シ訴訟ヲ取下ケ又ハ和解ヲ爲ス委任ヲ包含セス和解ヲ爲ス委任ハ仲裁人又ハ裁判所ヲシテ爭論ヲ裁決セシムル委任ヲ包含セス

仲裁人ヲ選任スル委任ハ和解ヲ爲シ又ハ裁判所ヲシテ其爭論ヲ裁決セシムル委任ヲ包含セス

第二百三十四條 代理ハ無能力者ニモ有效ニ之ヲ委任スルコトヲ得然レトモ其代理人ハ委任者ニ對シテハ無能力者ノ制限アル責任ノミヲ負擔ス

第二百三十五條 代理人ハ其管理行爲ノ全部又ハ一分ニ付キ他人ヲシテ自己ニ代ハラシムルコトヲ得但此ヲ明示ニテ禁止セサルトキ又ハ事件ノ性質ニ因リテ專ラ代理人ノミニ委任シタリト看做ス可カラサルトキニ限ル此場合ニ於テ代理人ハ自己ノ管理ニ於ケル如ク其復代人ノ管理ノ責ニ任ス

委任者カ復代人ヲ指定シタルトキハ代理人ハ其指定ニ從フコト能ハサル場合ニ於テモ他人ヲ選任スルコトヲ得ス代理人カ其指定ニ從ヒ選任ヲ爲シタル場合ニ於テハ代理人ハ其復代人ノ無能又ハ不誠實ニ付キ委任者ニ之ヲ告知スルコトヲ怠リ又ハ復代人ヲ解任スルコトヲ怠リタルニ非サレハ其責ニ任セス

委任者ノ禁止シタルニ拘ハラス復代人ヲ選任シ又ハ其許諾セサル人ヲ選任シタル場合ニ於テハ代理人ハ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ生スル損害ニ付テモ其責ニ任ス但此復代人ノ選任ヲ爲ササレハ其損害ノ生セサル可カリシトキニ限ル

第二百三十六條 前條第一項及ヒ第二項ノ場合ニ於テ委任者ハ復代人ニ對シ其管理ニ關スル訴權ヲ直接ニ行フコトヲ得又之ニ對シ直接ニ責任ヲ負擔ス

同條第三項ノ場合ニ於テ委任者ハ直接訴權ト代理人ノ名ヲ以テスル間接訴權トノ間ニ選擇權ヲ有ス然レトモ直接訴權ヲ行ヒタルトキハ其復代人ノ選任ヲ認諾シタルモノト看做ス

第二節 代理人ノ義務

第二百三十七條 代理ノ終了セサル間ハ代理人ハ委任ノ本旨ニ從ヒ且明示ナキモ自己ノ了知シタル委任者ノ意思ヲ斟酌シテ委任事件ヲ成就スル責ニ任ス此ニ違フトキハ損害賠償ヲ負擔ス
全部ノ履行ヲ爲スヲ得サルトキハ委任者ニ有益ナルニ非サレハ代理人ハ一分ノ履行ヲ爲ス責ナク且之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百三十八條 指定ノ代價ニテ物ヲ買入ルル委任ヲ受ケタル代理人カ其指定ヲ超ユル代價ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ得ル能ハサリシトキハ代理人ハ其超過額ヲ拋棄シテ買入ノ認諾ヲ委任者ニ要求スルコトヲ得又委任者ハ代理人ノ辨濟シタル代價ヲ以テ物ノ引渡ヲ要求スルコトヲ得
物ヲ賣却スル委任ヲ受ケタル場合ニ於テ代理人カ指定ノ代價以下ニテ之ヲ賣却シタルトキハ代理人ハ代價ノ差額ヲ補足シテ其賣却ヲ認諾セシムルコトヲ得

第二百三十九條 代理人ハ委任事件ヲ成就セシムルコトニ付テハ善良ナル管理人タルノ注意ヲ爲ス責ニ任ス
然レトモ左ノ場合ニ於テハ代理人ノ過失ハ較ヤ寛大ニ之ヲ査定ス

第一 代理人カ無償ニテ代理ヲ爲ストキ

第二 代理人カ自ラ求メテ代理ヲ爲シタルニ非サルトキ

第三 委任者カ代理人ノ不熟練ナルコトヲ了知シ又ハ之ヲ推量シタルトキ

第四 代理人カ管理ノ或ル行爲ニ付キ委任者ヲシテ其豫期セサリシ利益ヲ得セシメタルトキ

第二百四十條 代理人ハ代理ノ終了シタルトキハ證據書類ヲ添ヘテ其計算ヲ爲ス責ニ任ス其終了前ト雖モ委任者ノ之ヲ求メタルトキハ亦同シ

第二百四十一條 代理人ハ委任者ノ名ヲ以テ又ハ管理ニ關シ自己ノ名ヲ以テ受取リタル金額若クハ有價物ヲ委任者ニ返還スルコトヲ要ス又委任者カ正當ニ受取ルコトヲ得ス又ハ代理人ニ受取ルコトヲ託セサリシ金額若クハ有價物ト雖モ之ヲ受取リタルトキハ亦同シ然レトモ次節ニ從ヒテ委任者ヨリ受取ル可キ金額ヲ控除ス

代理人ハ自己ノ收取スルコトヲ怠リ又ハ自己ノ過失ニ因リテ滅失セシメタル金額若クハ有價物ノ價額ヲ前數條ニ依リテ負擔スル損害賠償ト共ニ前項ノ返還中ニ附加ス

第二百四十二條 委任者ノ許諾ヲ受ケシテ其元本ヲ自己ノ利益ニ用非タル代理人ハ其使用ノ日ヨリ當然利息ヲ負擔ス其他損害アルトキハ賠償ノ責ニ任ス

計算殘餘ノ金額ニ付テハ代理人ハ其遲滞ニ付セラレタル日ヨリ利息ヲ負擔ス

第二百四十三條 一箇ノ事件ニ付キ數人ノ代理人アルトキハ唯一ノ證書ヲ以テ之ヲ委任シタルト各別ノ證書ヲ以テ之ヲ委任シタルトヲ問ハス各代理人ハ自己ノ過失ニ付テノミ其責ニ任シ連帶ヲ要約シタルトキ又ハ過失ノ連合ナルトキニ非サレハ其間ニ連帶ヲ成サス

第二百四十四條 代理人カ委任者ノ爲メ委任者ノ名ヲ以テ第三者ト爲シタル行爲ノ履行ニ付テハ代理人ハ其第三者ニ對シテ責ニ任セス但代理人カ明示ニテ履行ノ責ニ任シ又ハ第三者ニ對シテ

己レノ有セサル權限ヲ有スルモノノ如ク示シタルトキハ此限ニ在ラス

第三節 委任者ノ義務

第二百四十五條 委任者ハ代理人ニ對シテ左ノ義務ヲ負擔ス

第一 代理人カ代理ノ履行ヲ爲メ支出シタル立替金又ハ正當ノ費用ノ辨償及ヒ其支出シタル日以來ノ法律上ノ利息ノ辨償

第二 合意シタル謝金ノ辨償

第三 代理人カ其管理ニ因リ又ハ其管理ヲ爲スニ際シ自己ノ過失ニ非スシテ受ケタル損害ノ賠償但豫見シタル損害ニシテ其全部又ハ一分ニ付キ特ニ謝金ヲ諾約スル理由ト爲リタルモノハ此限ニ在ラス

第四 代理人カ其管理ニ因リテ負擔シタル一身上ノ義務ノ解脫又ハ其賠償

第二百四十六條 代理人ハ前條ニ掲ケタル支出ヲ爲スコトヲ約セサルトキハ其責ニ任セス然レトモ委任者ヨリ必要ナル資金ヲ供スルコトヲ拒絕シ又ハ遅延セシコトノ證據ナキニ於テハ支出ヲ約セサル爲メ代理ノ履行ヲ遅延スルコトヲ得ス

第二百四十七條 謝金ハ代理ノ全部履行アリタル後ニ非サレハ委任者之ヲ負擔セス但一分ツ辨濟ス可キコトヲ諾約シタルトキハ此限ニ在ラス

代理人ノ責ニ歸セサル原因ニ由リテ全部ノ履行ニ妨碍アリタルトキハ謝金ハ其履行ノ割合ニ應レテ委任者之ヲ負擔ス

第二百四十八條 委任者カ義務ヲ辨濟スルニ至ルマテ代理人ハ代理ニ依リテ所持シ且債權者ト爲レル原因タル物ノ上ニ留置權ヲ有ス

第二百四十九條 數人カ唯一ノ證書又ハ各別ノ證書ヲ以テ共同事件ノ爲メ代理ヲ委任シタルトキ

ハ委任者ノ各自ハ連帶シテ上ノ義務ヲ負擔ス但反對ノ要約アルトキハ此限ニ在ラス

第二百五十條 委任者ハ代理人カ委任ニ從ヒ委任者ノ名ニテ約束セシ第三者ニ對シテ負擔シタル義務ノ責ニ任ス

委任者ハ左ノ場合ニ於テハ代理人ノ權限外ニ爲シタル事柄ニ付テモ亦其責ニ任ス

第一 委任者カ明示又默示ニテ代理人ノ行爲ヲ認諾シタルトキ

第二 委任者カ代理人ノ行爲ニ因リテ利益ヲ得タルトキ但其利益ノ限度ニ從フ

第三 第三者カ善意ニシテ且代理人ニ權限アリト信スル正當ノ理由ヲ有シタルトキ

第四節 代理ノ終了

第二百五十一條 代理ノ履行又ハ其履行ノ不能及ヒ代理ニ付シタル期限ノ到來又ハ條件ノ成就ノ外尙ホ代理ハ左ノ諸件ニ因リテ終了ス

第一 委任者ノ爲シタル廢罷

第二 代理人ノ爲シタル拋棄

第三 委任者又ハ代理人ノ死亡、破産、無資力若クハ禁治産

第四 委任者カ代理ヲ委任シ又ハ代理人カ之ヲ受諾セシ原因タル資格ノ絶止

第二百五十二條 委任者ノミノ利益ノ爲メニ委任セシ代理ノ廢罷ハ謝金ヲ諾約シタルトキト雖モ委任者ハ何時ニテモ随意ニ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條 廢罷ハ將來ニ向ヒテノミ有效ナリ且其廢罷前ニ有效ニ爲シタル事柄ヲ害セス

第二百五十四條 數人ノ委任者アルトキハ其中ノ一人ノ爲シタル廢罷ハ他ノ人ノ代理ヲ終了セシメス

第二百五十五條 代理ノ廢罷ハ默示タルコトヲ得默示ノ廢罷ハ同一ノ事件ニ付キ新代理人ノ選任

又ハ委任者ノ管理ノ回復其他ノ事情ヨリ生スルモノナリ

第二百五十六條 代理ノ拋棄カ委任者ニ損害ヲ生セシメタルトキハ代理人ハ其賠償ノ責ニ任ス但
正當又ハ已ムヲ得サル原因ニ基キタルトキハ此限ニ在ラス

代理ノ拋棄モ亦默示ニテ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十七條 代理終了ノ原因ハ委任者ヨリ出テタルトキ代理人ヨリ出テタルトキ問ハス當事者
カ其告知ヲ受ケタルカ又ハ確實ニ之ヲ知リタルトキニ非サレハ當事者五ニ之ヲ以テ對抗スルコ
トヲ得ス

當事者ノ一方ノ死亡シタル場合ニ於テハ其相續人ヨリ告知スルコトヲ要ス

第二百五十八條 委任者カ代理人ヨリ委任狀ヲ取戻シタルトキト雖モ懈怠ナシニ代理ノ終了ヲ知
ラスシテ代理人ト約束シタル第三者ニハ代理終了ノ原因ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

第二百五十九條 代理カ上ニ掲ケタル原因ノ一ニ由リテ終了セシトキハ代理人又ハ其相續人ハ委
任者又ハ其相續人カ既ニ生シタル利益ヲ自ラ處理シ又ハ新代理人ヲシテ之ヲ處理セシムルコト
ヲ得ルニ至ルマテ其利益ヲ處理スルコトヲ要ス

此規定ハ代理ノ終了カ代理人ノ拋棄ニ因レルトキハ委任者ノ廢罷ニ因レルトキヨリモ一層嚴ニ
之ヲ適用ス

第十二章 雇傭及ヒ仕事請負ノ契約

第一節 雇傭契約

第二百六十條 使用人、番頭、手代、職工其他ノ雇傭人ハ年月又ハ日ヲ以テ定メタル給料又ハ賃銀ヲ
受ケテ勞務ニ服スルコトヲ得

雇傭ハ地方ノ慣習ニ因リ定マリタル時期ニ於テ又ハ確定ノ慣習ナキトキハ何時ニテモ一方ヨリ

豫メ解約申入ヲ爲スニ因リテ終了ス但共解約申入ハ不利ノ時期ニ於テ之ヲ爲サス又惡意ニ出テ
サルコトヲ要ス

第二百六十一條 雇傭ノ期間ハ使用人、番頭、手代ニ付テハ五午年職工其他ノ雇傭人ニ付テハ一午
年ヲ超ユルコトヲ得ス但習業契約ニ關スル下ノ規定ヲ妨ケス

此ヨリ長キ時期ヲ約シタルニ於テハ當事者ノ一方ノ隨意ニテ右ノ時期ニ之ヲ短縮ス但更新ヲ爲
ス權能ヲ妨ケス

第二百六十二條 雇傭ハ時期ヲ定メタルトキト雖モ當事者ノ一方ノ義務不履行ニ因ル解除ノ爲メ
又ハ一方ヨリ出テタル正當ニシテ且已ムヲ得サル原因ノ爲メ其定期前ニ於テ終了ス

如何ナル場合ニ於テモ主人ノ一身ニ關スル雇傭ハ其死亡ノ爲メ當然終了ス

第二百六十三條 雇傭ヲ終了セシムル正當ノ原因カ主人ヨリ出テ且地方ノ慣習ニ從ヒ雇傭ノ新契
約ヲ爲スニ困難ナル季節ニ生シタルトキハ裁判所ハ事情ニ從ヒテ定ムル償金ヲ雇傭人ニ付與セ
シムルコトヲ得

第二百六十四條 如何ナル場合ニ於テモ雇傭人ノ死亡ハ契約ヲ終了セシム但共相續人ハ給料又ハ
賃銀ノ取越過額ヲ返還ス

第二百六十五條 上ノ規定ハ角力、俳優、音山師其他ノ藝人ト座元興行者トノ間ニ取結ヒタル雇傭
契約ニ之ヲ適用ス

第二百六十六條 醫師、辯護士及ヒ學藝教師ハ雇傭人ト爲ラス此等ノ者ハ其患者、訴訟人又ハ生徒
ニ諾約シタル世話ヲ與ヘ又ハ與ヘ始メタル世話ヲ繼續スルコトニ付キ法定ノ義務ナシ又患者、訴
訟人又ハ生徒ハ此等ノ者ノ世話ヲ求メテ諾約ヲ得タル後其世話ヲ受クル責ニ任セス
然レトモ實際世話ヲ與ヘタルトキハ相互ノ分限ト慣習及ヒ合意トヲ酌量シテ其謝金又ハ報酬ヲ

裁判上ニテ要求スルコトヲ得

此等ノ者ノ世話ヲ受クルコトヲ諾約シタル後正當ノ原因ナクシテ之ヲ受クルコトヲ拒絕シタル者ハ其拒絕ヨリ此等ノ者ニ金錢上ノ損害ヲ生セシメタルトキハ其賠償ノ責ニ任ス之ニ反シテ世話ヲ與フルコトヲ諾約シタル後正當ノ原因ナクシテ之ヲ拒絕シタル者ハ因リテ加ヘタル損害ヲ賠償スル責ニ任ス

第二節 習業契約

第二百六十七條 工業人、工匠又ハ商人ハ習業契約ヲ以テ習業者ニ自己ノ職業上ノ知識ト實驗トヲ傳授シ習業者ハ其人ノ勞務ニ助力スルヲ約スルコトヲ得

未成年者ハ其父、後見人其他自己ニ對シテ權力ヲ有スル人ノ保佐又ハ名代ニ依ルニ非ツレハ習業契約ヲ取結フコトヲ得ス

第二百六十八條 合式ニ保佐ヲ受クル未成年者又ハ其代人ノ取結ヒタル習業契約ハ其未成年ノ時期ヲ超ユルコトヲ得ス但習業者カ成年ニ達シタル後其契約ヲ更新シ又ハ之ヲ伸長スルコトヲ妨ケス

第二百六十九條 習業契約ハ當事者相互ノ義務ノ性質及ヒ廣狹ヲ定ム

習業契約ノ不備ハ師匠又ハ親方ノ其職業ヲ行フ地方ノ慣習ニ從ヒテ之ヲ補完スルコトヲ得

第二百七十條 師匠又ハ親方ハ習業者ニ衣食及ヒ職業ノ器具ヲ與ヘ且日常ノ使用ヲ足シムルコトヲ要ス但反對ノ合意ナク且地方ノ慣習ノ此ニ異ナラサルトキニ限ル

師匠又ハ親方ハ習業者ニ其習業契約ノ目的タル職業ヲ學フコトヲ得セシムル爲メ必要ナル時間ヲ與ヘ世話ヲ爲シ及ヒ諸般ノ便利ヲ圖ルコトヲ要ス
未成年ノ習業者カ未タ算筆ヲ知ラサルトキハ師匠又ハ親方ハ何等ノ反對ノ合意アルモ習業者ニ

算筆修習ノ爲メ休憩時間外ニ於テ毎日少ナクトモ一時間ヲ與フルコトヲ要ス

第二百七十一條 習業者ハ其習ハント欲スル職業ニ關シ日日ノ時間及ヒ勞務ヲ師匠又ハ親方ニ供スルコトヲ要ス

第二百七十二條 習業者カ自己又ハ其親屬ノ疾病其他ノ不可抗ノ原因ニ由リテ一个月以上引續キ勞務ヲ供スルコト能ハサルトキハ習業者ハ其成年ニ達シタル後ト雖モ習業契約ノ期限滿了後ニ於テ前契約ニ同シキ相互ノ條件ヲ以テ休業シタル時間ヲ補足スルコトヲ要ス

第二百七十三條 習業契約ハ左ノ諸件ニ因リテ當然終了ス

第一 師匠、親方又ハ習業者ノ死亡

第二 師匠、親方又ハ習業者ノ陸海軍ノ現役

第三 師匠、親方又ハ習業者ノ重罪又ハ三個月ヲ超ユル禁錮ノ處刑

第四 合意又ハ法律ヲ以テ定メタル期間ノ滿了

第二百七十四條 左ノ原因アルトキハ解除ノ利益ヲ得ル一方ノ當事者ノ請求ニ因リ裁判所ハ契約ノ解除ヲ宣告スルコトヲ得

第一 相互ノ義務ノ不履行但ノ不可抗ノ原因ニ由ルトキモ亦同シ

第二 習業者ニ對スル師匠又ハ親方ノ苛酷ナル取扱

第三 習業者ノ平常ノ不品行

第四 前條ニ掲ケタル場合ノ外師匠、親方又ハ習業者ノ犯罪

第五 契約ヲ履行ス可キ土地外ニ師匠又ハ親方ノ轉居

本條ニ依リテ解除ノ宣告ヲ受ケタル當事者ノ一方ハ自己ニ過失アルトキハ他ノ一方ニ對シテ尙ホ其損害ヲ賠償ス可キノ言渡ヲ受ク前條ニ掲ケタル處刑言渡ノ場合ニ於テモ亦同シ

第三節 仕事請負契約

第二百七十五條 工技又ハ勞力ヲ以テスル或ル仕事ヲ共全部又ハ一分ニ付キ豫定代價ニテ爲スノ合意ハ注文者ヨリ主タル材料ヲ供スルトキハ仕事ノ請負ナリ若シ請負人ヨリ主タル材料ト仕事トヲ供スルトキハ仕事ヲ爲ス可キ條件附ノ賣買ナリ

第二百七十六條 前條ニ掲ケタル二箇ノ場合ニ於テ物ノ全部又ハ一分ニ付キ既ニ仕事ヲ爲シタル後ニ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ其物ノ滅失セシトキハ材料ノ滅失ハ其材料ノ屬スル者之ヲ負擔シ請負人ハ仕事費ヲ損失ス

當事者ノ一方カ其所爲ニ因リテ滅失ヲ來タシタルカ又ハ引渡若クハ受取ニ付キ遲滞ニ在ルトキハ共一方ノヨリ材料及ヒ仕事費ニ付キ其滅失ヲ負擔ス但損害アルトキハ其賠償ノ責ニ任ス

請負人ヨリ材料ヲ供シタル場合ニ於テ一分ノ滅失又ハ單一ナル毀損カ物ニ其價額ノ半以上ヲ失ハレムルトキハ之ヲ全部ノ滅失ト同視ス又其減價力半以下ニ在ルトキハ財産編第四百四十六條第四百十九條第三項及ヒ第四百二十條ノ規定ヲ適用ス

注文者ヨリ材料ヲ供シタルトキハ注文者ハ滅失又ハ毀損ノ後存在スル材料ノ部分ノ増價シタル限度ニ從ヒテ仕事費ヲ辨濟スル責ニ任ス

第二百七十七條 注文者ヨリ材料ヲ供シタル場合ニ於テハ仕事完成ノ後ニ非サレハ引渡ヲ實行セサル可キトキト雖モ一分宛仕事ヲ調査シ且之ヲ受取ルヲ合意スルコトヲ得

此場合ニ於テ注文者カ既成ノ仕事ヲ調査シテ受取リタルトキ又ハ之ヲ調査スルコトノ遲滞ニ在ルトキハ請負人ハ既成ノ仕事ニ付キ其危險ノ責ヲ免カル

仕事中心ニ注文者ヨリ前金又ハ内金ヲ供シタルモ此ヲ以テ既成ノ仕事ヲ受取リタリト看做サス然レトモ物カ注文者ノ明白ナル受取又ハ其付運滞ノ以前ニ滅失シタルトキハ注文者ハ既成ノ仕事ヲ超ユル部分ニ非サレハ前金又ハ内金ヲ取戻スコトヲ得ス

第二百七十八條 注文者カ異議ヲ留メシテ工作物ヲ受取リタルモ後日其物ノ使用ニ不適當ナル隱レタル瑕疵ヲ發見スルトキハ注文者ハ其受取ヲ取消シテ代價ノ減殺又ハ其一分ノ返還ヲ請求スル權利ヲ失ハス

此權利ニ基キタル訴權ハ注文者ニ屬スル動産又ハ不動産ノ上ニ施シタル仕事ニ付テハ全部ノ工作物ヲ受取リタル後ノ三ヶ月ニテ消滅ス

職工ヨリ材料ヲ供シタル製作物ニ付テハ第九十九條ノ規定ヲ適用ス

第二百七十九條 建物、牆壁其他地上ニ於ケル大ナル工作物ヲ請負ニテ築造シタルトキハ請負人ハ築造ノ瑕疵又ハ地盤ノ瑕疵ヨリ生シタル其工作物ノ全部若クハ一分ノ滅失又ハ重大ナル損壞ノ責ニ任ス但請負人カ他人ノ土地ニ築造シタルト自己ノ土地ニ築造シタルト材料ヲ供シタルト否トヲ區別セス

右責任ハ左ノ時期ノ間繼續ス

- 第一 牆壁其他土工ニ付テハ其受取後二個年
 - 第二 木造ノ建物ニ付テハ三個月
 - 第三 石又ハ煉瓦ノ建物及ヒ土藏ニ付テハ十個年
- 第二百八十條 右ノ責任ニ基キタル賠償訴權ハ左ノ時期ヲ以テ時効ニ罹ル
- 第一 物ノ全部ノ滅失ノ場合ニ於テハ其滅失ノ時ヨリ一個年
 - 第二 物ノ一分ノ滅失又ハ重大ノ毀損ノ場合ニ於テハ請負人ノ責ニ任ス可キ期間ノ滿了ノ時ヨリ六個月
- 第二百八十一條 經畫ノ變更ヨリ代價ノ増減ヲ生ス可キモ書面ヲ以テ之ヲ定メサルトキハ其變更

ヲ口實トシテ請負人ハ原代價ノ増加ヲ請求シ注文者ハ其減少ヲ請求スルコトヲ得ス
請負中ニ包含シタル建築ト全ク別ナル建築ヲ爲シ又ハ請負中ノ區分アル建築ヲ廢セシトキハ此
規定ヲ適用セス此場合ニ於テ當事者ノ間ニ一致ヲ得サルトキハ裁判所原代價ノ増減ヲ定ム
請負人ハ經權又ハ其變更カ注文者ノ指圖ニ出テタルコトヲ口實トシテ第二百七十九條ニ定メ
ル責任ヲ免カルルコトヲ得ス但請負人カ書面ヲ以テ此責任ヲ免カルルコトヲ得タルトキハ此限
ニ在ラス

第二百八十二條 請負人カ仕事ノミヲ供スルト材料ヲ併セ供スルトヲ問ハス注文者ハ常ニ自己ノ
意思ノミヲ以テ契約ヲ解除スルコトヲ得然レトモ注文者ハ請負人ノ既成ノ仕事ノ質銀及ヒ準備
ノ材料ニ受ケタル損失其他ノ損害ヲ賠償シ且其契約ニ因リテ得ヘキ正當ナル利益ノ全部ヲ辨濟
スル義務ヲ負擔ス

第二百八十三條 他人ノ材料ヲ以テ仕事ノ全部ニ供シタルト一分ニ供シタルト又其仕事ヲ實行シ
タルト契約ヲ解除シタルトヲ問ハス請負人ハ仕事ノ爲メ又ハ解除ノ賠償ノ爲メ自己ノ受ク可キ
金額ノ皆濟ニ至ルマテ其材料ヲ留置スルコトヲ得但此留置權ハ動產物ノミニ之ヲ適用ス

第二百八十四條 注文者カ請負人共者ノ仕事ヲ主眼トシテ契約ヲ取結ヒタルトキハ其契約ハ請負
人ノ死亡又ハ其仕事ノ不能ニ因リテ之ヲ解除スルコトヲ得

右二箇ノ場合ニ於テ注文者ハ自己ノ期望セシ用途ニ付キ利シタル仕事又ハ材料ノ價額ノミヲ請
負人又ハ其相續人ニ辨濟スル責ニ任ス

第二百八十五條 仕事ノ一分ニ任シタル下請負人ト請負人トノ關係ニ付テハ上ノ規定ニ從フ
請負人カ下請負人ニ對シ負擔スル金額ヲ辨濟セサルトキハ下請負人ハ自己ノ名ヲ以テ直接ニ注
文者ニ對シ其注文者ノ猶ホ請負人ニ辨濟ス可キ債務ノ限度ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

職工モ亦已レテ雇ヒタル者カ賃銀ヲ辨濟セサルトキハ注文者ニ對シテ右ト同一ノ權利ヲ有
ス

民法債權擔保編目錄

總則

第一部 對人擔保

第一章 保證

第一節 保證ノ目的及ヒ性質

第二節 保證ノ效力

第一款 保證人債權者間ノ保證ノ效力

第二款 保證人債務者間ノ保證ノ效力

第三款 共同保證人間ノ保證ノ效力

第三節 保證ノ消滅

第四節 法律上及ヒ裁判上ノ保證ニ特別ナル規則

第二章 債務者間及ヒ債權者間ノ連帶

總則

第一節 債務者間ノ連帶

第一款 債務者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因

第二款 債務者間ノ連帶ノ效力

第三款 債務者間ノ連帶ノ終了

第四款 全部義務

第二節 債權者間ノ連帶

第一款 債權者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因

第二款 債權者間ノ連帶ノ效力

第三款 債權者間ノ連帶ノ終了

第三章 任意 不可分

第二部 物上擔保

第一章 留置權

第二章 動產質

第一節 動產質契約ノ性質及ヒ成立

第二節 動產質契約ノ效力

第三章 不動產質

第一節 不動產質ノ目的、性質及ヒ組成

第二節 不動產質ノ效力

第四章 先取特權

總則

第一節 動產及ヒ不動產ニ係ル一般ノ先取特權

第一款 一般ノ先取特權 原因

第一則 訟事費用ノ先取特權

第二則 葬式費用ノ先取特權

第三則 最後疾病費用ノ先取特權

第四則 雇人給料ノ先取特權

第五則 日用品供給ノ先取特權

第二款 一般ノ先取特權ノ效力及ヒ順位

第二節 動產ニ係ル特別ノ先取特權

第一款 動產ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第一則 不動產質貸人ノ先取特權

第二則 種子及ヒ肥料ノ供給者ノ先取特權

第三則 農業稼人及ヒ工業職工ノ先取特權

第四則 動產物保存者ノ先取特權

第五則 動產物賣主ノ先取特權

第六則 旅店主人ノ先取特權

第七則 舟車運送營業人ノ先取特權

第八則 職務上ノ所爲ニ對スル債權者ノ先取特權

第九則 保證金貸主ノ先取特權

第二款 動產ニ係ル特別ノ先取特權ノ順位

第三節 不動產ニ係ル特別ノ先取特權

第一款 不動產ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第一則 讓渡人ノ先取特權

第二則 共同分割者ノ先取特權

第三則 工匠、技師及ヒ工事請負人ノ先取特權

第四則 金錢貸主ノ先取特權

第二款 債權者間ニ於ケル不動産ノ特別先取特權ノ效力及ヒ順位

第三款 第三所持者ニ對スル不動産先取特權ノ效力

第五章 抵當

第一節 抵當ノ性質及ヒ目的

第二節 抵當ノ種類

第一款 法律上ノ抵當

第二款 合意上ノ抵當

第三款 遺言上ノ抵當

第三節 抵當ノ公示

第一款 登記ノ條件及ヒ期間

第二款 登記ノ抹消減少及ヒ正誤

第四節 債權者間ノ抵當ノ效力及ヒ順位

第五節 第三所持者ニ對スル抵當ノ效力

總則

第一款 抵當債務ノ辨濟

第二款 滌除

第三款 財産檢索ノ抗辯

第四款 委棄

第五款 競賣及ヒ所有權徵收

第六節 登記官吏ノ責任

第七節 抵當ノ消滅

民法

債權擔保編

總則

第一條 債務者ノ總財産ハ動産ト不動産ト現在ノモノト將來ノモノトヲ間ハス其債權者ノ共同ノ擔保ナリ但法律ノ規定又ハ人ノ處分ニテ差押ヲ禁シタル物ハ此限ニ在ラス

債務者ノ財産カ總テノ義務ヲ辨濟スルニ足ラサル場合ニ於テハ其價額ハ債權ノ目的、原因、體裁ノ如何ト日附ノ前後トニ拘ハラズ其債權額ノ割合ニ應シテ之ヲ各債權者ニ分與ス但其債權者ノ間ニ優先ノ正當ナル原因アルトキハ此限ニ在ラス

財産ノ差押、賣却及ヒ其代價ノ順序配當又ハ共分配當ノ方式ハ民事訴訟法ヲ以テ之ヲ規定ス

第二條 義務履行ノ特別ノ擔保ハ對人ノモノ有リ物上ノモノ有リ

對人擔保ハ之ヲ左ニ掲ク

第一 保證

第二 債務者間又ハ債權者間ノ連帶

第三 任意ノ不可分

物上擔保ハ之ヲ左ニ掲ク

第一 留置權

第二 動產質權

第三 不動產質權

第四 先取特權

第五 抵當權

第一部 對人擔保

第一章 保證

第三條 保證ハ任意ノモノ有リ法律上ノモノ有リ又裁判上ノモノ有リ
下ノ第一節乃至第三節ノ規定ハ右三種ノ保證ニ共通ナリ

第一節 保證ノ目的及ヒ性質

第四條 保證ハ或人カ債務者ノ其義務ヲ履行セサルニ於テハ之ヲ履行スルコトヲ諾約スル契約ナ
リ此約務ハ債務者ノ過失ニ歸ス可キ不履行ノ場合ニ於テハ債權者ニ賠償スル約務ヲ暗ニ包含ス
第五條 保證ハ主タル義務ノ目的ト異ナルモノヲ目的ト爲ストキハ保證トシテハ無効ナリ

然レトモ保證人ハ主タル債務者ノ諾約シタル物又ハ所爲ノ對價トシテ不履行ヲ豫見シタル過忘
金額ヲ有效ニ諾約スルコトヲ得

第六條 保證人ノ義務ハ主タル義務ヨリ一層大ナルコトヲ得ス又一層重キ體様ニ服スルコトヲ得
ス若シ保證人ノ義務カ一層大ナルトキ又ハ一層重キトキハ主タル義務ノ限度及ヒ體様ニ之ヲ減
ス

第七條 前條ノ禁止ノ規定ハ債務者ヨリ其主タル義務ノ爲メ物上擔保ヲ供セサルトキ保證人ヨリ
其從タル義務ノ物上擔保ヲ供スルコトヲ妨ケス又保證人カ主タル債務者ヨリ一層嚴ナル執行方
法ニ服スルコトヲモ妨ケス

保證人ハ亦第三者ヲ引受人トシテ己レヲ保證セシムルコトヲ得此引受人ニ對シテハ保證人ハ主
タル債務者ノ地位ヲ有ス

第八條 金額又ハ定マリタル物ニ制限シタル保證ハ其利息ニモ果實ニモ其他ノ附從物ニモ及フコ
ト無シ

然レトモ主タル義務ノ無限ノ保證ハ填補ノ利息遲延ノ利息其他此債務ノ天然上法律上又ハ
合意上ノ附從物ニ及ヒ又主タル債務者ニ對シテ爲シタル最初ノ訴ノ費用ト共訴ヲ保證人ニ告知
シタル以後ノ費用トニモ及フ

第九條 總テ有效ナル義務ハ之ヲ保證スルコトヲ得
無能力者ノ取消スコトヲ得ヘキ義務ト雖モ亦有效ニ之ヲ保證スルコトヲ得其義務カ裁判上ニテ
取消サレタル後ト雖モ保證ハ其效力ヲ存ス但保證人カ其保證ノ際債務者ノ無能力ヲ知りタルト
キニ限ル

第十條 何人ニテモ將來ノ債務ヲ保證スルコトヲ得又債權者又ハ債務者ノ方ニ於テ隨意ノ條件ニ
繫ル債務ヲモ保證スルコトヲ得但保證人ニ於テ其債務ノ性質及ヒ廣狹ヲ査定スルコトヲ得ルト
キニ限ル

第十一條 何人ニテモ債務者ノ委任ヲ受ケ又ハ其不知ニテ又ハ其意ニ反シテモ其保證人ト爲ルコ
トヲ得

第十二條 有效ニ保證人ト爲ルニハ一般ナル債務者ニ對スルコトヲ問ハス無償ニテ義務ヲ負擔ス
ル能力ヲ有スルコトヲ要ス

然レトモ主タル契約カ有償ナルトキハ保證人ノ債務者ニ對スル無能力ハ債權者カ之ヲ知りタル

トキニ非サレハ保證人ヨリ債權者ニ共無能力ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

第十三條 債務ヲ保證スル意思ハ之ヲ明示セサルトキハ明カニ事情ヨリ生スルコトヲ要ス然レトモ共意思ハ契約者ノ一方ヲ他ノ一方ニ勤メ又ハ共一方ノ現在若クハ將來ノ有資力ヲ確言シタル事實ノミヨリ之ヲ推測スルコトヲ得ス

若シ證書ノ署名者中ノ一人カ共同債務者ナルカ又ハ保證人ナルカニ付キ疑アルトキハ之ヲ保證人ト看做ス

第十四條 保證人ノ義務ハ其相續人ノ負擔ニ歸シ又債權者ノ相續人ノ利益ニ歸ス但反對ノ要約アルトキハ此限ニ在ラス

第十五條 債務者カ保證人ヲ立ツ可キ合意ヲ以テ義務ヲ負ヒタルトキハ其債務者ハ債務ノ性質及ヒ大小ニ應シ有資力ノ人ニ非サレハ保證人トシテ之ヲ立ツルコトヲ得ス

若シ右ノ保證人カ無資力ト爲リタルトキハ債務者ハ前項ト同一ノ條件ヲ具備スル他ノ者ヲ立ツルコトヲ要ス

此他保證人ハ義務ヲ履行ス可キ控訴院ノ管轄地内ニ於テ住所ヲ有シ又ハ假住所ヲ定ムルコトヲ要ス

債權者ヨリ人ヲ指定シテ保證人ヲ要約シタルトキハ本條ノ條件ヲ要セス

第十六條 債務者カ前條ノ條件ヲ具備スル保證人ヲ立ツルコト能ハサルトキハ十分ナル物上擔保ヲ與フルコトヲ得

第十七條 商證券ノ保證及ヒ仲買人カ委託者ニ對シテ諾約シタル擔保ノ特例ハ商法ニ於テ之ヲ規定ス

第二節 保證ノ效力

第一款 保證人債權者間ノ保證ノ效力

第十八條 債權者ハ債務者ニ義務履行ノ催告ヲ爲シタルモ其效果アラサリシコトノ證據ヲ保證人ニ示サシテ之ヲ訴追スルコトヲ得ス

然レトモ債務者カ行方知レス又ハ破産ノ宣告ヲ受ケ若クハ顯然タル無資力ノ形狀ニ在ルトキハ右ノ催告ヲ必要トセス

第十九條 保證人ハ右ノ外下ノ制限及ヒ條件ニ從ヒ債權者カ豫メ債務者ノ財産ヲ檢索シテ之ヲ賣ラシムルコトヲ債權者ニ要求スルコトヲ得

第二十條 保證人ハ明示又ハ默示ニテ財産檢索ノ利益ヲ拋棄シ又ハ主タル債務者ト連帶シテ義務ヲ負擔シタルトキハ檢索ノ利益ヲ享ケス

總テノ場合ニ於テ保證人ハ主タル債務ノ基本ヲ爭フ前ニ檢索ノ利益ヲ以テ債權者ニ對抗セザリシトキハ其利益ヲ失フ

第二十一條 檢索ヲ要求スル保證人ハ債務者ノ不動産ニシテ義務ヲ履行ス可キ控訴院ノ管轄地内ニ在ルモノヲ債權者ニ指示スルコトヲ要ス

保證人ハ爭ニ係ル不動産ヲモ他ノ債權者ニ優先ニテ抵當ト爲リタル不動産ヲモ訴追債權者ニ抵當ト爲リタル不動産ニシテ第三所持者ノ手ニ存スルモノヲモ指示スルコトヲ得ス

債務者ニ關スル動産ニ付テハ債務者之ヲ物上擔保トシテ既ニ債權者ニ供シタルトキニ非サレハ保證人其檢索ヲ要求スルコトヲ得ス

第二十二條 債權者檢索ノ有效ナル對抗ヲ受ケ其檢索ヲ爲スコトヲ怠リテ債務者其後無資力ト爲リタルトキハ保證人ハ債權者ノ檢索ニ因リ得ヘカリシ金額ニ滿ツルマテ其義務ヲ免カル

第二十三條 一人ノ債務者ノ爲メ數人ノ保證人アルトキハ債務ハ均一ニテ當然其間ニ分タル但不

均一ニテ分別スルコトヲ定メ又ハ其保證人カ或ハ債務者ト共ニ或ハ各自ノ間ニ連帶シテ義務ヲ負擔シ若クハ其他ノ方法ニテ分別ヲ拋棄シタルトキハ此限ニ在ラス
保證ノ義務カ各別ノ證書ヨリ生スルトキト雖モ分別ノ利益ハ存在ス

第二十四條 保證人ハ檢索ノ利益ヲ用非タルト否ト分別ノ利益ヲ享クルト否ト問ハス訴追ヲ受ケタルトキハ第二十九條ニ明示シタル目的ヲ以テ債務者ヲ訴訟ニ參加セシムル爲メ基本ニ付テ答辯前ニ民事訴訟法ニ定メタル方式及ヒ條件ニ從ヒ延期抗辯ヲ以テ債權者ニ對抗スルコトヲ得

第二十五條 保證人カ基本ニ付テ答辯スルトキハ主タル債務ノ組成又ハ其消滅ヨリ生スル抗辯ヲ以テ債權者ニ對抗スルコトヲ得

保證人ハ債務ヲ保證スルニ當リ債務者ノ無能力又ハ其承諾ノ瑕疵ヲ知ラザリシトキハ此等ノ事項ヨリ生スル無効ノ理由ヲ以テモ對抗スルコトヲ得

第二十六條 右ノ抗辯ニ付キ債權者ト保證人トノ間ニ有リタル判決ハ債務者ヲ害スルコトヲ得ス然レトモ之ヲ利スルコトヲ得但共判決ノ牽連シタル簡條ハ債務者ニ利ナルモノト不利ナルモノトヲ分ツコトヲ得ス

第二十七條 債務者ニ對シテ時効ヲ中斷シ又ハ債務者ヲ遲滞ニ付スル行爲ハ保證人ニ對シテ同一ノ效力ヲ生ス

保證人ニ對シタル右同一ノ行爲ハ保證人カ債務者ノ委任ヲ受ケ又ハ債務者ト連帶シテ義務ヲ負擔シタルトキニ非サレハ債務者ニ對シテ效力ヲ生セス

第二十八條 主タル債務者ノ爲シタル債務ノ自白ハ保證人ヲ害ス
保證人ノ爲シタル自白ハ委任又ハ連帶アル場合ニ非サレハ債務者ヲ害セス

第二款 保證人債務者間ノ保證ノ效力

第二十九條 債權者ヨリ訴追ヲ受ケタル保證人ハ第二十四條及ヒ財產編第三百九十九條ニ掲ケタル如ク主タル請求ニ對シテ債務者ノ答辯ヲ要ス可キ場合ニ於テハ其答辯ヲ爲サシムル爲メ又債務者ノ敗訴ノ言渡ヲ受ク可キ場合ニ於テハ債務者ニ對シテ次條ニ定メタル賠償ノ言渡ヲ得ル爲メ擔保附帶ノ請求ヲ以テ債務者ヲ訴訟ニ召喚スルコトヲ得

右擔保附帶ノ請求ハ債務者ノ委任ヲ受ケタル保證人ノミニ屬ス
第三十條 主タル債務ヲ辨濟シ其他自己ノ出捐ヲ以テ債務者ニ義務ヲ免カレシメタル保證人ハ債務者ヨリ賠償ヲ受クル爲メ之ニ對シテ擔保訴權ヲ有ス但左ノ區別ニ從フ

第一 保證人カ債務者ノ委任ヲ受ケテ義務ヲ負擔シタルトキハ其債務者ニ義務ヲ免カレシメ又ハ債務者ノ名ニテ辨濟シタル元利共擔當シタル費用、立替ヲ爲シタル時ヨリ其利息其他損害アルトキハ其賠償ノ金額ヲ債務者ヨリ償還セシムルコトヲ得又此委任ノ場合ニ於テ保證人ハ其分限ヲ以テ言渡ヲ受ケタルトキハ債務者ニ對シ直チニ其賠償ヲ受クル爲メ訴ヲ爲スコトヲ得

第二 保證人カ債務者ノ不知ニテ義務ヲ負擔シタルトキハ債務者ノ義務ヲ免カレシメタル日ニ於テ之ニ得セシメタル有益ノ限度ニ從ヒ右ノ賠償ヲ受ク
若シ保證人カ債務者ノ意ニ反シテ義務ヲ負擔シタルトキハ保證人ノ求償ノ日ニ於テ債務者ノ爲メ存在スル有益ノ限度ニ非サレハ右ノ賠償ヲ受クルコトヲ得ス

第三十一條 連帶又ハ不可分ニテ責任スル數人ノ債務者ヨリ保證人ニ委任ヲ爲シタル場合ニ於テハ其債務者ハ財產取得編第二百四十九條ニ從ヒ保證人ニ對シテ連帶ノ擔保人タリ

第三十二條 債務者ヲ訴訟ニ參加セシムルコトヲ怠リタル保證人ハ其債務者カ債權者ニ對抗ス可

キ排訴抗辯ヲ有シタルコトヲ證スルトキハ第三十條ニ定メタル求償權ヲ有セス
若シ債務者カ債權者ニ對抗ス可キ延期抗辯ノミヲ有シタルトキハ右ノ懈怠アル保證人ノ求償ニ
對シ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得

第三十二條 保證人ハ有效ニ辨濟シタルモ債務者ニ共旨ヲ有益ニ通知スルコトヲ怠リ爲メニ債務
者カ善意ニテ再ヒ辨濟シ此他有價ニテ自己ノ免責ヲ得タルトキモ亦其求償權ヲ失フ
右ニ反シテ債務者カ自ラ債務ヲ消滅セシメタルコトヲ保證人ニ通知スルコトヲ怠リタルトキハ
債務者ハ場合ニ從ヒ其債務ノ消滅後保證人ノ爲シタル辨濟ニ付キ責任アリトノ宣告ヲ受クルコ
ト有リ

孰レノ場合ニ於テモ利害ノ關係アル當事者ハ受取ルコトヲ得サルモノヲ受取リタル債權者ニ對
シテ求償權ヲ有ス

第三十四條 委任ヲ受ケテ義務ヲ負擔シタル保證人ハ辨濟ヲ爲ス前又訴追ヲ受クル前ニテモ債務
者ヨリ豫メ賠償ヲ受クル爲メ又ハ未定ノ損失ヲ擔保セシムル爲メ左ノ三箇ノ場合ニ於テ之ニ對
シ訴ヲ爲スコトヲ得

第一 債務者カ破産シ又ハ無資力ト爲リ且債權者カ清算ノ配當ニ加入セザルトキ

第二 債務ノ満期ノ到リタルトキ

第三 満期ノ不定ナル債務カ其日附ヨリ十年ヲ過キタルトキ

第三十五條 債權者カ完全ノ辨濟ヲ受ケサル間ハ前條及ヒ第二十九條ニ依リ債務者ヨリ豫メ保證
人ニ供ス可キ賠償ハ債務者其債權者ニ對スル自己ノ免責ヲ保スル爲メ債權者ノ名ヲ以テ之ヲ供
託シ又ハ其他ノ方法ニテ之ヲ留存スルコトヲ得

第三十六條 主タル債務ヲ辨濟シ其他ノ方法ニ因リ義務ヲ消滅セシメタル總テノ保證人ハ己レノ

權利ニ基キテ有スル訴權ノ外債務者又ハ第三者ニ對シ債權者ノ有シタル總テノ權利ニ付キ財產
編第四百八十二條第一號ニ從ヒテ代位ス但第三十二條及ヒ第三十三條ノ制限ニ從フコトヲ要ス
債權者カ債務者ノ不動產ニ付キ先取特權又ハ抵當權ヲ有シ其登記ヲ爲シタルトキハ保證人ハ代
位ヲ目的トシテ自己ノ條件附ノ債權ヲ此登記ニ附記スルコトヲ得又讓渡ノ場合ニ於テハ其不動
產ヲ所持スル第三者ハ滌除ノ爲メ債權者ノ外保證人ニ對シテモ亦提供ヲ爲スコトヲ要ス

債權者カ有益ナル時期ニ於テ右ノ登記ヲ爲サザリントキハ保證人ハ第四十五條及ヒ財產編第五
百十二條ニ從ヒ債權者ニ對シテ自己ノ免責ヲ請求スルコトヲ得

第三十七條 連帶又ハ不可分ナル義務ノ數人ノ債務者アルトキハ保證人ハ其中ノ或ル者ヲ保證シ
他ノ者ヲ保證セザルトキト雖モ右ノ代位ニ依リ債務者ノ各自ニ對シテ全部ニ付キ求償スルコト
ヲ得

第三款 共同保證人間ノ保證ノ效力

第三十八條 一箇ノ債務ニ付キ數人ノ保證人アリテ其中ノ一人カ任意ナルト否トヲ問ハス債務ノ
全部ヲ辨濟シタルトキハ其保證人ハ主タル債務者ニ對スル求償ニ關シ上ニ記載シタル條件、制
限及ヒ區別ニ從ヒ或ハ事務管理ノ訴權ニ因リ或ハ債權者ノ訴權ニ因リ他ノ保證人ノ各自ニ對シ
テ均一部分ニ付キ求償スルコトヲ得

右ノ保證人カ債務ノ全部ヲ辨濟セスシテ自己ノ部分ヨリ多ク辨濟シタルトキハ其超過額ノ爲メ
ノ求償ハ他ノ共同保證人間ニ均一ニ之ヲ分ツ

第三十九條 共同保證人中ニ無資力ト爲リタル者アルトキハ辨濟シタル者ハ其無資力者ノ引受人
ニ對シテ求償權ヲ有ス若シ引受人アラザルトキハ無資力者ノ部分ハ債務ヲ辨濟シタル者ヲ加ヘ
他ノ有資力ナル共同保證人間ニ之ヲ分ツ

第四十條 前條ニ依リ訴ヲ受ケタル共同保證人ハ未タ主タル債務者ノ財産ノ檢索アラサルトキハ第二十條以下ニ定メタル規則及ヒ條件ニ從ヒテ豫メ其檢索ヲ請求スルコトヲ得

右同一ノ權利ハ保證人ノ引受人ニモ屬ス
第四十一條 連帶シテ又ハ不可分ナル債務ノ爲メ義務ヲ負擔シタル數人ノ保證人中全部履行ニ付キ訴ヲ受ケタル者ハ本訴ニ附帶シテ共同保證人ヲ擔保ノ爲メニ召喚シ之ニ對シ同一ノ判決ヲ以テ前數條ニ許サレタル言渡ヲ受ケシムルコトヲ得

第四十二條 保證人ノ一人ニ對スル時效中斷又ハ付遲滯ノ行爲ハ他ノ保證人ニ對シテ其效ナシ但其義務カ連帶ナルトキハ此限ニ在ラス

債權者ト保證人ノ一人トノ間ニ主タル債務ニ關シ有リタル判決及ヒ白白ハ他ノ保證人ヲ利スルコトヲ得然レトモ之ヲ害スルコトヲ得ス

第四十三條 相互ニ連帶シ又ハ債務者ト連帶シタル保證人中ニ無資力ト爲リタル者アルトキハ各保證人ノ間ニ第六十七條乃至第六十九條ヲ適用ス但其各條ニ記載シタル區別ニ從フ

第三節 保證ノ消滅

第四十四條 保證ハ義務消滅ノ通常ノ原因ニ由リ直接ニ消滅ス

保證ノ更改、免除、相殺及ヒ混同ハ財産編第五百二條、第五百十一條、第五百二十一條及ヒ第五百三十八條ニ於テ之ヲ規定ス

第四十五條 債權者カ故意又ハ懈怠ニテ保證人ノ其代位ニ因リテ取得スルコトヲ得ヘキ擔保ヲ減シ又ハ害シタルトキハ總テノ保證人ハ債權者ニ對シテ自己ノ免責ヲ請求スルコトヲ得

保證人ノ引受人ハ保證人ノ權利ニ基キ右ノ權利ヲ援用スルコトヲ得
第四十六條 保證ハ主タル義務消滅ノ總テノ原因ニ由リテ間接ニ消滅ス

債權者ト主タル債務者トノ間ニ爲シタル代物辨濟、更改、免除、相殺及ヒ混同ノ保證人ニ對スル效力ハ財産編第四百六十一條、第五百一一條、第五百六條、第五百二十一條及ヒ第五百三十八條ニ於テ之ヲ規定ス

第四節 法律上及ヒ裁判上ノ保證ニ特別ナル規則

第四十七條 法律ノ規定又ハ判決ニ從ヒテ保證人ヲ立ツル責アル者ハ自ラ保證人ヲ立テント約シタルトキト同シク第十五條及ヒ第十六條ニ定メタル如キ條件ヲ具備スル保證人ヲ立ツルコトヲ要ス

法律上及ヒ裁判上ノ保證人ヲ承認スル手續ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第四十八條 裁判所ハ法律カ裁判執行ノ爲メ保證人ヲ立テシムル權能ヲ付與シタル場合ニ非サレハ此カ爲メ保證人ヲ立ツ可キコトヲ命スルヲ得ス

第四十九條 裁判上ノ保證人及ヒ其引受人ハ財産檢索ノ利益ヲ有スルコトヲ得ス

第五十條 法律上及ヒ裁判上ノ保證人ハ其債務者ニ對スル擔保ノ求償ニ關シテハ常ニ之ヲ債務者ノ代理人ト看做ス

第二章 債務者間及ヒ債權者間ノ連帶

總則

第五十一條 義務ノ目的單數ナルモ主タル當事者トシテ之ニ關係スル人複數ナルトキハ其義務ハ財産編第四百三十八條ニ指示シ且下ノ二節ニ記載スル如ク受方又ハ働方ニテ連帶タルコト有リ

第一節 債務者間ノ連帶

第一款 債務者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因

第五十二條 債務者間ノ連帶即チ受方連帶ハ共同債務者ヲシテ其共通ノ利益ニ於テモ債權者ノ利

益ニ於テモ相互ニ代人タラシム

此連帶ハ合意、遺言又ハ法律ノ規定ヨリ生ス

連帶ハ之ヲ推定セス如何ナル場合ニ於テモ明示ニテ之ヲ定ムルコトヲ要ス但不可分ニ關シ第八十八條ニ記載シタルモノハ此限ニ在ラス

第五十三條 數人ノ債務者ノ連帶義務ハ同一ノ行爲ヲ以テ又同時、同所ニ於テ之ヲ契約スルコトヲ要セス但其義務ノ目的及ヒ原因ハ同一ナルコトヲ要ス

又連帶債務者ハ別異及ヒ不均一ノ體様又ハ負擔ヲ以テ責ニ任スルコトヲ得

第二款 債務者間ノ連帶ノ效力

第五十四條 數人ノ連帶債務者ヲ有スル債權者ハ其訴追セント擇ミタル債務者ニ對シ唯一人ノ債務者ニ於ケル如ク且其債務者ヨリ檢索又ハ分別ノ利益ノ抗辯ヲ受クルコト無ク義務全部ノ履行ヲ要求スルコトヲ得

又債權者ハ皆濟ヲ受クルニ至ルマテ同時又ハ順次ニ總債務者ヲ訴追スルコトヲ得

第五十五條 各債務者ハ訴ヲ受ケタルト否トヲ問ハス連帶債務全部ノ辨濟ヲ受クルコトヲ債權者ニ強要スルコトヲ得

第五十六條 連帶債務者ニシテ債務ニ於ケル全部又ハ自己ノ部分ヨリ多額ニ付キ訴ヘラレタル者ハ共同債務者ヲ訴訟ニ召喚シ附帶ノ擔保方法ヲ以テ其債務者ヲシテ答辯又ハ辨濟ヲ擔任セシムル爲メ必要ナル期間ヲ請求スルコトヲ得但債權者ニ對シテハ訴追ヲ受ケタル債務者ノミ共對手人タル可シ

共同債務者ハ亦其利益保護ノ爲メ任意ニ自費ヲ以テ訴訟ニ參加スルコトヲ得

第五十七條 連帶債務ノ履行ノ爲メ訴ヲ受ケタル各債務者ハ自己ノ權利ニ基クト共同債務者ノ權

利ニ基クトヲ問ハス義務ノ組成又ハ消滅ヨリ生スル答辯方法ヲ以テ債務ノ全部ニ付キ債權者ニ對抗スルコトヲ得

右ノ外更改、免除、相殺及ヒ混同ニ關シテハ財產編第五百一條、第五百六條、第五百九條、第五百一十一條及第五百三十五條ノ規定ニ從フ

第五十八條 債務者ノ一人ノ無能力又ハ承諾ノ瑕疵ニ基キタル答辯方法ハ其人自身ニ非サレハ之ヲ援用スルコトヲ得然レトモ此答辯方法カ一旦許サレタル上ハ債務ニ於ケル共者ノ部分ニ付キ他ノ債務者ヲリス但他ノ債務者カ契約ノ際義務履行ニ付キ共者ノ分擔ヲ豫期スルコト有リタルトキニ限ル

第五十九條 前二條ニ規定シタル種種ノ事項ニ付キ債權者ト債務者ノ一人トノ間ニ有リタル判決及ヒ自白ハ他ノ債務者ノ利害ニ於テ前二條ニ同シキ限度及ヒ區別ヲ以テ其效力ヲ生ス

第六十條 一人ノ債務者ト他ノ債務者トノ間ニ於ケル連帶ノ存在ノミニ關シテ共一人ト債權者トノ間ニ有リタル判決及ヒ自白ハ他ノ債務者ヲ害セス又之ヲ利セス

第六十一條 連帶債務者ノ一人ニ對シ債權者ノ利益ニ於テ時效ヲ中斷シ又ハ付遲滯ヲ成ス原因ハ他ノ債務者ニ對シテ同一ノ效力ヲ有ス

債務者ノ一人ニ對シ債權者ノ利益ニ於テ存スル時效停止ノ原因ハ他ノ債務者ノ利益ニ於テ其部分ノ爲メ時效ノ進行スルコトヲ妨ケス

第六十二條 義務ノ目的物ノ滅失其他總テ義務履行ノ不能カ連帶債務者ノ一人ノ過失ニ因リ又ハ其付遲滯後ニ生スルトキハ他ノ債務者ハ債權者ニ對シ連帶シテ損害賠償又ハ過意約款ノ責ニ任ス但過失アリ又ハ遲滯ニ在リシ債務者ニ對スル他ノ債務者ノ求償權ヲ妨ケス

第六十三條 連帶債務者中ニテ債務ヲ辨濟シ其他自己ノ出捐ヲ以テ共同ノ免責ヲ得セシメタル者

ハ他ノ債務者ニ對シ辨濟又ハ免責ノ限度ニ於テ其各自ノ負擔部分ニ付キ自己ノ權利ニ基キテ求償權ヲ有ス

右ノ求償中ニハ會社及ヒ代理ノ規則ニ從ヒ辨償金及ヒ必要ナル出捐ノ賠償ノ外辨償以後ノ法律上ノ利息及ヒ避クルコトヲ得サリレ費用ヲ包含ス

第六十四條 債務ヲ辨濟シタル債務者ハ債權者ノ實際受取リタルモノノ限度ニ於テノミ財產編第四百八十二條第一號ニ從ヒ法律上ノ代位ニ因リテ其債權者ノ權利及ヒ訴權ヲ行フコトヲ得

然レトモ其債務者ハ前條ニ記載シタル如ク其共同債務者ノ各自ノ間ニ於テ自己ノ訴ヲ分ツコトヲ要ス

第六十五條 不注意ニテ辨濟シタル保證人ニ對シ第三十二條及ヒ第三十三條ニ規定シタル求償ノ失權ハ訴追又ハ辨濟ヲ共同債務者ニ告知スルコトヲ忘リタル連帶債務者ニ對シテ之ヲ適用ス

第六十六條 共同債務者ノ一人カ上ニ指示シタル方法ノ一ニ因リ求償ノ行ハレタル當時ニ於テ無資力ナルトキハ無資力者ノ部分ハ辨濟シタル者ヲモ加ヘテ他ノ資力アル者ノ間ニ割合ニ應シテ之ヲ分ツ但求償者ノ責ニ歸ス可キ懈怠アリシトキハ此限ニ在ラス

第六十七條 何等ノ辨濟モ有ラサル前ニ連帶債務者ノ一人ノ無資力ト爲リタルトキハ債權者ハ其債權ノ全額ニ付キ清算ニ加ハルコトヲ得

此場合ニ於テ辨濟ノ殘額ハ他ノ債務者之ヲ負擔ス但其債務者ノ自己ノ部分外ニ負擔シタルモノニ對スル求償ハ其清算ニ加ハリタル他ノ債權者ヲ害スルコトヲ得ス

第六十八條 債務者ノ一人ノ無資力ト爲リタル前ニ一分ノ辨濟アリタルトキハ債權者ハ辨濟殘額ノ爲メニ非サレハ其清算ニ加ハルコトヲ得ヌ又一分ノ辨濟ヲ爲シタル他ノ債務者ハ第六十三條ニ從ヒ自己ノ受取ル可キモノヲ辨償セシムル爲メ清算ニ加ハルコトヲ得

第六十九條 何等ノ辨濟モ有ラサル前ニ總テノ連帶債務者又ハ其中ノ數人ノ無資力ト爲リタル場合ニ於テ債權者ハ其債權ノ全額ニ付キ各清算ニ加ハルコトヲ得

然レトモ債權者カ清算ノ一ニ於テ配當金ヲ受取リタルトキハ他ノ清算ニ於テ其債權ノ全額ニ從ヒ債權者ニ充テタル新配當金ハ以前ノ配當ニ於テ未タ受取ラサルモノノ割合ニ應スルニ非サレハ債權者之ヲ受取ルコトヲ得ヌ

受取ノ殘額ハ各清算ニ之ヲ返還ス但各清算ノ辨濟シタルモノノ割合ニ從フ

第三款 債務者間ノ連帶ノ終了

第七十條 債權者カ總債務者ニ對シテ連帶ヲ拋棄スルトキハ財產編第四百三十八條第一項ニ規定シタル如ク其債務者ノ義務ハ單ニ連合ノモノト爲リテ存シ其他ノ性質ヲ變スルコト無シ

第七十一條 財產編第五百十條ニ從ヒ明示又ハ默示ニテ債務者ノ一人又ハ數人ニ對シテノミ連帶ノ拋棄アリタルトキハ他ノ債務者ハ連帶ノ免除ヲ得タル者ノ部分ニ於テノミ其義務ヲ免カル

連帶ノ免除ヲ得サル債務者中ニ無資力者アルトキハ債權者ハ其無資力ニ付キ連帶ノ免除ヲ得タル者ノ部分ヲ負擔ス

七十二條 債權者カ連帶債務者ノ一人ヨリ供シタル擔保ニレテ他ノ債務者ノ辨濟シテ代位スルコトヲ得ヘキモノノ全部又ハ一分ヲ毀損シ又ハ滅失セシメタルトキハ他ノ債務者ハ其擔保ヲ供シタル者ノ部分ニ付キ連帶ノ義務ヲ免カレント請求スルコトヲ得

右ノ請求ニ因リテ宣告シタル免責ハ連帶ノ任意免除ト同一ノ效力ヲ有ス

第四款 全部義務

第七十三條 財產編第三百七十八條、第四百九十七條第二項及ヒ其他法律カ數人ノ債務者ノ義務ヲ其各自ニ對シ全部ノモノト定メタル場合ニ於テハ相互代理ニ付シタル連帶ノ效力ヲ適用スル

コトヲ得ス但其總債務者又ハ其中ノ一人カ債務ノ全部ヲ辨濟スル言渡ヲ受ケタルトキモ亦同シ然レトモ一人ノ債務者ノ爲シタル辨濟ハ債權者ニ對シ他ノ債務者ヲ免カレシム又辨濟シタル者ハ事務管理ノ訴權ニ依リ又ハ債權者ニ代位シテ得タル訴權ニ依リテ他ノ債務者ニ對シ其部分ニ付キ求債權ヲ有ス

第二節 債權者間ノ連帶

第一款 債權者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因

第七十四條 債權者間ノ連帶即チ働方連帶ハ權利ノ保存及ヒ行使ニ付キ其債權者ヲシテ互ニ代人ヲラシム

此連帶ハ合意又ハ遺言ヨリ生ス

第七十五條 數人ノ連帶債權者ニ對スル債務者ノ約務ハ同一ノ行爲ヲ以テ又同時、同所ニ於テ之ヲ契約スルコトヲ要セス但其義務ノ目的及ヒ原因ハ同一ナルコトヲ要ス

又債務者ハ數人ノ債權者ニ對シ別異及ヒ不均一ノ體様又ハ負擔ヲ以テ責ニ任スルコトヲ得

第二款 債權者間ノ連帶ノ效力

第七十六條 各連帶債權者ハ唯一人ノ債權者ナル如ク義務全部ノ履行ヲ債務者ニ要求スルコトヲ得

債權者ノ一人カ訴ヲ起シタルトキハ他ノ各債權者ハ共通ノ利益及ヒ自己ノ利益ノ保護ノ爲メ訴訟ニ參加スルコトヲ得

第七十七條 債務者ハ債權者ノ一人ヨリ訴追又ハ合式ノ要求ヲ受ケサル間ハ債務ノ全額ノ辨濟ヲ受クルコトヲ債權者ノ各自ニ強要スルコトヲ得之ニ反スル場合ニ於テハ訴追者又ハ要求者ニ對スルニ非サレハ辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

若シ同時ニ數人ノ訴追者又ハ要求者アルトキハ債務者ハ其總テノ者ニ對スルニ非サレハ辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第七十八條 義務組成ノ瑕疵ニ基キタル抗辯ニ付キ有リタル判決ハ債務ノ全部ニ對シ總債權者ノ利害ニ於テ其效力ヲ生ス但訴訟ニ其名ヲ出タササリシ者ニ對シテモ亦同シ

第七十九條 義務消滅ノ原因ニ基キタル抗辯ニ付キ有リタル判決ハ左ノ區別ニ從フニ非サレハ訴訟ニ與カラサリシ債權者ニ對シテ其效ナシ

第一 第七十七條ニ定メタル條件ニ從ヒ債權者ノ一人ニ爲シタル辨濟ハ全部ニ付キ總債權者ニ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得又財產編第五百二十一條第三項ニ記載シタル如ク債權者ノ一人ニ對シ債務者ノ有スル相殺ニ付テモ亦同シ但相殺ノ原因カ第七十七條ニ從ヒ債務者ヨリ其債權者ニ有效ニ辨濟スルコトヲ得ヘキ時期ニ於テ生シタルトキニ限ル

第二 債權者ノ一人ノ行爲ヨリ生シ又ハ其權利ニ基キテ生スル更改、免除及ヒ混同ハ財產編第五百一一條第三項、第五百十五條第一項及ヒ第五百三十五條第二項ニ從ヒ其債權者ノ部分ニ非サレハ債務ヲ消滅セシメス但此行爲ハ他ノ債權者ノ訴追又ハ要求ノ前ニ在ルコトヲ要ス

又右同一ノ行爲ニ關シ及ヒ辨濟又ハ相殺ニ關スル和解ニ付テモ亦同シ

第八十條 債權者中ノ一人ノ一身ニ限ル債務者ノ抗辯ニ付キ有リタル判決ハ他ノ債權者ヲ害セス又之ヲ利セス又債權者ノ一人カ其連帶ニ於ケル權利ニ付キ債務者ト爲シタル和解ニ付テモ亦同シ

第八十一條 債權者ノ一人カ債務者ニ對シテ時効ヲ中斷シ又ハ其債務者ヲ遲滞ニ付スル行爲ハ全部ニ付キ他ノ債權者ヲ利ス

債權者ノ一人ノ利益ニ於テ法律ノ設定シタル時効ノ停止ハ其部分ニ限り其一人ノミヲ利ス
第八十二條 義務ノ全部又ハ一分ノ履行ヲ得タル連帶債權者ハ他ノ債權者ノ特別ノ關係及ヒ其相
互ノ部分ニ從ヒ之ニ其利益ヲ分與スルコトヲ要ス

第三款 債權者間ノ連帶ノ終了

第八十三條 債權者間ノ連帶ハ拋棄ニ因リテ止ム其拋棄ハ明示ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス
第八十四條 連帶ノ拋棄ハ債權者ノ一人若クハ數人又ハ其總員ヨリ之ヲ爲スコトヲ得

總債權者ノ働方連帶ノ拋棄ハ第七十條ニ規定シタル如ク受方連帶ノ拋棄カ共同債務者ニ對シテ
生セシムルト同一ノ效力ヲ其債權者間ニ生セシム

若シ債權者ノ一人又ハ數人カ拋棄ヲ爲シタルトキハ他ノ債權者ハ此拋棄ヲ爲シタル者ノ部分ニ
付テノミ訴ヲ爲シ又ハ辨濟ヲ受クル權利ヲ失フ

第八十五條 連帶ノ拋棄ハ債務者ノ承諾ナクシテ有效ナリ

然レトモ其拋棄ハ之ヲ債務者ニ告知セシカ又ハ債務者明確ニ之ヲ知りタルトキニ非サレハ上ノ
規定ヲ以テ債務者ニ許シタル辨濟其他ノ行為ニ對シテ債權者ヨリ之ヲ援用スルコトヲ得ス

債務者ハ拋棄ヲ申立ツル利益アルトキハ之ヲ申立ツルコトヲ得又拋棄カ其權利ノ詐害ニ於テ爲
サレタルトキハ之ヲ廢止スルコトヲ得

第三章 任意ノ不可分

第八十六條 財産編第四百四十一條及ヒ第四百四十二條ニ規定シタル不可分ノ外債務ハ尙ホ數人
ノ債務者ノ負擔又ハ數人ノ債權者ノ利益ニ於テ債務履行ノ擔保トシテ任意上不可分タルコトヲ
得但財産編第四百四十三條ニ指示シタル如ク受方又ハ働方ノ連帶ニ併合シ又ハ併合セサルコト
有リ

任意ノ不可分ハ合意又ハ遺言ヲ以テ之ヲ設定スルコトヲ得此不可分ハ明示タルコトヲ要ス

第八十七條 債務者ノ負擔ニ於テ設定シタル不可分ハ同時ニ働方タル可キコトノ明示アルニ非サ
レハ債權者ノ利益ニ於テ存立セス

又債權者ノ利益ニ於テ設定シタル不可分ハ同時ニ受方タル可キコトノ明示アルニ非サレハ債務
者ノ負擔ニ於テ存立セス

第八十八條 受方ナルト働方ナルトヲ問ハス任意ノ不可分ヲ設定シタルトキハ受方又ハ働方ノ連
帶ヲ明示ニテ阻却セサル場合ニ限り債務者又ハ債權者ノ間ニ此連帶ノ效力ヲ生セシム

第八十九條 債務者ノ一人ニ對シテ時効ヲ中斷又ハ停止スル原因ハ總債務ニ付キ他ノ債務者ニ對
シテ中斷又ハ停止ヲ生ス

又債權者ノ一人ノ權利ヨリ生スル時効ノ中斷又ハ其停止ノ原因ハ他ノ債權者ヲ利ス

第九十條 債權カ受方又ハ働方ニテ同時ニ連帶及ヒ不可分ナルトキハ第八十三條及ヒ財産編第五
百十條ニ記載シタル區別ニ從ヒ明示ナルト默示ナルトヲ問ハス連帶ノ拋棄ハ亦任意ノ不可分ノ
拋棄ヲ惹起ス但不可分ノ拋棄ハ連帶ヲ存立セシム

第九十一條 財産編第四百四十四條乃至第四百四十九條、第五百一條第四項、第五百六條第三項、第
五百九條第一項、第五百十三條、第五百十五條第二項、第五百二十一條第四項、第五百二十六條及ヒ
第五百三十七條第二項ノ規定ハ任意ノ不可分ニ之ヲ適用ス

債權者カ不可分ニ義務ヲ負ヒタル債務者ノ代位ニ因リテ得ルコト有ル可キ擔保ヲ滅失セシメ
又ハ減少セシメタルトキハ其債務者ハ債權者ニ對シテ第七十二條ノ免責ヲ援用スルコトヲ得

第二部 物上擔保

第一章 留置權

第九十二條 留置權ハ財産編及ヒ財産取得編ニ於テ特別ニ之ヲ規定シタル場合ノ外債權者カ既ニ正當ノ原因ニ由リテ其債務者ノ動産又ハ不動産ヲ占有シ且其債權カ其物ノ讓渡ニ因リ或ハ其物ノ保存ノ費用ニ因リ或ハ其物ヨリ生シタル損害賠償ニ因リテ其物ニ關シ又ハ其占有ニ牽連シテ生シタルトキハ其占有シタル物ニ付キ債權者ニ屬ス

委任ナクシテ他人ノ事務ヲ管理シタル者ハ必要ノ費用及ヒ保持ノ費用ノ爲メニ非サレハ其管理シタル物ニ付キ留置權ヲ有セス

第九十三條 債權者カ留置スル權利ヲ有シタル物ノ一分ノミヲ留置シタルトキ其部分ハ總債務ヲ擔保スルニ足ルニ於テハ之ヲ擔保ス

之ニ反シテ債權者ハ債務者ヨリ一分ノ辨濟ヲ受ケタリト雖モ全部ノ辨濟ヲ受クルニ至ルマテ留置權ニ服シタル總テノ物ヲ留置スルコトヲ得

第九十四條 留置權ハ留置物ノ價額ニ付キ債權者ニ先取特權ヲ付與セス

然レトモ留置物ヨリ天然又ハ法定ノ果實又ハ產出物ノ生スルトキハ留置權者ハ他ノ債權者ニ先ダチテ之ヲ收取スルコトヲ得但其果實又ハ產出物ハ其債權ノ利息ニ充當シ猶ホ餘分アルトキハ元本ニ充當スルコトヲ要ス

留置權者ハ其收取スルコトヲ怠リタル果實及ヒ產出物ニ付キ其責ニ任ス

第九十五條 留置權ハ債務者カ留置物ヲ讓渡シ又他ノ債權者カ之ヲ差押ヘ及ヒ賣却セシムル妨ト爲ラス

然レトモ孰レノ場合ニ於テモ取得者ハ留置權者ニ全ク辨濟セスシテ其物ヲ占有スルコトヲ得ス第九十六條 右ノ外動産又ハ不動産ノ留置權者ハ次ノ二章ニ規定シタル如ク動産又ハ不動産ノ質取債權者ト同一ノ責任ニ從フ

此他動産質及ヒ不動産質ニ關スル規定ハ此章ノ規定ニ觸レサル限りハ留置權ニ之ヲ適用ス特ニ債權者カ有意ニテ留置權ヲ行フコトヲ怠リ又ハ實際之ヲ行フコトヲ止メタルトキハ其留置權ヲ失フ

第二章 動産質

第一節 動産質契約ノ性質及ヒ成立

第九十七條 動産質ハ債務者カ一箇又ハ數箇ノ動産ヲ特ニ其義務ノ擔保ニ充ツル契約ナリ

第九十八條 動産質契約ハ債務者ノ委任ヲ受ケ又ハ好意ニテ債務者ノ爲メ擔保ヲ供スル第三者ト債權者トノ間ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

孰レノ場合ニ於テモ動産質ヲ供シタル第三者ハ第三十條及ヒ第三十一條ニ從ヒ保證人ノ如ク債務者ニ對シテ求償權ヲ有ス

第九十九條 動産質ハ其物ヲ處分スル能力ヲ有スル者ニ非サレハ有效ニ之ヲ供スルコトヲ得ス

合意上、法律上及ヒ裁判上ノ管理人ニ付テモ亦同シ此等ノ者ハ其權限ヲ踰エサルコトヲ要ス若シ債務ニ關係ナキ第三者ヨリ動産質ヲ供シタルトキハ其第三者ハ第十二條ニ記載シタル如ク無償ニテ物ヲ處分スル能力ヲ有スルコトヲ要ス

第一百條 動産質ハ債權及ヒ質物ヲ明カニ指定セル證書ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ設定スルコトヲ得ス

右質物ハ之ヲ他物ニ易フルコトヲ得サル様詳細ニ記載シ且要用アルトキハ之ヲ評價スルコトヲ要ス

若シ質物カ定量物ナルトキハ其種類、數量、尺度ヲ以テ之ヲ指定スルコトヲ要ス

第一百一條 法律ニ從ヒ證人ニ依リテ債權ヲ證スルコトヲ得ル場合ニ於テハ證書ノ調製ヲ要セス此

場合ニ於テハ債權ノ額及ヒ質物ノ相違ナキコト共性質價額ヲ或ハ併合シ或ハ各別ニ入證ヲ以テ證スルコトヲ得

第二百二條 動産質ハ質取債權者カ有體ナル質物ヲ現實ニ且繼續シテ占有スルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニモ他ノ債權者ニモ對抗スルコトヲ得ス

然レトモ質物ハ當事者雙方カ選定シ又ハ債權者カ自己ノ責任ヲ以テ選定シタル第三者ノ手ニ之ヲ寄託スルコトヲ得

此規定ハ債權ノ無記名證券ニモ之ヲ適用ス

第二百三條 質物カ債權ノ記名證券ナルトキハ質取債權者ハ其證券ヲ占有スルコトヲ要ス

此他記名證券ノ質ノ設定ニ付テハ債權ノ讓渡ヲ告知スル通常ノ方式ヲ以テ第三債務者ニ其設定ヲ告知シ又ハ其第三債務者カ任意ニ之ニ參加スルコトヲ要ス

又財産編第三百四十七條ノ規定ハ右ノ場合ニ之ヲ適用ス

右ハ總テ裏書ヲ以テ取引ス可キ商證券又ハ商品ノ質ニ關シ商法ニ記載シタルモノヲ妨ケス

第二百四條 會社ノ記名ノ株券又ハ債券ヲ質ト爲ストキハ證券ノ交付ノ外會社定款又ハ法律ニ於テ株券又ハ債券ノ讓渡ノ爲メニ定メタル方式ヲ以テ之ヲ會社ニ告知シ其帳簿ニ之ヲ記入スルコトヲ要ス

第二百五條 動産質ハ當事者ノ意思ニ從ヒ働方及ヒ受方ニテ不可分タリ但反對ナル明示ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス

動産質ハ債務者ヨリ債務ノ一分ヲ辨濟シタルトキト雖モ元利及ヒ費用ノ皆濟ニ至ルマテ質物ノ全部及ヒ各箇ニ於テ存在ス

第二節 動産質契約ノ效力

第二百六條 質取債權者ハ質物ヲ返還スルマテ其看守及ヒ保存ニ付キ善良ナル管理人ノ注意ヲ加フル責アリ

質取債權者ハ債務者ノ許諾ヲ受ケスシテ質物ヲ質貸スルコトヲ得ス又債務者ノ許諾ヲ受ケタルトキ又ハ物ノ使用カ其保存ニ必要ナルトキニ非サレハ自ラ之ヲ使用スルコトヲ得ス

若シ質取債權者カ質物ヲ濫用スルトキハ裁判所ハ其失權ヲ宣告スルコトヲ得

第二百七條 質取債權者ハ自己ノ責任ヲ以テ質物ヲ自己ノ債權者ニ轉質ト爲スコトヲ得此場合ニ於テハ轉質ヲ爲ササレハ生セサル可キ意外又ハ不可抗ノ危險ニ付テモ亦其責ニ任ス

第二百八條 質物カ果實又ハ產出物ヲ生スルトキハ之ニ關シ質取債權者ハ第九十四條第二項ニ定メタル留置權者ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

質ト爲シタル債權ニ關シテハ質取債權者ハ其利息ヲ收取シ之ヲ自己ノ債權ニ充當ス然レトモ債務者ノ特別ナル委任ヲ受ケスシテ其元本ヲ受取ルコトヲ得ス但裏書ヲ以テ取引ス可キ證券ニ關スルトキハ此限ニ在ラス

第二百九條 質取債權者カ質物保存ノ爲メ必要ノ出費ヲ爲シタルトキハ債權ニ先チ動産質ヲ以テ其出費ノ辨償ヲ擔保ス

質物ノ隠レタル瑕疵ニ因リテ債權者ノ受ケタル損害ノ賠償ニ付テモ亦同シ

第三百十條 質取債權者ハ動産質ノ附キタル主從ノ債務及ヒ前條ノ償金ノ皆濟ニ至ルマテ債務者及ヒ其讓受人ニ對シテ質物ノ占有ヲ留置スルコトヲ得

債權者ハ其債權ノ滿期ニ至ラサル間ハ債務者ノ他ノ債權者ヨリ爲ス質物ノ差押及ヒ其競賣ヲ拒ムコトヲ得

第三百十一條 動産質ノ附キタル債務カ滿期ト爲リタルトキ債務者履行ヲ爲ササルニ於テハ質取債

權者又ハ其他ノ債權者ヨリ質物ノ競賣ヲ求ムルコトヲ得質取債權者ハ他ノ債權者ニ先ダテ元利費用及ヒ第百九條ニ掲ケタル償金ノ辨濟ヲ受ク

第百十二條 他ノ債權者ヨリ競賣ヲ求メス又ハ之ヲ實行スルコトヲ得サルトキ質取債權者ハ質物ヲ已レノ有ト爲サントスルコトニ付キ債務者ト一致セサルニ於テハ鑑定人ノ評價シタル價額ニ達スルマテ質物ヲ辨濟ニ充ツ可キコトヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得但其請求審ヲ債務者ニ豫メ提示スルコトヲ要ス

質物ノ價額カ債務ヲ超ユル場合ニ於テハ質取債權者ハ債務者ニ其超過額ヲ辨償スルコトヲ要ス
第百十三條 總テ動産質契約ノ約款又ハ債務滿期前ノ合意ニシテ債權者ニ其債權ノ全部又ハ一分ニ付キ辨濟ノ爲メ裁判上ノ評價ナクシテ流質ヲ許スモノハ當然無効ナリ

本條ノ禁止ヲ犯ス爲メ債務者カ債權者ニ爲シタル受戻約款附ノ賣買其他ノ合意ハ之ヲ無効ト宣告スルコトヲ得

本條ニ定メタル無効ハ質取債權者ヨリ之ヲ援用スルコトヲ得スシテ債務者又ハ其承繼人ノミ之ヲ援用スルコトヲ得

第百十四條 質物カ質取債權者ノ方ニ存スル間ハ其債務ノ免責時効ノ成就ヲ停止ス

第百十五條 質物ノ占有ハ常ニ容假ノ占有ニシテ其占有ノ繼續期ノ如何ニ拘ハラヌ又債務カ辨濟其他ノ方法ニテ消滅シタル後ト雖モ質取債權者ハ取得時効ヲ援用スルコトヲ得ス
然レトモ財產編第百八十五條ニ定メタル二箇ノ場合ニ於テハ容假タルコトハ止ム

第三章 不動産質

第一節 不動産質ノ目的、性質及ヒ組成

第百十六條 不動産質契約ハ不動産質債權者ニ他ノ總債權者ヨリ先ニ其不動産ノ果實及ヒ入額ヲ

收取スル權利ヲ付與ス

債務ノ滿期ニ至レハ債權者ハ抵當權アル債權者ノ權利ヲ行フ

此期限ハ三十年ヲ超過スルコトヲ得ス之ヲ超ユルトキハ當然三十年ニ減縮ス

此期限ハ總令之ヲ延フルモ前後通算シテ三十年ヲ超過スルコトヲ得ス

第百十七條 不動産質ハ債務者ノ爲メ第三者之ヲ設定スルコトヲ得其不動産質ハ債務者ト設定者トノ間ニ於テハ動産質ノ爲メ第九十八條ニ定メタル效力ヲ生ス

第百十八條 不動産質ハ第百九十七條及ヒ第百九十八條ニ從ヒ抵當ト爲スコトヲ得ヘキ財産ノ上ニ非サレハ之ヲ設定スルコトヲ得ス

此他設定者ハ質ト爲ス財産ノ收益權ヲ自ラ有スルコトヲ要ス其質ハ如何ナル場合ニ於テモ其收益權ノ繼續期間ヲ超過スルコトヲ得ス

不動産質設定ノ爲メニ要スル能力ハ第百九條及ヒ第百十條ニ定メタル抵當設定ノ能力ト同一ナリ

第百十九條 不動産質カ合意上ノモノナルトキハ其質ハ公正證書又ハ私署證書ヲ以テスルニ非サレハ當事者ノ間ニ之ヲ設定スルコトヲ得ス

又不動産質ハ第百二十二條ニ從ヒ遺言上ノ抵當ノ許サルル場合ニ於テハ遺言ヲ以テ之ヲ設定スルコトヲ得

不動産質ハ之ヲ設定スル證書又ハ遺言書ニ依リ財產編第三百四十八條ニ從ヒテ登記シタル後ニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

右ノ登記ハ抵當ノ順位ヲ保存スル爲メ抵當ノ登記ニ同シキ效力ヲ有ス
第百二十條 不動産質ヲ設定スル證書又ハ遺言書ニハ其不動産ノ精確ナル指示ノ外元利ノ債權額

ヲ指示スルコトヲ要ス

右ノ指示カ不十分ナル場合ニ於テハ既ニ爲シタル登記ニ補足ノ合意ヲ附記ス然レトモ此附記ハ共日附後ニ非サレハ效力ヲ生セス

第二百一十一條 質ト爲シタル物權カ利益權、質借權又ハ永借權ナルトキハ此權利ノ設定證書ニ依ル登記ニ共質權ヲ附記スルヲ以テ足レリトス

第二百一十二條 質取債權者ハ右ノ外動産質ニ關シ第二百二條ニ記載シタル如ク其債權ヲ擔保スル不動産ヲ現實ニ占有スルコトヲ要ス

第二百一十三條 不動産質ハ動産質ニ關シ第二百五條ニ記載シタル如ク働方及ヒ受方ニテ不可分アリ

第二節 不動産質ノ效力

第二百一十四條 質取債權者ハ質ニ取リタル不動産ヲ財産編第一百九條乃至第二百二十二條ニ規定シタル制限ニ從ヒ且質契約ノ期間ニ限り貸貸スルコトヲ得但反對ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス又質取債權者ハ自己ノ權利ノ繼續期間ニ限り動産質ニ付キ第一百七條ニ記載シタル如ク自己ノ責任ヲ以テ其不動産ヲ轉賣ト爲スコトヲ得

第二百一十五條 質取債權者ハ租稅其他毎年ノ公課ヲ負擔ス

質取債權者ハ小修繕及ヒ必要且急迫ナル大修繕ヲ爲ス責ニ任ス若シ此ニ違フトキハ損害賠償ヲ負擔ス但此大修繕ノ費用ハ債務者之ヲ償還ス

第二百一十六條 建物、宅地ノ質ニ付テハ債權者ハ自ラ之ヲ領スルト之ヲ貸貸スルトヲ問ハス其貸貸ヲ自己ノ債權ノ利息ニ充當シ猶ホ超過額アルトキ又ハ債權カ無利息ナルトキハ元本ニ充當ス田畑山林ノ質ニ付テハ當事者ノ間ニ於テ果實ト利息トハ計算セスレテ相殺シタリト看做ス但反對ノ合意アルトキ又他ノ債權者ニ對シ又ハ利息ノ法律上ノ制限ニ付キ顯著ナル詐害アルトキハ

此限ニ在ラス

貸貸又ハ果實ノ利息ニ充當スルニハ毎年ノ公課及ヒ保持、管理、栽培ノ費用ヲ控除シタル純益價額ニ付キ之ヲ爲ス

第二百一十七條 質取債權者ハ如何ナル反對ノ合意アルニ拘ハラズ常ニ己レノ爲メ負擔重キニ過クルト思慮スル收益權ヲ將來ニ向ヒテ拋棄シ無利息ニテ抵當權ノミヲ存スルコトヲ得然レトモ適當ノ時期ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百一十八條 債權者ハ債務ノ皆濟ニ至ルマテ質ニ取リタル不動産ノ占有ヲ留置スルコトヲ得然レトモ質取債權者ハ債務ノ滿期前又ハ滿期後ニ債務者又ハ他ノ債權者ヨリ求メタル賣却ニ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

又質取債權者ハ滿期後自ラ賣却ヲ申立ツルコトヲ得

右ハ下ニ指示シタル別異ノ效力ヲ生ス

第二百一十九條 他ノ債權者ヨリ求メタル賣却ノ場合ニ於テハ質取債權者ハ其順位ニ於テ其抵當權ヲ行ヒ且其債權者カ如何ナル先取特權又ハ抵當權アル他ノ債權者ニモ先ンセラレサルトキ及ヒ先ンセラレルモ他ノ債權者カ總テノ代價ヲ取盡サスシテ殘餘アルトキハ取得者ハ質取債權者ノ尙ホ受ク可キモノノ爲メ第二百十六條ニ從ヒ質ノ終了ス可キ時期ニ至ルマテ留置權ニ遵フ責アリ

債務者ノ爲シタル賣却ニシテ先取特權若クハ抵當權アル債權者又ハ質取債權者ノ請求ニ因リテ増價競賣ノ有リタル場合ニ於テモ亦同シ然レトモ質取債權者自ラ賣却ヲ求メタル場合ニ於テハ其收益權及ヒ留置權ハ消滅ス但其賣却ニ付キ明白ニ此權利ヲ留保シ且順位ノ如何ヲ問ハス他ニ先取特權又ハ抵當權アル債權者アラサルトキハ此限ニ在ラス

右二箇ノ條件アルトキハ取得者債務ノ消滅ニ至ルマテ質權ニ遵フ責アリ

第三百三十條 第六條、第九條、第十條及ヒ第十三條乃至第十五條ハ不動産質ニモ之ヲ適用ス

第四章 先取特權

總則

第三百三十一條 先取特權ハ合意ナキモ法律カ或ル債權ノ原因ニ附著セシメタル優先權ナリ但動産質及ヒ不動産質ヨリ生スル先取特權ハ合意上ノモノトス

先取特權ハ法律ノ制限レテ定メタル原因、條件及ヒ目的ニ於ケルニ非サレハ存在セズ

先取特權カ第三所持者ニ對シテ追及權ヲ付與スル場合及ヒ其權利行使ノ條件モ亦法律ヲ以テ之ヲ定ム

第三百三十二條 先取特權ハ動産質及ヒ不動産質ニ關シテ第五百條及ヒ第二百二十三條ニ記載シタル如ク働方及ヒ受方ニテ不可分ナリ

第三百三十三條 先取特權ノ負擔アル物カ第三者ノ方ニテ滅失シ又ハ毀損シ第三者此カ爲メ債務者ニ賠償ヲ負擔シタルトキハ先取特權アル債權者ハ他ノ債權者ニ先タチ此賠償ニ於ケル債務者ノ權利ヲ行フコトヲ得但共先取特權アル債權者ハ辨濟前ニ合式ニ拂渡差押ヲ爲スコトヲ要ス

先取特權ノ負擔アル物ヲ賣却シ又ハ貸貸シタル場合及ヒ其物ニ關シ權利ノ行使ノ爲メ債務者ニ金額又ハ有價物ヲ辨濟ス可キ總テノ場合ニ於テモ亦同シ

第三百三十四條 先取特權ノ種類ハ之ヲ左ニ掲ク

第一 債務者ノ總動産及ヒ附隨ニテ其總不動産ニ係ル一般ノ先取特權

第二 或ル動産ニ係ル特別ノ先取特權

第三 或ル不動産ニ係ル特別ノ先取特權

第三百三十五條 一般又ハ特別ノ先取特權ヲ有スル債權者ノ相互ノ順位ハ本章ノ各節ニ於テ之ヲ規定ス

不動産ニ付キ先取特權ヲ有スル債權者ハ共同一ノ不動産ニ付キ抵當權ヲ有スル債權者ニ先タツ但法律ニ於テ特別ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

同原因又ハ同順位ノ先取特權アル債權者ハ其債權額ノ割合ニ應シテ辨濟ヲ受ク

第三百三十六條 本法ニ定メタル先取特權ハ商法又ハ特別法ヲ以テ規定シ又ハ規定ス可キ先取特權ヲ妨ケス

商法又ハ特別法ノ先取特權ハ別段ノ規定ナキ場合ニ於テハ下ニ定メタル一般ノ規則ニ從フ

第一節 動産及ヒ不動産ニ係ル一般ノ先取特權

第一款 一般ノ先取特權ノ原因

第三百三十七條 動産及ヒ不動産ニ係ル先取特權アル債權ハ之ヲ左ニ掲ク但下ニ定メタル制限及ヒ條件ニ從フ

第一 訟事費用

第二 葬式費用

第三 最後疾病費用

第四 雇人給料

第五 日用品供給

第一則 訟事費用ノ先取特權

第三百三十八條 訟事費用ノ先取特權ハ或ハ債務者ノ財産ヲ保存スル爲メ或ハ其財産ヲ清算配當ス

ル爲メ各債權者ノ共同利益ニ於テ正當ニ爲セル裁判上若クハ裁判外ノ總テノ行爲ニ付キ金錢ノ立替ヲ爲シタル債權者又ハ給料若クハ謝金ヲ受取ル可キ債權者ニ屬ス
總債權者ニ有益ナラザリシ費用ニ付テハ先取特權ハ特別ノモノニシテ其費用ノ爲メ利益ヲ得タル債權者ニ對スルニ非サレハ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

第二則 葬式費用ノ先取特權

第三百二十九條 債務者ノ身分ニ應シ且慣習ニ從ヒテ爲シタル葬式費用ハ先取特權アルモノトス
先取特權ハ債務者ノ擔當ニ係ル同居親族ノ葬式費用ニモ亦之ヲ適用ス
此先取特權ハ葬式ニ連續シタル出費ニ及ハス縱令其出費カ慣習上ノモノタルモ亦同シ

第三則 最後疾病費用ノ先取特權

第四百十條 最後疾病費用ノ先取特權ハ債務者又ハ前條ニ指定シタル親族ノ死亡前ノ疾病ニ關スル醫師、藥商、看病人其他此ニ類スル費用ヲ包含ス但債務者ノ破産前又ハ無資力前ノ疾病及ヒ其親族ノ疾病ニ關スル費用モ亦同シ

長病ノ場合ニ於テハ右ノ費用ノ先取特權ハ最後ノ一年ノ費用ニ之ヲ制限ス

右ノ費用ヲ生セシメタル疾病ノ外ナル原因ノ爲メ死亡アリタルトキト雖モ先取特權ハ猶ホ存ス

第四則 雇人給料ノ先取特權

第四百十一條 雇人ノ先取特權ハ債務者又ハ其擔當ニ係ル同居親族ノ雇人ニ屬ス

右ノ先取特權ハ最後ノ一年ノ給料ノミヲ擔保ス

第五則 日用品供給ノ先取特權

第四百十二條 日用品供給ノ先取特權ハ債務者又ハ其擔當ニ係ル同居ノ親族及ヒ雇人ノ生活ニ必要ナル日用品ノ供給者ニ屬ス

右ノ先取特權ハ最後ノ六個月間ノ供給ノミヲ包含ス

第二款 一般ノ先取特權ノ效力及ヒ順位

第四百十三條 一般ノ先取特權ハ先取特權アル各債權者カ動産ニ付キ配當ヲ受ケ尙ホ不足アルニ非サレハ不動産ニ付キ之ヲ行フコトヲ得ス
然レトモ動産代價ノ配當ニ先ダチ不動産代價ノ配當アルトキハ債權者ハ假ニ條件附ニテ之ニ加入スルコトヲ得但日後動産代價ノ配當加入ニ於テ辨濟ヲ得サル部分ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス

動産代價ノ配當ニ有益ナル時期ニ加入スルコトヲ怠リタル債權者ハ動産ニ付キ受ク可カリシモノノ限度ニ於テ不動産ニ付キ其優先權ヲ失フ

第四百十四條 一般ノ先取特權ノ互ニ競合スル場合ニ於テハ第三百二十八條乃至第四百十二條ニ列記シタル相互ノ順序ニ從ヒテ配當加入ヲ定ム

右ノ數條ニ掲ケタル同原因ノ債權ハ同順位ニテ配當ニ加入ス

若シ一般ノ先取特權カ動産ニ係ル特別ノ先取特權ト競合スルトキハ其順位ハ下ノ第二節ニ於テ之ヲ規定ス
不動産ニ係ル特別ノ先取特權ハ一般ノ先取特權ニ先ダチ又特別ノ抵當ハ後ノ設定ニ係ルト雖モ詐害ナキニ於テハ一般ノ先取特權ニ先ダツ

然レトモ一般ノ先取特權ハ其發生前ノ取得ニ係ル一般ノ抵當ニモ先ダツ

一般ノ抵當ノ負擔アル總不動産ヲ同時ニ賣却シタル場合ニ於テハ一般ノ先取特權ハ各不動産ノ賣却代價ノ割合ニ應シテ其總不動産ニ付キ配當ニ加入ス
若シ順次ニ右ノ不動産ヲ賣却スルトキハ一般ノ先取特權ハ初ノ賣却ニ付キ全部之ヲ充當シ尙ホ

附隨ニテ次ノ賣却ニ付キ之ヲ充當ス且此先取特權ヲ負擔セシ不動産ニ付キ一般ノ抵當ヲ有スル債權者ハ他ノ不動産ノ賣却代價ニ付キ求償權ヲ有ス

第四百四十五條 一般ノ先取特權ハ不動産カ債務者ニ屬スル間ハ他ノ債權者ニ對抗スル爲メ其不動産ニ付テノ登記ヲ要セス

第二節 動産ニ係ル特別ノ先取特權

第一款 動産ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第四百四十六條 上ノ第二章ニ規定シタル先取特權ヲ有スル動産質取債權者ノ外下ニ指定シタル動産物ニ付キ先取特權ヲ有スル債權者ハ之ヲ左ニ掲ク

- 第一 不動産ノ質貸人
- 第二 種子及ヒ肥料ノ供給者
- 第三 農業ノ稼人及ヒ工業ノ職工
- 第四 動産物ノ保存者
- 第五 動産物ノ賣主
- 第六 旅店主人
- 第七 舟車運送營業人
- 第八 保證金ヲ供スル義務アル公吏ノ職務上ノ所爲ニ對スル債權者
- 第九 右保證金ノ貸主

第一則 不動産質貸人ノ先取特權

第四百四十七條 居宅、倉庫其他ノ建物ノ質貸人ハ質借人ノ使用又ハ商工業ノ爲メ此建物内ニ備ヘタル動産物ニ付キ先取特權ヲ有ス

右ノ動産物カ質借人ニ屬セスト雖モ先取特權ハ猶ホ存ス但質貸人カ質貸場所ニ此動産物ノ持込ヲ知リタル當時其物ノ質借人ニ屬セサル事實ヲ知ラス且其事實ヲ豫見スルニ足ル可キ理由アラサリシトキニ限ル

質貸人ノ先取特權ハ現金ニ付キ又質借人及ヒ其家族ノ一身ノ使用ニ供シタル金玉寶石ニ付キ又無記名ナルモ證券ニ付キ之ヲ行フコトヲ得ス

第四百四十八條 質貸人ハ家賃ノ當期分及ヒ後ノ一期分ノ辨濟ヲ擔保スルニ足ル可キ動産ヲ質貸シタル場所ニ備フルコトヲ質借人ニ要求スルコトヲ得質借人之ヲ爲サス且此家賃ノ前拂又ハ之ニ相當スル其他ノ擔保ヲ供セサルトキハ質貸人ハ質貸借ヲ解除スルコトヲ得尙ホ損害アルトキハ其賠償ヲ求ムルコトヲ得

質貸場所ニ備ヘタル動産ヲ質貸人ノ許諾ナクシテ取去リタルモ別ニ詐害ナキニ於テハ質貸人ハ其擔保カ不足ト爲リタルトキ且質借人ニ屬スル權利ノ限度内ニ非サレハ此動産ヲ其場所ニ復セシムルコトヲ得ス

然レトモ質貸人ノ權利ヲ詐害シテ爲シタル行爲ニ付テハ質貸人ハ財産編第三百四十一條以下ニ記載シタル條件及ヒ區別ニ從ヒ第三者ニ對シテ其行爲ヲ廢罷セシムルコトヲ得

右ハ總テ第四百三十三條ニ依リテ質貸人ノ有スル權利ヲ妨ケス

第四百四十九條 質貸借ト永貸借トヲ問ハス田畑山林ノ質貸人ハ質借人カ居宅並ニ土地利用ノ建物内ニ備ヘタル動産ニ付キ及ヒ土地ノ利用ニ供シタル動物、農具其他ノ器具ニ付キ上ト同一ノ限度ニ於テ先取特權ヲ有ス

右ノ質貸人ハ質貸シタル土地ノ收穫物其他ノ產出物カ猶ホ土地ニ附著スルト土地ニ保存シ有ルトヲ問ハス其收穫物及ヒ產出物ニ付キ先取特權ヲ有ス

分果質貸人ハ質貸シタル土地ノ收穫物其他ノ產出物ノ中ニテ自己ノ權利ヲ有スル部分カ猶ホ分果小作人ノ方ニ存スル間ハ直接ニ其收穫物其他ノ產出物ノ上ニ先取特權ヲ行フ

第五百十條 質借權ノ讓渡又ハ轉貸ノ場合ニ於テ質貸人ハ質貸場所ニ備ヘ有ル動產カ讓受人又ハ轉借人ニ屬スルコトヲ知ルト雖モ其先取特權ハ此等ノ物ニ及フ

此場合ニ於テ先取特權ハ第三百三十三條ニ從ヒ讓渡又ハ轉貸ノ代價トシテ主タル質借人ノ受取ル可キ金額ニ及フ但前拂ヲ以テ質貸人ニ對抗スルコトヲ得ス

第五百十一條 質借人ノ財産ノ總清算ノ場合ニ於テハ質貸人ハ土地、建物ノ借賃其他ノ負擔ニ付キ前期、當期及ヒ次期ノ分ニ非サレハ前數條ニ定メタル先取特權ヲ有セス

此他先取特權ハ質借ヨリ生スル他ノ合意上ノ義務、前期及ヒ當期ニ於テハ質借人ノ過失又ハ懈怠ノ爲メ質貸人ノ受ク可キ賠償及ヒ質貸人カ請求スルコトヲ得ヘキ解除ニ添ヒタル損害賠償ヲ擔保ス

第五百十二條 右清算ノ場合ニ於テ他ノ債權者ハ自己ノ利益ノ爲メ質貸借ノ解除ヲ防止シ及ヒ初ヨリ轉貸又ハ讓渡ノ禁止アルニ拘ハラヌ其質借權ヲ轉貸シ又ハ讓渡スコトヲ得但質貸借殘期ノ爲メ質貸人ニ土地、建物ノ借賃其他ノ納額ヲ擔保スルコトヲ要ス

第二則 種子及ヒ肥料ノ供給者ノ先取特權

第五百十三條 所有者、用益者、質借人又ハ占有者ニ種子及ヒ肥料ヲ供給シタル者ハ之ヲ用非タル年ノ果實ニ付キ先取特權ヲ有ス

蠶種及ヒ蠶ノ飼養ニ供スル桑葉ヲ供給シタル者ニ付テモ亦同シ

第三則 農業稼人及ヒ工業職工ノ先取特權

第五百十四條 雇人ノ外其年ノ耕耘收穫ノ爲メ勞動シタル稼人ハ一个年間ノ給料ノ爲メ其收穫物

ニ付キ先取特權ヲ有ス

又工業ノ職工ハ工業ヨリ生スル產出物又ハ製造品ニ付キ先取特權ヲ有ス但其年ノ給料中最後ノ三個月間ノ爲メノミニ限ル

第四則 動產物保存者ノ先取特權

第五百十五條 動產物ノ修繕又ハ保存ノ費用ニ付テハ債權者ハ第九十二條ニ從ヒ己レニ屬スル留置權ヲ行ハサルトキト雖モ其修繕又ハ保存シタル物ニ付キ先取特權ヲ有ス

右ノ先取特權ハ金額、有價物其他動產物ニ關スル物權又ハ人權ヲ債務者ノ爲メニ追認シ保存シ又ハ實行セシメタル裁判上又ハ裁判外ノ行爲ノ費用ニ之ヲ適用ス

第五則 動產物賣主ノ先取特權

第五百十六條 動產物ノ賣主ハ代價辨濟ノ爲メ期限ヲ許與シタルト否トヲ問ハス其代價及ヒ利息ノ爲メ賣却物ニ付キ先取特權ヲ有ス

若シ補足額ヲ以テスル交換アリテ其補足額カ讓渡シタル物ノ價額ノ半ヲ超ユルトキハ先取特權ハ其補足額ノ爲メ交換ニ付キ存在ス

第五百十七條 先取特權ハ賣却物カ用方ニ因リ又ハ不動産ニ合體スルニ因リテ不動産ト爲リタルトキト雖モ猶ホ買主ノ占有ニ在リ且變形セサル間ハ存續ス但合體ノ場合ニ於テハ不動産ヲ毀損セシメテ其物ヲ分離スルコトヲ要ス

第五百十八條 賣主ノ先取特權ハ財産取得編第四十七條及ヒ第八十二條ニ規定シタル留置及ヒ解除ノ權利ヲ妨ケス

第六則 旅店主人ノ先取特權

第五百十九條 旅店ノ主人ハ旅客其從者及ヒ牛馬ノ宿泊料、食料ノ爲メ其旅客ノ携帶シテ尙ホ旅

店ニ存スル手荷物ニ付キ先取特權ヲ有ス

第七則 舟車運送營業人ノ先取特權

第六十條 舟車運送營業人ハ旅客又ハ荷物ノ運送爲メ及ヒ關稅其他正當ナル附從ノ費用ノ爲メ自己ノ手ニ存スル運送物ニ付キ先取特權ヲ有ス

運送營業人カ運送物ノ引渡ヨリ四十八時以内ニ債務者又ハ其名ヲ以テ其物ヲ受取リタル者ニ對シ其物ヲ返還スルカ又ハ運送賃其他ノ費用ヲ辨濟スルカノ催告ヲ爲シ且其效果ヲ生ゼンムル爲メ成ル可ク短キ時間ニ裁判上ノ請求ヲ爲シタルトキハ其先取特權ハ物ノ引渡後ト雖モ存續ス如何ナル場合ニ於テモ第三取得者ニ對シテ物ヲ回復スルコトヲ得ス但第四百四十八條ニ規定シタル如ク詐害アル場合ハ此限ニ在ラス且第三百三十三條ノ適用ヲ妨ケス

第八則 職務上ノ所爲ニ對スル債權者ノ先取特權

第六十一條 保證ヲ供スル義務アル公吏ノ職務上ノ過失又ハ職權ノ濫用ヨリ生スル債權ハ其保證金ニ付キ先取特權アリ

第九則 保證金貸主ノ先取特權

第六十二條 前條ノ保證金ヲ貸付タル第三者ハ職務上ノ所爲ヨリ害ヲ受ケタル者ニ辨濟アリシ後第二位ニテ此保證金ニ付キ先取特權ヲ有ス但第三者カ貸付ノ當時又ハ他ノ債權者ヨリ何等ノ故障ヲモ述ヘサル前規則ニ從ヒテ其權利ヲ證シタルトキニ限ル

第二款 動産ニ係ル特別ノ先取特權ノ順位

第六十三條 動産ニ係ル特別ノ先取特權ト一般ノ先取特權ト競合スルトキハ優先ノ順序ヲ左ノ如ク規定ス

第一 訟事費用ハ其費用ノ有益タリシ總債權者ノ債權ニ先タツ但有益ノ限度又ハ割合ニ從フ

第二 此他四箇ノ一般ノ先取特權ハ第三百三十七條ニ定メタル順序ヲ以テ總テノ特別ノ先取特權ニ先タツ但特別ノ先取特權ニ屬セサル動産ノ不足ナル場合ニ限ル

第六十四條 一箇ノ動産ニ付キ特別ノ先取特權ヲ有スル諸種ノ債權競合スルトキハ其相互ノ優先權ハ下ノ順序及ヒ區別ニ從ヒテ之ヲ定ム

第一ノ順位ハ先取特權ノ目的物ヲ保存シタル者ニ屬ス

若シ數人ノ債權者漸次ニ保存ヲ爲シタルトキハ優先權ハ其間ニテ最後ノ保存者ニ屬ス

第二ノ順位ハ合意上ノ動産質ニ因リ或ハ不動産ノ貸貸人、旅店主人又ハ運送營業人ノ如ク默示ノ動産質ニ因リテ物ヲ質ニ取リタル債權者ニ屬ス

第三ノ順位ハ物ノ賣主ニ屬ス

然レトモ質取債權者ハ動産質設定ノ時其物ノ保存費用ノ未タ支拂アラサルコトヲ知ラザリシトキハ第一ノ順位ヲ得

之ニ反シテ質取債權者カ賣却代價ノ未タ支拂アラサルコトヲ知リタルトキハ賣主之ニ先タツ收穫物ニ關シテハ第一ノ順位ハ農業ノ稼人ニ第二ノ順位ハ種子及ヒ肥料ノ供給者ニ第三ノ順位ハ土地ノ貸貸人ニ屬ス

工業ノ職工ハ工業ヨリ生スル產出物又ハ製造品ニ付キ貸貸人ニ先タツ公吏ノ保證金ニ關シテハ職務上ノ所爲ニ對スル各債權者ハ相共ニ債權ノ割合ニ應ジ其債權ノ日附ニ關セス他ノ債權者ニ先タチ又保證金ヲ貸付タル債權者ニモ先タツ其保證金ヲ貸付タル債權者ハ保證金ノ殘額ニ付キ第二位ニテ先取特權ヲ有ス

第三節 不動産ニ係ル特別ノ先取特權

第一款 不動産ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第六十五條 左ノ債權者ハ下ニ定メタル債權ノ爲メ其條件ニ從ヒ不動産ニ付キ先取特權ヲ有ス

第一 賣買、交換其他有償ノ行爲ニ因リ又無償ナルモ負擔ヲ帶フル行爲ニ因リテ不動産ヲ讓渡シタル者ハ其讓渡シタル不動産ニ付キ先取特權ヲ有ス

第二 共同分割者ハ分割中ニ包含シタル不動産ニ付キ先取特權ヲ有ス

第三 工匠、技師及ヒ工事請負人ハ工事ニ因リテ不動産ニ生シタル増價ニ付キ先取特權ヲ有ス

第四 先取特權ヲ生セシムル行爲ノ當時讓渡人、共同分割者、工事請負人ニ支拂ヒタル金銭ノ貸主ハ右同一ノ不動産ニ付キ先取特權ヲ有ス

第一則 讓渡人ノ先取特權

第六十六條 讓渡人ノ先取特權ハ左ノ各人ニ屬ス

第一 賣買ノ代價及ヒ利息其他ノ負擔ニ付テハ賣主

第二 交換ノ補足額、負擔及ヒ交換物ノ追奪擔保ニ付テハ交換者

第三 贈與ノ負擔ニ付テハ贈與者又ハ其承繼人

此他ノ不動産讓渡人ハ一般ニ其對價及ヒ負擔ニ付キ先取特權ヲ有ス

第六十七條 賣買代價、交換補足額、外賣買、交換、贈與ノ負擔及ヒ交換其他有償ノ合意ニ於ケル追奪擔保ノ未定ノ賠償ハ讓渡ノ證書又ハ日後ノ證書ヲ以テ金銭ニテ之ヲ定ムルコトヲ要ス

此他右ノ證書ハ次款ニ記載スル如ク之ヲ公示スルコトヲ要ス

第六十八條 交換其他不動産ノ讓渡ノ對價トシテ受取リタル不動産ノ追奪擔保ノ爲メノ先取特權ハ其追奪カ讓渡ノ時ヨリ十個年内ニ生シ且廢罷ス可カラサル判決ヨリ一個年内ニ擔保ノ請求ヲ存シ之ヲ公示シタルトキニ非サレハ存在セズ

對價トシテ受取リタル不動産ニ關シテハ擔保ノ爲メノ先取特權ハ追奪カ一個年内ニ生シ且廢罷ス可カラサル判決ヨリ一個年内ニ請求ヲ爲シ之ヲ公示シタルトキニ非サレハ存在セズ

第六十九條 不動産ノ讓渡人ノ先取特權ハ債務者ノ所爲ニ因リ又ハ其權利ニ基キ且其費用ヲ以テ不動産ニ加ヘタル増加及ヒ改良ニ及ハス

第二則 共同分割者ノ先取特權

第七十條 社員其他ノ共有者ハ或ハ抽籤ノ方法或ハ合意上ノ指定或ハ不分物競賣ニ因レル分割ヨリ生スル左ノ債權ノ爲メ其分割ニ於テ各自ノ得タル不動産ニ付キ互ニ先取特權ヲ有ス

第一 補足額ノ爲メ即チ配當過分ノ返還ノ爲メニハ之ヲ負擔セル分割者ニ歸シタル不動産ニ付キ先取特權アリ

第二 不分物競賣ノ代價ノ爲メニハ其競賣シタル不動産ニ付キ先取特權アリ

第三 分割者ノ一人カ其配當部分ノ不動産又ハ不動産ニ於テ受ケタル追奪ノ擔保ノ爲メニハ他ノ分割者ニ歸シタル總不動産ニ付キ先取特權アリ但各分割者ノ債務ノ部分ニ限ル

第七十一條 右ノ擔保ハ左ノ諸件ニ之ヲ適用ス

第一 社員ニシテ他ノ社員ニ對シ補足額又ハ不分物競賣ノ代價ヲ負擔シタル者ノ無資力

第二 分割者ノ一人ノ配當部分ニ債權ヲ充テタルトキ其債務者ノ無資力但其債務者ハ分割者タルト外人タルト問ハス分割ノ當時無資力タリシコトヲ要ス

第七十二條 第六十八條ハ分割者間ノ追奪擔保ノ先取特權ニ之ヲ適用ス

分割者タルト否ト問ハス債務者ノ無資力ニ關シテハ其擔保ハ元本ニ於ケル債務ノ満期ヨリ一個年内ニ請求ヲ爲シ之ヲ公示シタルトキニ非サレハ當事者ノ間ニテモ第三者ニ對シテモ之ヲ負擔セシムルコトヲ得ス

明治二十三年四月 法律 第二十八號 (民法債權關係編)

債務カ無期又ハ終身ノ年金權タルトキ債務者ノ無資力カ分割ノ日ヨリ十個年後ニ生スルニ於テハ其擔保ノ負擔ハ止ム

債務カ利息ヲ生スル元本ニシテ其滿期カ十個年以上ニ及フトキモ亦同シ
第七十三條 第六十九條ノ規定ハ分割者ノ先取特權ニモ亦之ヲ適用ス

第三則 工匠、技師及ヒ工事請負人ノ先取特權

第七十四條 工匠、技師及ヒ工事請負人ハ建物、土手若クハ掘削ノ築造若クハ修繕又ハ地上ニ爲シタル排泄澆灌、開墾、置土其他之ニ類似スル工事ヨリ生スル債權ノ爲メ先取特權ヲ有ス
右ノ先取特權ハ鑛坑及ヒ石坑ノ開掘、利用、閉鎖又ハ廢止ニ關スル地下又ハ外部ノ工事ノ爲メ工匠、技師及ヒ工事請負人ニ屬ス

第七十五條 右ノ工事ヨリ生スル先取特權ハ其工事ニ因リ土地又ハ建物ニ加ヘタル増價ニシテ先取特權行使ノ當時猶ホ存スルモノノミニ付キ存在ス

右ノ増價ハ裁判所ノ選任シタル鑑定人ノ作レル三箇ノ調書ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ要ス
此第一調書ハ工事ヲ始ムル前ニ之ヲ作りテ場所ノ現狀ヲ明定シ且目論見タル工事ノ概略ヲ指示スルコトヲ要ス

此第二調書ハ工事ノ受取ニ付キ爭アルモ工事ノ竣成ヨリ又ハ原因ノ如何ヲ問ハス其工事ノ絶止ヨリ三個月内ニ之ヲ作り且其工事ヨリ現ニ生スル増價ヲ證スルコトヲ要ス
此第三調書ハ配當加入ノ請求ノ當時之ヲ作り且右増價ノ存スルモノヲ證スルコトヲ要ス

第四則 金錢貸主ノ先取特權

第七十六條 前條ニ掲ケタル先取特權ハ讓渡若クハ分割ノ當時又ハ工匠、技師若クハ工事請負人トノ契約ノ當時ニ於テ賣買若クハ不分割物競賣ノ代價、交換若クハ分割ノ補足額又ハ工事ノ代

金ノ辨濟ノ爲メ金錢ヲ貸付タル者ニ法律ニ依リテ直接ニ屬ス但共金錢ノ貸付及ヒ使用ヲ此等ノ行爲ノ證書中ニ記載シタルトキニ限ル

若シ讓渡人、分割者又ハ工事ノ爲メノ債權者ノ利益ニ於テ先取特權ノ生セシ後ニ金錢ヲ貸付タルトキハ貸主ハ財產編第四百八十條及ヒ第四百八十一條ニ定メタル條件及ヒ方式ニ從ヒ債權者又ハ債務者ヨリ合意上ノ代位ヲ得タルトキニ非サレハ先取特權ヲ取得セズ
孰レノ場合ニ於テモ金錢ノ貸主カ債務ノ一分ノミヲ拂ヒタルトキハ貸主ハ其拂ヒタルモノノ割合ニ應シ財產編第四百八十六條ニ從ヒ原債權者ト共ニ先取特權ヲ行フ

第二款 債權者間ニ於ケル不動産ノ特別先取特權ノ效力及ヒ順位

第七十七條 前條ニ掲ケタル先取特權ハ下ニ定メタル方法、條件及ヒ期間ヲ以テ公示シ且保存シタルトキニ非サレハ之ヲ以テ他ノ債權者ニ對抗スルコトヲ得ス

第七十八條 賣買代價ノ爲メノ賣主ノ先取特權及ヒ補足額ノ爲メノ交換者ノ先取特權ハ代價又ハ補足額ノ全部又ハ一分ヲ未ダ辨濟セサル旨ヲ記シタル所有權移轉證書ニ依ル登記ヲ以テ之ヲ保存ス

又交換ニ於ケル追奪擔保ノ爲メ及ヒ賣買、交換其他所有權移轉契約ノ附從負擔ノ爲メノ先取特權ハ證書ニ依ル登記ヲ以テ之ヲ保存ス但擔保及ヒ負擔ノ評價ヲ證書中ニ記載シタルトキニ限ル
第七十九條 分割者ノ先取特權ハ分割證書ニ依ル登記ヲ以テ之ヲ保存ス但其證書ニ不分割物競賣代價又ハ補足額即チ配當過分ノ返還及ヒ追奪擔保ノ評價其他各配當部分ノ負擔ノ評價ヲ記載シタルトキニ限ル

第八十條 右讓渡又ハ分割ノ證書ニ依ル登記ナキ間ハ取得者又ハ分割者ノ權利ニ基キ物上擔保ヲ得タル債權者ハ其擔保ヲ登記シタルトキト雖モ其登記ヲ以テ先取特權アル讓渡人又ハ分割者

ニ對抗スルコトヲ得ス但工事ヨリ生スル先取特權アル債權ハ此限ニ在ラス
然レトモ利害關係人ハ原契約者ノ承諾ヲ得スト雖モ常ニ右讓渡又ハ分割ノ登記ヲ爲サシムルコ
トヲ得

第百八十一條 讓渡又ハ分割ノ證書ニ其對價物ノ全部若クハ一分ノ未タ辨濟アラサルコト又ハ負
擔ノ付シ有ルコトヲ記載セサルトキハ日後ノ證書ヲ以テ此脫漏ヲ補フコトヲ得且其補脫ハ債權
者ノ注意ヲ以テ讓渡又ハ分割ト共ニ之ヲ公示スルコトヲ得

右ノ補脫ヲ讓渡又ハ分割ノ登記ト共ニ公示セサルトキハ債權者ハ何時ニテモ其補脫ヲ公示スル
コトヲ得但此場合ニ於テハ先取特權ハ單純ナル法律上ノ抵當ニ變性ス
右ノ抵當ハ二箇ノ公示ノ間ニ於テ債務者ノ權利ニ基キ物上擔保ヲ取得シ且合式ニ之ヲ公示シタ
ル債權者ニ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

讓渡若クハ分割ノ證書ニ記シタル負擔又ハ擔保ノ評價ヲ日後ノ證書ニ記載シタルトキモ亦同シ
但其證書ニ依ル抵當ノ登記ハ其登記ヲ爲シタル日附ニ從ヒテ債權者ノ順位ヲ定ム

第百八十二條 讓渡人又ハ分割者ハ其先取特權カ法律上ノ抵當ニ變性シタルトキハ此抵當ノ登記
前ニ債務者ノ權利ニ基キ物上擔保ヲ取得シ且合式ニ保存シタル債權者ヲ害シテ義務不履行ノ爲
メノ解除訴權ヲ行フコトヲ得ス

第百八十三條 工匠、技師又ハ工事請負人ノ先取特權ハ第百七十五條ニ定メタル第一第二ノ調書
ニ依リ登記スルヲ以テ之ヲ保存ス

此第一調書ニ依ル登記ハ工事ヲ始ムル前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二調書ニ依ル登記ハ其調製ヨリ一个月内ニ於テ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二調書ニ依ル登記ノ效力ハ第一調書ノ日附ニ遡及シ且工事ノ前又ハ後ニ債務者ト契約シタル

各人ニ對シ共増價ニ付テノ優先權ヲ先取特權アル債權者ニ保有セシム

利害關係人中ノ一人ノ爲シタル右調書ニ依リテ爲シタル登記ハ委任ナキト雖モ他ノ關係人
ヲ利シ且總關係人ニ其債權ノ割合ニ應シテ辨濟ヲ受クル爲メノ同一ノ順位ヲ保有セシム但總テ
ノ者カ有益ノ時期ニ於テ必要ナル説明ヲ爲スコトヲ要ス

第百八十四條 前條ニ指定シタル期間ニ二箇ノ調書ニ依ル登記ノ一ヲ爲ササリシトキハ先取特權
ハ法律上ノ抵當ニ變性シ其順位ハ左ノ日附ヲ以テ之ヲ定ム

第一 工事ノ竣成又ハ絶止ノ時ヨリ三個月内ニ第二調書ヲ調製シ且次月内ニ之ヲ登記シタル
トキハ第一調書ノ遅延登記ノ日附

第二 右ノ三個月内ニ第二調書ヲ調製セシム又ハ三個月内ニ之ヲ調製シタルモ次月内ニ之ヲ登
記セサルトキハ其第二調書ニ依ル登記ノ日附

第百八十五條 取得、分割又ハ工事ノ爲メ初ニ金錢ヲ貸付タル者ノ第百七十六條第一項ニ從ヒテ
有スル先取特權ハ讓渡人、分割者又ハ工事請負人ニ於ケルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ保存ス

右貸主カ日後代位ニ因リテ讓渡人、分割者又ハ工事請負人ニ承繼シタルトキ未タ先取特權ノ公
示アラサルニ於テハ其貸主ハ主タル證書及ヒ代位證書ニ依ル登記ニ因リテ其公示ヲ爲サシム

若シ代位前ニ公示アリタルトキハ貸主ハ登記ニ代位ノ附記ヲ請求ス可シ

又先取特權アル債權ヲ讓受ケタル者ハ讓渡ノ附記ヲ請求ス可シ

此末ノ二箇ノ場合ニ於テ附記ヲ爲サシムルコトヲ遅延シタル代位者又ハ讓受人ハ其以前善意ニ
テ債務者又ハ其承繼人ト原債權者トノ間ニ爲シタル辨濟其他ノ免責ノ行爲ヲ廢棄スルコトヲ得
ス

第百八十六條 上ニ記載シタル如クニ保存シタル先取特權又ハ抵當アル債權ニシテ利息又ハ年金

ノ附キタルモノハ利息又ハ年金ノ満期ト爲リタル最終ノ二個年分ニ非サレハ元本ト同一ノ順位ニテ配當ニ加入スルコトヲ得ス但満期ノ利息又ハ年金ノ中ニテ二個年以外ノモノノ爲メ漸次ニ特別ノ抵當登記ヲ爲ス可キ債權者ノ權利ヲ妨ケス

第百八十七條 不動産ニ付キ先取特權アル債權者間ノ相互ノ優先權ハ左ノ順序ニ從フ
第一 工匠、技師及ヒ工事請負人但其債權カ他ノ債權ヨリ後ニ生シタルトキモ亦優先權ヲ有ス

此工事ヨリ生スル増價額カ右ノ各人ニ全ク辨濟スルニ足ラサル場合ニ於テハ債權ノ割合ニ應ジ同一ノ順位ニテ其配當加入ヲ定ム

第二 讓渡人又ハ分割者

逐次ノ讓渡又ハ分割ノ場合ニ於テハ優先權ハ債權者間最モ舊キ者ニ屬ス

金錢ノ貸主ハ或ハ初ヨリ或ハ合意上ノ代位ニ因リ貸付タル其金錢ニテ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ受ケタル債權者ト同一ノ順位ヲ有ス

第百八十八條 先取特權ノ登記及ヒ其更新、抹消、減少ニ關スル規則ハ先取特權及ヒ抵當權ニ共通ニシテ之ヲ次章ニ規定ス

第三款 第三所持者ニ對スル不動産先取特權ノ效力

第百八十九條 合式ニ公示シタル先取特權ハ其負擔アル不動産ニ付キ第三所持者ニマテ追及ス

第三所持者カ下ニ定ムル方法ノ一ニ依リテ先取特權アル債權者ニ辨濟セサルトキハ其債權者ハ第三所持者ニ對シ其不動産ヲ差押ヘ之ヲ競賣ニ付スルコトヲ得

第百九十條 一般ノ先取特權ハ第三所持者ノ取得ノ登記前ニ之ヲ登記シタルトキニ非サレハ其第三所持者ニ移轉シタル不動産ニ付キ追及權ヲ與ヘス

第百九十一條 轉得者ノ取得ノ登記前ニ登記セサル讓渡又ハ分割ニ因リテ先取特權ヲ有スル債權者ハ其先取特權ノ生シタル權原ヲ登記スルコトニ付キ轉得者ヨリ催告ヲ受ケタルモノ一个月内ニ其登記ヲ爲ササリシトキニ非レハ追及權ヲ失ハス但此一个月ニハ距離ニ應ジテ法律上ノ期間ヲ加フ

然レトモ轉得者ハ其讓渡人カ十個年以上不動産ニ付キ法定ノ占有ヲ爲シタルトキハ右ノ催告ヲ爲ス責ナク且舊所有者ノ總テノ先取特權ヲ免カル

第百九十二條 工事ニ因リ先取特權ヲ有スル債權者ハ工事ノ竣成又ハ其絶止ノ前ニ讓渡ノ登記アリタルモノ第一調書ニ依ル登記ニ因リテ追及權ヲ行フコトヲ得

工事ノ竣成シ又ハ絶止シタルトキ第二調書ノ調製及ヒ之ニ依ル登記ノ二箇ノ期間カ未タ經過ヒサルニ於テハ右ノ債權者ハ此期間ノ滿了後又ハ第二調書ヲ調製シ且之ニ依リテ登記ス可キ催告ヲ受ケタルモノ一个月内ニ之ニ應セサリシ後ニ非サレハ先取特權ヲ失ハス

第百九十三條 先取特權アル債權者ハ追及權ヲ保存シ及ヒ之ヲ行フ爲メニ必要ナル公示ヲ爲ササルモノ第三所持者ノ負擔シタル讓渡代價ニ付キ辨濟ヲ受ケル權ヲ失ハス但代價ノ辨濟前又ハ順序配當手續ノ閉鎖前ニ自ラ債權者タルコトヲ知ラシメ且其債權ヲ證シタルトキニ限ル

第百九十四條 先取特權ニ關スル追及權、其條件、效力竝ニ第三所持者カ所有權徵收ヲ避クル方法及ヒ先取特權消滅ノ原因ハ次章ノ第三節第五節乃至第七節ノ規定ニ從フ但先取特權ノ固有ノ規則ニ反スルモノハ此限ニ在ラス

第五章 抵當

第一節 抵當ノ性質及ヒ目的

第百九十五條 抵當ハ法律又ハ人志ニ因リテ或ル義務ヲ他ノ義務ニ先ダチテ辨償スル爲メニ充テ

タル不動産ノ上ノ物權ナリ

第九十六條 抵當ハ動産質及ヒ不動産質ニ付キ記載シタル如ク働方及ヒ受方ニテ不可分タリ但反對ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス

第九十七條 抵當ハ不動産ノ完全所有權ノ上ノミナラズ用益權、賃借權、永借權及ヒ地上權ノ上ニモ此等ノ權利ヲ支分シタル所有權ノ上ニモ之ヲ設定スルコトヲ得

然レトモ完全ノ所有權ヲ有スル者ハ虛有權又ハ用益權ノミヲ分離シテ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得

之ニ反シテ所有者ハ其不動産ノ限界ニ因リテ定マリタル部分又ハ其不分ノ幾部分ヲ抵當ト爲スコトヲ得

地役ハ要役地ヨリ分離シテ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得又用方ニ因ル不動産ハ其附著スル不動産ヨリ分離シテ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得

第九十八條 左ニ掲グルモノハ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得

第一 使用權、住居權其他讓渡スコトヲ得又ハ差押フルコトヲ得サル財產

第二 財產編第十條第二號及ヒ第三號ニ掲ケタル如キ不動産債權

第三 同條第四號ニ掲ケタル如キ不動産ト爲シタル債權但之ヲ不動産ト爲スコトヲ許可スル

法律カ其抵當ヲ許ササルトキニ限ル

船舶ノ抵當ニ付テハ商法ノ規定ニ從フ

第九十九條 此章ノ規定ハ商法其他特別法ニ於テ異例ヲ設ケサル限リハ此等ノ法律ヲ以テ設定シタル抵當ニ之ヲ適用ス

第一百條 抵當ハ意外及ヒ無償ノ原因ニ由リ或ハ債務者ノ所爲及ヒ費用ニ因リテ不動産ニ生スル

コト有ル可キ増加又ハ改良ニ當然及フモノトス但他ノ債權者ニ對シテ詐害ナキコトヲ要シ且前章ニ規定シタル如キ工匠、技師及ヒ工事請負人ノ先取特權ヲ妨ケス

抵當ハ債務者カ縱令無償ニテ取得シタルモノナルモ其隣接地ニ及ハサルモノトス但新圍障ノ設立又ハ舊圍障ノ廢棄ニ因リテ隣接地ヲ抵當不動産ニ合體シタルトキモ亦同シ

第二百一條 意外若クハ不可抗ノ原因又ハ第三者ノ所爲ニ出テタル抵當財產ノ滅失、減少又ハ毀損ハ債權者ノ損失タリ但先取特權ニ關シ第三百二十三條ニ記載シタル如ク債權者ノ賠償ヲ受ケ可キ場合ニ於テハ其權利ヲ妨ケス

若シ抵當財產カ債務者ノ所爲ニ因リ又ハ保持ヲ爲ササルニ因リテ減少又ハ毀損ヲ受ケ此カ爲メ價權者ノ擔保カ不十分ト爲リタルトキハ債務者ハ抵當ノ補充ヲ與フル責ニ任ス

此補充ヲ與フルコト能ハサル場合ニ於テハ債務者ハ擔保ノ不十分ト爲リタル限度ニ應シ滿期前ト雖モ債務ヲ辨濟スル責ニ任ス

第二百二條 抵當財產ノ差押ナキ間ハ債務者ハ財產編第九十九條及ヒ第二百十條ニ定メタル期間其不動産ヲ質貸スルコトヲ得又其果實及ヒ產出物ヲ讓渡シ及ヒ管理ノ總テノ行爲ヲ爲スコトヲ得

第二節 抵當ノ種類

第二百三條 抵當ハ法律上合意上又ハ遺言上ノモノタリ

第一款 法律上ノ抵當

第二百四條 左ノ抵當ハ總テノ要約ニ關セズ當然成立ス

第一 婦カ其夫ニ對シテ有スルコト有ル可キ總債權ノ爲メ婚姻ノ日現ニ夫ニ屬スルト日後之ニ屬ス可キトヲ問ハス其夫ノ總不動産ニ付キ婦ノ有スル抵當但夫ノ未成年タルトキモ亦同

第二 未成年者及ヒ禁治産者カ其後見人ニ對シテ有スル總債權ノ爲メ現在ニ屬スルト將來ニ得ルトヲ問ハス後見人ノ總不動産ニ付キ有スル抵當

第三 國府縣、市町村及ヒ公設所カ行政法ノ定メタル限度ト條件トニ從ヒ會計吏員ノ管理ノ爲メ其不動産ニ付キ有スル抵當

又第百八十一條及ヒ第百八十四條ニ從ヒテ變性シタル先取特權ヨリ生スル抵當ハ之ヲ法律上ノ抵當ト看做ス

第二款 合意上ノ抵當

第二百五條 合意上ノ抵當ハ公正證書又ハ私署證書ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ設クルコトヲ得ス 代理人ヲ以テ抵當ヲ設定スルトキハ委任ノ要旨ヲ抵當ノ設定證書ニ示スコトヲ要ス

第二百六條 本邦ニ存在スル財産ニ付キ外國ニ於テ爲シタル抵當ノ合意ハ此種類ノ行爲ノ爲メ外國ニ於テ用ユル方式ニ從ヒ之ヲ爲シタルトキハ其效ヲ生ス然レトモ特別法ニ規定シタル條件ニ從フニ非サレハ此合意ニ依リ本邦ニ於テ登記ヲ爲スコトヲ得ス

第二百七條 抵當ノ設定證書ニハ義務ノ擔保ニ充テタル不動産ヲ其性質及ヒ所在ヲ以テ特ニ指示スルコトヲ要ス

若シ抵當ノ設定カ債務者ノ現在ノ各不動産ヲ特ニ指示セスシテ其全部又ハ一分ヲ包含スルトキハ債務者ノ請求ニ因リ債權ノ擔保ニ必要ナル限度ニ其抵當ヲ減少スルコトヲ得

債務者ノ將來ノ財産ニ付テノ一般又ハ特別ノ抵當ノ設定ハ無効タリ

第二百八條 抵當ノ設定證書ニハ右ノ外義務ノ原因、體様及ヒ其主從ノ目的ヲ明カニ指示スルコトヲ要ス

義務ノ目的カ金錢ヲサルトキハ之ヲ評價ス可シ然レトモ其評價ハ登記ノ時ニ於テモ猶ホ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九條 抵當ハ抵當ニ充テント欲スル物ノ所有權又ハ收益權ヲ有シ且有償又ハ無償ニテ其物ヲ處分スル能力ヲ有スル者ニ非サレハ之ヲ承諾スルコトヲ得ス但第三者ノ抵當設定ニ關スル第二百一十一條ノ規定ヲ妨ケス

若シ有期ノ物權ヲ抵當ト爲シタルトキハ其抵當ハ此權利ノ時期外ニ效力ヲ生スルコトヲ得ス然レトモ抵當ト爲リタル權利カ此時期ノ滿了前或ル出來事ニ因リ物ノ價額ヲ代表スル償金ニ移リタルトキハ債權者此償金ニ付キ其權利ヲ行フ

第二百十條 未成年者、禁治産者及ヒ失踪者ノ財産ハ法律ニ定メタル原因及ヒ方式ニ依ルニ非サレハ其代人ニ於テ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得ス

第二百十一條 合意上ノ抵當ハ第九十八條及ヒ第一百七條ニ於テ動産質及ヒ不動産質ニ付キ記載シタル如ク債務者ノ債務ヲ擔保スル爲メ第三者ヨリ之ヲ設定スルコトヲ得

右ノ抵當ハ之ヲ設定セシムル爲メ債務者ノ何等ノ出捐モ爲ササルトキハ債權者ニ對シテハ恩惠ナリトス

又抵當ハ債權カ無償ナルトキ又ハ有償ナルモ諾約ナクシテ主タル合意以後ニ之ヲ設定シタルトキハ債權者ニ對シテモ恩惠ナリトス

第三款 遺言上ノ抵當

第二百十二條 抵當ハ遺贈ノ擔保ノ爲メ又ハ第三者ノ債務ノ擔保ノ爲メニシテ遺言ヲ以テ之ヲ設定スルコトヲ得

第三節 抵當ノ公示

第一款 登記ノ條件及ヒ期間

第二百十二條 凡ソ法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵當ハ下ニ定メタル條件ニ從ヒ其不動産所在地ノ登記所ニ於テ登記ヲ爲シタルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

數箇ノ登記所ノ管轄ニ跨カル不動産ノ全部ヲ抵當ト爲シタルトキハ其主タル部分ノ所在地ヲ管轄スル登記所ニ於テ登記ヲ爲シ他ノ登記所ニ於テハ其登記及ヒ日附ノ記載ノミヲ爲ス

第二百十四條 抵當ハ其設定ノ後債務者ノ無資力カ正當ニ宣告セラレ又ハ其財産ノ全部若クハ過半ノ差押ニ因リ顯然ト爲リタルトキハ有效ニ之ヲ登記スルコトヲ得ス但破産ノ場合ニ於ケル登記ノ權利ニ付テノ商法ノ制限ヲ妨ケス

抵當財産ノ讓渡アリタルトキ其讓受人ニ對シテ債權者ノ登記スル權利ノ制限ハ第五節ニ於テ之ヲ規定ス

第二百十五條 債權者カ財産ノ管理權ヲ有セサルトキハ抵當ノ登記ハ法律上又ハ裁判上ノ代人ノヲ爲ス

抵當ノ登記ハ總理代理人及ヒ法律上又ハ合意上ノ抵當ノ附著シタル行爲ヲ爲ス委任ヲ受ケタル部理代理人ノ權利及ヒ義務ニ屬ス

又登記ハ債權者ノ委任ナクシテ事務管理者之ヲ爲スコトヲ得

第二百十六條 婦ノ法律上ノ抵當ハ夫カ婦ニ對シ契約其他ノ方法ニテ條件附ナルト否トヲ問ハス債務者ト爲リタル時ヨリ夫又ハ裁判所ノ許可ヲ要セス婦ノ請求ニ因リテ之ヲ登記スルコトヲ得又其登記ハ婦ノ適當ト思考スル不動産ノ全部又ハ一分ニ付キ之ヲ爲スコトヲ得但第二百二十六條ニ記載スル如ク夫ノ有スル抵當減少ノ權利ヲ妨ケス

婦カ登記ヲ爲ササルトキハ夫ハ婦ノ擔保ノ爲メ十分ナル不動産ニ付キ其登記ヲ爲スコトヲ要ス

婦又ハ夫カ登記ヲ爲ササルトキハ縱令委任ナキモ婦ノ親族又ハ姻族ニテ之ヲ爲スコトヲ得但婦ノ故障又ハ拋棄ナキコトヲ要ス

第二百十七條 未成年者ノ法律上ノ抵當ハ夫カ婦ノ法律上ノ抵當ヲ登記スルト同一ノ場合ニ於テ同一ノ條件ニ從ヒ後見人之ヲ登記スルコトヲ要ス

後見人登記ヲ爲ササルトキハ後見監督人又ハ親族會員其登記ヲ爲スコトヲ要ス若シ之ヲ爲ササルトキハ未成年者ニ對シ連帶シテ損害賠償ヲ負擔ス

未成年者モ亦自治產者ト爲リタル後ハ其登記ヲ求ムルコトヲ得

第二百十八條 前條第一項及ヒ第二項ノ規定ハ禁治產者ノ法律上ノ抵當ニ之ヲ適用ス

處刑言渡ニ因レル禁治產ノ場合ニ於テハ禁治產者ノ特別ノ代理人ニテモ登記ヲ求ムルコトヲ得

第二百十九條 債權者ノ相續人又ハ讓受人ハ原債權者ノミノ名ヲ以テ或ハ自己ト原債權者トノ連名ヲ以テ登記ヲ求ムルコトヲ得

債權者ノ代理人又ハ事務管理者ヨリ登記ヲ求ムルトキハ其名及ヒ分限ヲ本人ノ名及ヒ分限ト共ニ記載ス可シ

第二百二十條 債務者カ死亡シタルトキハ登記ハ債權者ノ選擇ニ因リテ其債務者ニ對シ又ハ其相續人ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三百一十一條 法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵當ノ登記ハ三十個年間其效力ヲ有ス三十個年後ハ債權ノ時効カ中斷又ハ停止ニ係リタルトキト雖モ其登記ノ效力ヲ失フ

右抵當ノ時効ハ無能力者ニ對シテ停止セズ但其代人ニ對スル求償ヲ妨ケス

然レトモ三十個年ノ期間滿了前ニ登記ヲ更新シ舊登記ノ日附ヲ精確ニ記載シタルトキハ抵當ノ

順位ハ舊登記ト同一ノ日附ニテ存ス

登記ノ效力ヲ失ヒシ後ノ更新ハ新登記ニ同シク共更新ノ日附ニ於テノミ效力ヲ生ス

第二百二十二條 三十個年ノ期間ニ於ケル登記ノ更新ハ舊登記後ニ起リタル債務者ノ破産無資力又ハ死亡ニ拘ハラズ之ヲ爲スコトヲ得

第二百二十三條 登記ニ關スル爭ハ抵當財産所在地ノ裁判所ニ之ヲ訴フ可シ

第二款 登記ノ抹消減少及ヒ正誤

第二百二十四條 登記ノ抹消ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ爲ス

第一 債権カ無効タリ若クハ銷除ス可キモノタルトキ又ハ共全部ノ消滅シタルトキ

第二 抵當カ有效ニ設定セラレサルトキ

右ハ第二百三十條ニ記載シタル如ク或ル不動産ニ付テノ登記ヲ抹消スルコトヲ妨ケス

第二百二十五條 登記ノ抹消ハ債務者又ハ共承繼人ノ請求ニ因リテ之ヲ宣告スルコトヲ要ス但下

ニ規定シタル方式ニ於テ債権者ヨリ抹消ヲ許シタルトキハ此限ニ在ラス

第二百二十六條 婦ノ法律上ノ抵當ヲ或ル不動産ニ制限セサル場合ニ於テ共債権ノ擔保ニ必要ナルヨリ多キ不動産ニ付キ登記アリタルトキ又ハ婚姻契約若クハ配偶者間ノ特別合意ニ因リテ婦

ノ債権額ヲ評價セサル場合ニ於テ共債権ノ正當ナル評價ヨリ更ニ多キ金額ノ爲メニ登記アリタルトキハ夫又ハ共承繼人ハ不動産又ハ金額ニ關シ裁判上ニテ此登記ノ減少ヲ請求スルコトヲ得

第二百二十七條 右ニ同シク後見人又ハ共承繼人ハ未成年者又ハ禁治産者ノ擔保ニ必要ナルモノ

ノ外ニ爲シタル登記ノ減少ヲ請求スルコトヲ得但親族會議ノ決議ニ因リテ抵當ヲ或ル不動産ニ

制限セス又ハ債権額ヲ評價セサルトキニ限ル

第二百二十八條 合意上ノ抵當ハ債務者ノ現在ノ總財産ニ關シ過度ナルトキニ非サレハ第二百七

條ニ記載シタル如ク債務者共減少ヲ請求スルコトヲ得ス

債務者ハ債権者ノ登記シタル債権ノ評價ノ減少ヲ請求スルコトヲ得但設定證書又ハ別證書ヲ以テ評價ヲ爲ササルトキニ限ル

第二百二十九條 遺言上ノ抵當ハ相續ノ不動産ニ付キ遺言者共制限ヲ爲サス又ハ債権額ヲ評價セス

シテ之ヲ設定シタルトキハ相續人共減少ヲ請求スルコトヲ得

第二百三十條 債務カ半額以上消滅シタルトキハ債権者ハ債務者ノ要求ニ因リ三種ノ抵當ニ付キ

金額ノミノ登記ヲ減少ス可シ

債務者ハ一分ノ辨濟ヲ爲シタルトキハ常ニ自費ニテ登記ニ之ヲ附記スルコトヲ得

第二百三十一條 債務者ノ請求ヲ正當トスル判決ニハ抵當ヲ免カレタル不動産又ハ評價ヲ改メタル金額ヲ指示ス

右第一ノ場合ニ於テハ抵當ノ登記ヲ抹消シ第二ノ場合ニ於テハ之ヲ減少ス

第二百三十二條 前數條ニ從ヒ或ル不動産ニ抵當ノ登記ヲ減少シタル場合ニ於テ其不動産カ債権者ノ擔保ニ不十分ト爲リタルトキハ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因ルト雖モ債権者ハ抵當ノ補充ヲ請求スルコトヲ得

第二百三十三條 登記ノ抹消又ハ減少ハ確定判決ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス又證書ヲ以テスルニ非サレハ債権者之ヲ承諾スルコトヲ得ス

第二百三十四條 任意ノ抹消又ハ減少カ債務ノ消滅ニ基クトキハ其抹消又ハ減少ヲ承諾スルニハ

債権者共債務ノ辨濟ヲ受ケ又ハ之ヲ追認スル能力ヲ有スルヲ以テ足レリトス

抹消カ右ノ外第二百二十四條ニ記載シタル原因ノ一ニ基クトキハ債権者和解スルノ能力ヲ有スルコトヲ要ス

ルコトヲ要ス

明治二十三年四月 法律 第二十八號 (民法債權擔保編)

二四五

又抹消又ハ減少カ抵當ヲ無償ニテ拋棄スル性質ヲ有スルトキハ債權者無償ニテ債權ヲ處分スル能力ヲ有スルコトヲ要ス

第二百三十五條 登記ノ抹消又ハ減少ヲ承諾スル爲メノ委任ハ證書ヲ以テ之ヲ與フルコトヲ要ス然レトモ抹消又ハ減少カ債務ノ消滅ニ基クトキハ債務者ノ免責ヲ承諾スル權限ヲ有シタル代理人ニ於テ其抹消又ハ減少ヲ承諾スルコトヲ得

和解又ハ無償ノ拋棄ニ付テハ委任ハ明示タルコトヲ要ス

第二百三十六條 抹消又ハ減少ヲ爲スニハ其合意又ハ判決ヲ登記ニ附記スルコトヲ要ス

第二百三十七條 抹消若クハ減少ヲ後日ノ判決又ハ債務者トノ合意ニテ銷除若クハ解除シタルトキハ其判決又ハ合意ヲ更ニ登記シ又ハ前登記ニ附記ス此場合ニ於テハ前登記ハ前債權者ノ爲メ共効力ヲ回復ス然レトモ抹消若クハ減少ノ後ニ於テ不動産ニ付キ權利ヲ取得シ抵當ノ復舊ノ公示前ニ其權利ヲ登記シタル第三者ニハ此登記ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

第二百三十八條 登記、更新、抹消又ハ減少ニ訛誤又ハ脱漏アルモ此カ爲メ銷除ヲ爲スニ足ラサルトキハ當事者ノ協議又ハ判決ヲ以テ正誤ヲ爲ス

第四節 債權者間ノ抵當ノ效力及ヒ順位

第二百三十九條 凡ソ不動産ニ付キ登記シタル抵當債權者ハ無特權債權者ニ先チ其不動産ノ代價ノ配當ニ加入スルコトヲ得

法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵當ヲ有スル數人ノ債權者間ニ於テハ其配當加入ノ順位ハ數箇ノ登記ヲ同日ニ爲シタルトキト雖モ其登記ノ前後ニ因リテ之ヲ定ム

第二百四十條 登記ハ掲載シタル利息及ヒ定期ノ附從物ニ其經過シタル最後ノ二個年分ニ限り主タル債權ト同一ノ順位ヲ得セシム但二個年以外ノ利息及ヒ附從物ノ爲メ債權者ノ日後登記ヲ爲

スノ權利ヲ妨ケス然レトモ此登記ハ其日附後ニ非サレハ効力ヲ生ゼス

第二百四十一條 抵當ノ順位ハ債權カ條件附ナルトキ又ハ信用ヲ開キテ爲ス貸付ノ如ク漸次ノ支拂ヨリ生スルトキト雖モ亦登記ニ因リテ之ヲ定ム

第二百四十二條 債權者カ數箇ノ不動産ニ付キ抵當ヲ有シ其各箇ノ代價カ同時ニ清算アリシトキハ其債權ハ總不動産ノ價額ノ割合ニ應シテ之ヲ分配ス可シ

漸次ノ清算ノ場合ニ於テ右ノ債權者カ不動産中ノ一箇ノ代價ニ因リテ全ク辨濟ヲ受ケ此一箇ノ不動産ニ付キ其債權者ノ次ニ抵當ヲ有スル一人又ハ數人ノ債權者カ爲メニ辨濟ヲ受タルコトヲ得サルトキハ其一人又ハ數人ノ債權者ハ他ノ各不動産ニ付テハ其相互ノ順位ヲ以テ右辨濟ヲ受ケタル債權者ノ抵當ニ當然代位ス

第二百四十三條 前條ノ代位ハ原債權者ニ次テ右各不動産ニ付キ登記ヲ爲シタル債權者ニ對シテ其効ヲ生ズ

右ノ代位者カ登記ニ其代位ヲ附記シタルトキハ其代位者ヲ順序配當手續中ニ加ハラシムルコトヲ要シ且其承諾アルニ非サレハ何等ノ抹消又ハ減少ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十四條 凡ソ債權ヲ處分スル能力アル抵當債權者ハ同一債務者ノ他ノ債權者ノ利益ニ於テ自己ノ抵當又ハ其順位ノミヲ拋棄スルコトヲ得但財產編第五百條及ヒ第五百三條ニ於テ更改ニ關シ規定シタルモノヲ妨ケス

若シ抵當債權ヲ數次ニ數人ニ對シ讓渡、拋棄又ハ代位ノ目的ト爲セシトキハ優先權ハ承繼人中登記ニ自己ノ權利ノ設定權原ヲ附記シ又ハ登記ノ有ラサリシトキハ之ヲ爲シテ其取得ヲ第一ニ公示シタル者ニ屬ス

第二百四十五條 右ノ外第百八十五條ノ規定ハ前二條ノ場合ニ之ヲ適用ス

第二百四十六條 抵當債權者又ハ無特權債權者ハ他ノ抵當ノ登記ナキヲ知リタルコトヲ自認スト雖モ登記ノ欠缺ヲ申立ツル權利ヲ失ハス

第二百四十七條 不動産ノ賣却代價ヲ以テ全部ノ辨濟ヲ受ケサル抵當債權者ハ其殘額ニ付テハ無特權債權者タリ

若シ不動産ノ賣却ニ先タチテ動産有價物ノ配當ヲ爲ストキハ抵當債權者ハ其債權全額ノ爲メ無特權債權者トシテ假ニ其配當ニ加入ス

其後ニ至リ抵當不動産ノ代價ノ配當アルトキハ抵當債權者ハ動産有價物ニ付キ何等ノ辨濟ヲモ受ケサリシカ如ク其配當ニ加入ス然レトモ此配當ニ於テ全ク辨濟ヲ受ク可キ者ハ動産ノ配當ニテ受取リタル金額ヲ控除スルニ非サレハ其抵當ノ配當額ヲ受取ルコトヲ得ス其控除シタル金額ハ動産財團中ニ之ヲ返還ス

不動産ノ代價ノ配當ニ於テ一分ノミノ辨濟ヲ受クルコトヲ得ヘキ者ニ付テハ其殘額ニ從ヒ其動産財團ニ對スル權利ヲ定ム但此割合外ニ受取リタルモノハ之ヲ動産財團中ニ返還ス

右ノ返還金額ハ純粹ノ無特權債權者ト有益ニ配當ニ加入スルヲ得ル抵當債權者及ヒ債權ノ一分ノミニ付キ之ニ加入シタル抵當債權者トノ間ニ於テ更ニ之ヲ配當ス

第五節 第三所持者ニ對スル抵當ノ効力

總則

第二百四十八條 抵當不動産カ讓渡サレ又ハ川谷權其他ノ物權ヲ負擔シタルトキハ其權原ノ登記前ニ登記ヲ爲シタル抵當債權者ハ第三取得者ニ對シ債務ノ辨濟ヲ請求スル權利ヲ保有シ又此不動産ノ賣却代價ヲ以テ辨濟ヲ受クル爲メ其不動産ノ徵收ヲ訴追スル權利ヲ附隨ニテ保有ス

然レトモ財產編第四百十九條及ヒ第二百二十條ニ規定シタル期間ヲ以テ爲シ又ハ更新シタル貸借

ハ抵當債權者之ヲ遵守スルコトヲ要ス

第二百四十九條 所有權ノ支分權ヲ抵當ト爲シタル場合ニ於テ債務者其權利ヲ拋棄シタルトキハ其拋棄ノ登記前ニ抵當登記ヲ爲シタル債權者ハ其拋棄ニ拘ハラズ追及權ヲ保有ス

第二百五十條 公正證書ヲ以テ設定シタル抵當ハ其不動産ヲ差押ヘ之ヲ賣却セシメタル無特權債權者ニハ脫落ノ登記前ニ其抵當登記ヲ爲シタルトキハ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得但第二百五十四條ニ掲ケタル場合ニ於テ爲セル登記ノ無効タルコトヲ妨ケス

第二百五十一條 第三所持者ノ破産又ハ無資力ハ其取得ノ登記アルマテハ抵當登記ノ妨礙ト爲ラス

第二百五十二條 第三所持者ハ場合ニ從ヒテ左ノ方法ニ依ルコトヲ得

第一 抵當債務ヲ辨濟スルコト

第二 滌除スルコト

第三 財産檢索ノ抗辯ヲ以テ對抗スルコト

第四 不動産ヲ委棄スルコト

第五 所有權徵收ヲ受クルコト

第一款 抵當債務ノ辨濟

第二百五十三條 第三所持者ハ抵當債務ノ滿期ト爲ルニ從ヒ之ヲ辨濟スルニ於テハ所有權徵收又ハ妨礙ヲ受クルコト無シ

第二百五十四條 第三所持者ハ債務ノ全部又ハ一分ヲ辨濟シタルトキハ財産編第四百八十二條第一號第四百八十三條第四號及ヒ第五號ニ從ヒ其辨濟ヲ得タル債權者ニ屬スル他ノ抵當擔保及

利益ニ代位ス

利益ニ代位ス

又第三所持者ハ其辨濟ヲ得サリシ債權者ヨリ所有權徵收ノ訴追ヲ受クルコト有ル可キ場合ノ爲メ其所持セル不動産ノ負擔スル抵當ニ付キ辨濟ヲ得タル債權者ニ未定ニテ代位ス

第二款 滌除

第二百五十五條 第三所持者ハ登記シタル總テノ抵當債務ヲ辨濟セサルモ債權者ニ其登記ノ順序ニ從ヒ不動産ノ取得代價、其評價若クハ之ニ超ユル金額ヲ拂渡シ又ハ債權者ノ爲メニ之ヲ供託シテ不動産ノ負擔ヲ免カレシムルコトヲ得但下ニ規定セル如キ提供及ヒ滌除ノ手續ヲ爲シタル後債權者ノ明示又ハ默示ノ承諾アリタルコトヲ要ス

第二百五十六條 停止條件附ニテ不動産ヲ取得シタル者ハ條件ノ成就ニ因リテ其權利ノ定マラサル間ハ滌除スルコトヲ得ス

解除條件附ニテ取得シタル者ハ條件ノ到來セサルニ因リテ其權利ノ定マル前ト雖モ滌除スルコトヲ得

此場合ニ於テ第三所持者ノ提供カ承諾セラレタルモ其金額ハ抵當債務ヲ全ク辨濟スルニ足ラズシテ其抵當ヲ抹消シタル後第三所持者ノ取得カ條件ノ到來ニ因リテ解除スルニ於テハ抹消ヲ受ケタル抵當債權者ノ登記ハ第二百三十七條ニ從ヒテ之ヲ回復ス

又右ノ場合ニ於テ提供カ承諾セラレスシテ下ニ規定セル如ク不動産ヲ競賣ニ付シタルトキハ競落ハ第三所持者ノ爲メ宣告アリタルト其他ノ者ノ爲メ宣告アリタルト問ハス以後解除條件ヲ免カレンム

第二百五十七條 抵當ヲ滌除スル權利ハ主タル債務者ト爲リ又ハ保證人ト爲リテ自身ニテ抵當債務ノ責ニ任スル第三所持者ニ屬セス
又右ノ權利ハ他人ノ債務ノ爲メ自己ノ財産ヲ抵當ト爲シタル者ニ屬セス

第二百五十八條 抵當債權者ヲ參加セシメタル總テノ競賣ニ付テハ滌除ヲ爲スノ限ニ在ラス

公用徵收ニ付テモ亦同シ

右ハ抵當債權者ノ其順位ヲ以テ競落代價又ハ徵收價金ノ配當ニ加入スル權利ヲ妨ケス

第二百五十九條 質借權、使用權、住居權及ヒ地役權ハ滌除ヲ爲ス限ニ在ラス

此等ノ權利ヲ抵當前ニ設定シタルトキハ其附著ノ儘ニ非サレハ不動産ヲ賣却スルコトヲ得

抵當後ニ此等ノ權利ヲ設定シタルトキハ之ヲ斟酌セシテ不動産ノ賣却ヲ訴追スルコトヲ得

然レトモ此末ノ場合ニ於テ第三所持者ハ第二百四十八條第二項ニ記載シタル制限ニ從ヒ質借權ヲ遵守スルコトヲ要ス

第二百六十條 第三所持者ハ債權者ヨリ訴追ヲ受ケサル間ハ何時ニテモ滌除スルコトヲ得又辨濟

ヲ爲スカ又ハ不動産ヲ委棄スルカノ催告ヲ受ケタル後一个月内ニ滌除スルコトヲ得但此ニ違フ

トキハ其權ヲ失フ

然レトモ右ノ失權ハ當然生セス之ヲ請求スルコトヲ要ス但裁判所ハ第三所持者カ正當ノ障礙アリ

リレトコトヲ證シ且債權者カ其遲延ノ爲メニ現實ノ損害ヲ受ケサル可キニ於テハ失權ヲ宣告セサルコトヲ得

又債權者ヨリ第二百六十五條第二號ニ規定シタル一个月ノ期間ニ失權ヲ請求セサルニ於テハ失

權ヲ宣告スルコトヲ得ス

第二百六十一條 第三所持者ハ滌除ノ準備トシテ第三者ニ對スル自己ノ權利ヲ固定スル爲メ其取

得ヲ登記スルコトヲ要ス

右ノ後第三所持者ハ其不動産ノ負擔セル先取特權又ハ抵當ノ目錄ヲ登記官吏ニ要求ス

第二百六十二條 上ニ記載シタル一个月ノ期間ニ第三所持者ハ登記シタル各債權者ト第百十九

條第七十八條及第七十九條ニ從ヒ登記カ抵當ノ登記ニ同シキ效力ヲ有スル債權者トニ左ノ諸件ヲ告知スルコトヲ要ス

第一 取得證書ノ旨趣其日附及ヒ登記ノ日附讓渡人及ヒ取得者ノ氏名職業住所讓受ケタル不動産ノ性質其所在地讓渡ノ代價及ヒ其負擔ヲ指示スル要領書但交換贈與若クハ遺贈ニ因リテ權利ヲ取得シタルトキハ其評價ヲ指示ス可シ

第二 各抵當登記ノ日附其帳簿ノ葉數其債權者ノ氏名住所及ヒ主タル債權トシテ登記シタル金額ヲ明示スル登記表

第三 第三所持者ハ右ノ債權者カ法律ニ從ヒ且一個月ノ期間ニ増價競賣ヲ求メサルニ於テハ滿期未滿期又ハ條件附ノ債權ヲ區別セシテ各債權者ノ抵當登記ノ順序ニ從ヒ之ニ不動産ノ代價其評價若クハ之ニ超ニル金額ノ辨濟又ハ其債權者ノ爲メニ金額ノ供託ヲ爲サントスルノ陳述

第二百六十三條 抵當ヲ登記シタル債權者ノ中ニ先取特權ヲ有スル讓渡人又ハ分割者アルトキハ前條第三號ニ定メタル陳述ニハ此債權者ヲシテ右一個月ノ期間ニ其解除訴權ヲ行ハント欲スル旨ヲ述ヘシムル爲メノ催告ヲ添フルコトヲ要ス但第八十一條及ヒ第八十二條ノ明文ニ因リ法律上ノ抵當ニ變性シタル先取特權ヲ有スル者ニ付テモ亦同シ

第二百六十四條 讓渡證書中ニ抵當ト爲シ及ヒ爲ササル財產アルトキハ取得者ハ抵當財產ノ爲メニノミ提供ヲ爲スコトヲ得又増價競賣ハ此提供ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二百六十五條 凡ソ抵當ヲ登記シタル債權者ニシテ上ニ定メタル提供ヲ受諾セサル者ハ左ノ方式期間及ヒ條件ヲ以テ抵當財產ノ競賣ヲ要求スルコトヲ要ス

第一 共要求ニハ提供金額ノ上少ナクトモ十分一ノ増價ニテ買受クルコトト共増價シタル代

價ノ全部及ヒ費用ノ爲メ十分ナル保證人又ハ擔保ヲ供スル旨ノ陳述トヲ添フルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ共要求ハ無効タリ但此場合ニ於テハ總テノ正本ニ要求者又ハ其特別代理人ノ署名アルコトヲ要ス

第二 右ノ要求ハ提供告知ヨリ一个月内ニ第三所持者ニ之ヲ送達スルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ共要求ハ亦無効タリ

第三 右ノ期間ニ於テ債務者タルト否トヲ問ハス前所有者ニ右ニ同シキ送達ヲ爲スコトヲ要ス

第四 主タル債務者ニ非サル者カ抵當ヲ設定シタルトキモ亦同一ノ期間ニ於テ其債務者ニ送達ヲ爲スコトヲ要ス

第二百六十六條 讓渡人又ハ分割者ニシテ其解除訴權ノ行使ヲ留保セシテ前條ニ規定シタル如ク増價競賣ヲ要求シタル者ハ其訴權ヲ拋棄シタルモノト看做ス

若シ讓渡人又ハ分割者カ右ノ訴權ヲ保存セント欲スルトキハ増價競賣ノ爲メ許與セラレタル期間ト同一ノ期間ニ第三所持者ニ其旨ヲ告知スルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ無効タリ但主タル債務者ナル前所有者ニ對シテ此ニ同シキ告知ヲ爲スコトヲ妨ケス

第二百六十七條 定マリタル方式及ヒ期間ヲ以テ増價競賣ノ告知ヲ爲シタルトキハ其競賣ノ要求者ハ抵當ノ登記ヲ爲シタル他ノ債權者ノ承諾ナクシテ競賣ヲ言消スコトヲ得ス其債權者ハ此増價競賣ノ實行ヲ要求スルコトヲ得

若シ競賣ノ實行アリタルトキハ第二百七十八條以下ヲ適用ス

第二百六十八條 孰レノ債權者ヨリモ有效ニ競賣ヲ求メサリントキハ不動産ノ滌除ハ債權者間ノ協議上若クハ裁判上ノ順序配當ニ依ル辨濟ヲ以テ又ハ債權者ノ名ニ於テスル供託ヲ以テ不動産

ヲ排除ス但此供託ニ付テハ像メ實物提供ヲ爲スコトヲ要セス
此場合ニ於テ總テノ抵當ハ之ヲ抹消ス其元資ノ不足シタルモノト雖モ亦同シ

第二百六十九條 右ノ如ク排除ヲ實行シタル後第三所持者ハ左ノ區別ニ從ヒ其讓渡人ニ對シテ擔保ノ求償權ヲ有ス

第一 買賣ノ場合ニ於テハ其買賣代價外ニ提供シ及ヒ辨濟シタルモノノ爲メ

第二 交換其他ノ有償契約ノ場合ニ於テハ讓渡人ニ對スル自己ノ義務外ニ辨濟シタルモノノ爲メ但自己ノ供給シタル對價物ノ返還ヲ受ケサルトキニ限ル

第三 贈與又ハ遺贈ノ場合ニ於テハ贈與者又ハ遺言者ノ免責ニ付キ辨濟シタルモノノ爲メ

第四 總テノ場合ニ於テ自己ノ負擔シタル條除手續ノ費用ノ爲メ

第三款 財産檢索ノ抗辯

第二百七十條 主トシテ抵當債務ノ責ニ任セサル第三所持者ハ訴追債權者ニ對シテ同一債務ノ爲メニ抵當ト爲リタル他ノ不動産ヲ像メ檢索シテ之ヲ賣却セシメント求ムルコトヲ得但此カ爲メニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 其不動産カ義務ヲ履行ス可キ場所ノ控訴院ノ管轄内ニ在ルコト

第二 其不動産カ猶ホ主タル債務者ニ屬スルコト

第三 其不動産カ爭ニ係ラサルコト

第四 其不動産カ債權者ノ登記ノ順位ト其價額トヲ斟酌シテ之ニ全部ノ辨濟ヲ得セシムルニ不十分ナルコトノ明白ナラサルコト

右ノ抗辯ハ訴追ノ起初ニ之ヲ提出スルコトヲ要ス

第二百七十一條 第三所持者ハ第二十條乃至第二十三條ニ從ヒ保證人ノ分限ヲ以テ己レニ屬スル

檢索ノ利益ヲ拋棄シタルトキト雖モ抵當財産檢索ノ抗辯ノ利益ヲ失ハス

第二百七十二條 他人ノ債務ノ爲メ自己ノ不動産ヲ抵當ト爲シタル者ハ檢索ノ抗辯ヲ以テ對抗スルコトヲ得

連合債務者ノ中ニテ訴追前ニ債務ニ於ケル自己ノ部分ヲ辨濟シタル者ニ付テモ亦同シ

第四款 委乘

第二百七十三條 第三所持者ハ所有權徵收ノ手續中何時ニテモ訴追ノ目的タル不動産ヲ委乘スルコトヲ得其委乘ニ因リ第三所持者ハ訴追債權者ニ所持ノミヲ委付シ不動産ノ所有權ト其法定ノ占有トヲ保存シテ其危險ヲ擔任ス

第二百七十四條 主タル債務者又ハ保證人トシテ自身ニ債務ヲ負擔シタルモノニ非サル第三所持者ノミ委乘ヲ爲スコトヲ得

連合債務者ノ中ニテ債務ニ於ケル自己ノ部分ヲ辨濟シタル者及ヒ供物保證人ハ訴追中ト雖モ委乘ヲ爲スコトヲ得

第二百七十五條 有效ニ委乘ヲ爲スニハ自身ナルト代人ノ資格ナルトヲ問ハス所有權徵收ノ訴追ニ被告トシテ出頭スル能力ヲ有スルヲ以テ足レリトス

第二百七十六條 委乘ハ委乘者又ハ其部理代理人抵當財産所在地ノ裁判所ノ書記課ニ於テ之ヲ陳述シ其陳述書ニ署名シテ訴追債權者ニ告知スルコトヲ要ス

多裁判所ハ訴追債權者又ハ第三所持者其他ノ利害關係人ノ請求ニ因リテ委乘ニ付テノ管財人ヲ選任ス但所有權徵收ノ訴追ハ此管財人ニ對シテ繼續ス

第二百七十七條 第三所持者又ハ其代人ハ競落アルマテハ何時ニテモ委乘ヲ爲シタルト同一ノ方式ヲ以テ其委乘ヲ言消スコトヲ得此場合ニ於テハ訴追債權者ニ對スル總債務ト其時マテノ費用

トヲ一个月内ニ辨濟シ又ハ供託スルコトヲ要ス但他ノ債權者ノ訴追ノ權利ヲ妨ケス又滌除ノ期
間カ經過セサルニ於テハ其債權者ニ對スル滌除ノ權利ヲモ妨ケス

第五款 競賣及ヒ所有權徵收

第二百七十八條 第三所持者カ辨濟ヲ爲サス委乘ヲ爲シ又滌除ヲ提出セサルトキハ抵當債權者
ハ民事訴訟法ニ規定シタル方式ト公示トヲ以テ不動産ヲ競賣ニ付ス

滌除ノ目的ニテ爲シタル提供ノ受諾ヲ得サル場合ニ於テ增價競賣ノ請求アリタルトキモ亦同シ

第二百七十九條 讓渡人又ハ分割者カ第二百六十六條ノ明文ニ從ヒ共先取特權又ハ法律上ノ抵當

權ヲ閣キテ其解除訴權ヲ行ハント欲スル旨ヲ陳述シタルトキハ競賣前ニ共訴ヲ爲スコトヲ要ス

但第三所持者ノ請求ニ因リテ裁判所カ此事ニ付キ定メタル期間ヲ超ユルコトヲ得ス

第二百八十條 總テノ場合ニ於テ解除ノ請求ナク又ハ其認許ナキトキハ第三所持者ハ競賣ノ際競

買人ト爲ルコトヲ得

第三所持者ノ利益ニ於テ競落ヲ宣告シタルトキハ其判決ハ原證書確認ノ證據トシテ其原證書ニ

依ル登記ニ之ヲ附記スルノミ

第二百八十一條 第三所持者ニ非サル者ノ利益ニ於テ競落ヲ宣告シタルトキハ其判決ハ所有權移

轉ノ證據トシテ特ニ之ヲ登記シ且前登記ニ之ヲ附記ス

第二百八十二條 前條ノ場合ニ於テハ競落ノ不動産ト第三所持者ニ屬スル他ノ不動産トノ間ニ存

在セシ地役權ハ一旦混同シタルモ働方及ヒ受方ニテ再生シ其混同ハ解除セラレ

第三所持者ニ其取得前ヨリ屬セシ利益權質借權其他ノ所有權ノ支分ニ付テモ亦同シ

第二百八十三條 競落ノ執レノ場合ニ於テモ第三所持者カ競落ノ不動産ニ付キ登記シタル抵當ヲ

有セルトキハ其順位ニテ配當ニ加入ス

第二百八十四條 各債權者ニ其登記ノ順序ニ從ヒテ競落代價ヲ辨濟シ尙ホ剩餘アルトキハ其剩餘
ハ競落人タルト否トヲ問ハス第三所持者ニ屬ス

若シ競落前ニ第三所持者ノ債權者カ右ノ不動産ニ付キ抵當ノ登記ヲ爲シタルトキハ其債權者ハ
前所有者ニ對シテ登記シタル債權者ニ次キ配當ニ加入ス

第二百八十五條 第三所持者カ抵當不動産ノ占有中其所爲ニ因リテ之ヲ毀損シ又ハ之ニ必要若ク
ハ有益ノ出費ヲ爲シタルトキハ第三所持者ト抵當債權者トノ間ニ於テ其計算ヲ爲ス

第二百八十六條 第三所持者ハ委乘スルカ又ハ辨濟スルカノ催告ヲ受ケタル後ニ非サレハ債權者
ニ對シテ果實ノ計算ヲ爲スコトヲ要セス

第二百八十七條 如何ナル場合ニ於テモ競落代價ノ辨濟又ハ其供託ノ後ハ登記シタル總抵當ハ之
ヲ抹消シ不動産ハ滌除セラレ其元資ノ不足シタル抵當モ亦同シ

第二百八十八條 競落ノ後第三所持者ハ左ノ如ク讓渡人ニ對シテ擔保ノ求償權ヲ有ス

第三所持者カ競落人ト爲リタルトキハ第二百六十九條ニ記載シタル如ク賠償ヲ受ケ

外人ノ利益ニ於テ競落ノ宣告アリタルトキハ第三所持者ハ普通法ニ依リテ追奪擔保ニ付テノ權
利ヲ有ス但左ノ區別ニ從フ

第一 買賣其他ノ有償取得ノ場合ニ於テ競落代價カ取得ノ原代價又ハ對價ヲ超過シタルトキ
ハ此差額ハ第三所持者カ權利ヲ有スル損害賠償中ニ増價トシテ之ヲ加フ

第二 贈與又ハ遺贈ノ場合ニ於テハ第三所持者ハ競落カ贈與者若クハ遺言者ノ相續人ヨリシテ
抵當債務ヲ免カレシメタル限度ニ非サレハ贈與者又ハ遺言者ノ相續人ヨリ賠償ヲ受ケス
手續ノ費用ハ競落人ヨリ之ヲ第三所持者ニ辨償ス

第六節 登記官吏ノ責任

第二百八十九條 登記官吏ノ民事上ノ責任ニ關スル財産編第三百五十五條ハ抵當登記ノ脱漏又ハ訛誤ニ之ヲ適用ス

第二百九十條 登記官吏カ第三所持者ノ爲メ登記ヲ爲シタル後之ニ交付シタル認證書中一箇又ハ數箇ノ抵當登記ヲ脱漏シ此脱漏ノ爲メ登記債權者カ消除ノ提供又ハ競落ノ手續ニ加ハラサリシトキト雖モ猶ホ不動産ノ抵當ハ消除セラル

第二百九十一條 消除ノ提供ニ對スル増價競賣ノ爲メ第二百六十五條ニ定メタル期間ノ満了セサル間ハ脱漏セラレタル債權者ハ其脱漏ヲ第三所持者ニ告知シ之ニ提供ノ通示ヲ求メ増價競賣ヲ要求シ又所有權徵收ノ手續カ終了セサルトキハ之ニ加ハルコトヲ得然レトモ此カ爲メ其手續ヲ遅延スルコトヲ得ス

如何ナル場合ニ於テモ右ノ債權者ハ協議上又ハ裁判上ニテ發開シタル順序配當手續ノ閉鎖セサル間ハ之ニ加ハルコトヲ得

右ハ前記ノ債權者カ脱漏ニ因リテ損害ヲ受ケタルコトヲ説明スルニ於テハ登記官吏ニ對スル求償權ヲ妨ケス

登記官吏ハ主タル債務者又ハ其保證人ノ免責ノ爲メ右ノ求償ニ因リテ辨濟シタルモノニ付キ之ニ對シテ求償權ヲ有ス

第七節 抵當ノ消滅

第二百九十二條 抵當ハ左ノ諸件ニ因リテ消滅ス

第一 主タル義務全部ノ確定ノ消滅但更改ノ場合ニ付キ財産編第五百三條ニ記載シタルモノヲ妨ケス

第二 債權者ノ抵當ノ拋棄

第三 時效

第四 消除但債權者提供ヲ受諾シ且第二百六十八條ニ從ヒテ提供金額ノ辨濟又ハ供託アリタルトキ

第五 競落但第二百五十八條及ヒ第二百八十七條ニ從ヒテ競落代價ノ辨濟又ハ供託アリタルトキ

第六 抵當不動産ノ全部ノ滅失但第二百一條ニ從ヒテ債權者ノ權利カ其滅失ヨリ生ス可キ賠償ニ移轉スルコトヲ妨ケス

第七 公用徵收但抵當債權者ニ其價金ヲ辨濟スルコトヲ妨ケス

第二百九十三條 義務ノ消滅カ裁判上ニテ認メラレタル原因ニ由リテ取消サレタルトキハ登記ヲ抹消シタリト雖モ抵當ハ其原順位ニ復ス

然レトモ其抵當ハ抹消ノ後新登記ヲ爲ス前又ハ登記ヲ復シタル判決ヲ原登記ニ附記スル前ニ登記ヲ爲シタル債權者ヲ害スルコトヲ得ス

第二百九十四條 抵當ノ拋棄ハ場合ニ從ヒ有償又ハ無償ニテ債權ヲ處分スル能力ヲ有スル債權者ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

債權者其抵當順位ノミノ拋棄ヲ爲ストキモ亦同シ

抵當又ハ順位ノ拋棄ハ默示タルコトヲ得

債權者カ讓渡人ト共ニ抵當不動産ノ讓渡ニ参加シタルトキハ追及權ノミニ關シテ其抵當ヲ拋棄シタリト看做ス但法律上特別ニ其参加ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス

第二百九十五條 抵當ノ時效ハ不動産カ債務者ノ資産中ニ存スル場合ニ於テハ債權ノ時效ト同時ニ非サレハ成就セス

右ノ場合ニ於テ債權ニ關シ時効ノ進行ヲ中斷スル行爲及ヒ之ヲ停止スル原因ハ抵當ニ關シテ同
一ノ效力ヲ生ス

第二百九十六條 抵當不動産ノ所有者タル債務者カ其不動産ヲ讓渡シテ取得者又ハ其承繼人カ之
ヲ占有スルトキハ登記シタル抵當ハ抵當上ノ訴訟ヨリ生スル妨碍ナキニ於テハ取得者カ其取得
ヲ登記シタル日ヨリ起算シ二十年ノ時効ニ因リテノミ消滅ス但債權カ免責時効ニ因リテ其前
ニ消滅ス可キ場合ヲ妨ケス

第二百九十七條 眞ノ所有者ニ非サル者カ不動産ヲ讓渡シタルトキハ占有者ハ其善意ナルト惡意
ナルトニ從ヒ所有者ニ對シテ時効ヲ得ル爲メニ必要ナル時間ノ經過ニ因リ抵當債權者ニ對シテ
時効ヲ取得ス

無權原ニテ不動産ヲ占有スル者ニ付テモ亦同シ

第二百九十八條 第三所持者ノ爲メノ抵當消滅ノ時効ハ登記ノ更新ニ因リテ中斷セラレヌ然レト
モ其時効ハ占有者ノ任意ニテ爲シタル抵當ノ追認及ヒ第二百六十條ニ規定シタル如ク其占有者
ニ爲シタル催告ニ因リ其他證據編第九條以下ニ規定シタル如ク總テ抵當權ニ效力ヲ與フル行
爲ニ因リテノミ中斷セラル

右ノ時効ハ債權ニ附著スル期限又ハ條件ニ因リテ停止セラレヌ但債權者ハ證據編第二百二十八條
ニ規定シタル如ク其權利ヲ保存スルコトヲ得

此他證據編第三百一十一條乃至第三百三十六條ニ規定シタル停止ノ原因ハ抵當ニ之ヲ適用ス

民法證據編目錄

第一部 證據

總則

第一章 判事ノ考覈

第一節 當事者申述ノ聽取係爭物竝ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第二節 陪檢

第三節 鑑定

第二章 直接證據

第一節 私書

第一款 私署證書

第二款 署名捺印セサル證書

第二節 口頭自白

第一款 裁判上ノ自白

第二款 裁判外ノ自白

第三節 公正證書

第四節 反對證書

第五節 追認證書

第六節 證書ノ原本

第七節 證人ノ陳述

第八節 世評

第三章 間接證據

第一節 法律上ノ推定

第一款 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定
 第二款 私益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定
 第三款 輕易ナル法律上ノ推定

第二節 事實ノ推定

第二章 時效

第一章 時效ノ性質及ヒ適用
 第二章 時效ノ拋棄
 第三章 時效ノ中斷
 第四章 時效ノ停止
 第五章 不動産ノ取得時效
 第六章 動産ノ取得時效
 第七章 免責時效
 第八章 特別ノ時效

附則

民法

證據編

第一部 證據

總則

第一條 有的又ハ無的ノ事實ヨリ利益ヲ得シカ爲メ裁判上ニテ之ヲ主張スル者ハ共事實ヲ證スル責アリ

相手方ハ亦自己ニ對シテ證セラレタル事實ノ反對ヲ證シ或ハ共事實ノ效力ヲ減却セシムル事實トシテ主張スルモノヲ證スル責アリ

第二條 自己ノ主張ノ全部又ハ一分ヲ法律ニ從ヒテ證セス又ハ判事カ證據ヲ査定スル權ノ自由ナル場合ニ於テ判事ニ此主張ノ心證ヲ起サシメサリシ原告若クハ被告ハ其證セサリシ點ニ付キ請求又ハ抗辯ニ於テ敗訴ス

第三條 當事者ノ一方ハ或ル事實ノ證據カ將來已レノ爲メニ利益アルトキハ其利益ト證據喪失ノ危險トヲ疏明シテ訴訟ノ起ラサル前ト雖モ共事實ノ證據ヲ舉クルコトヲ裁判上主トシテ請求スルコトヲ得

第四條 下ニ定メタル規則ハ物權、人權及ヒ人ノ身分ニ關スル證據ニ共通ノモノトス但特別ノ規定ヲ妨ケス

第五條 證據ハ左ノ諸件ヨリ成ル

第一 判事ノ考覈

第二 直接證據

第三 間接證據

第一章 判事ノ考覈

第六條 判事ハ左ノ諸件ニ依リ主張セラレタル事實ノ確實ヲ得タルトキハ自己ノ考覈ニ依リテ爭ヲ決スルコトヲ得

第一 當事者又ハ其代人ノ申述ノ聽取、係爭物並ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第二 臨檢

第三 鑑定

第一節 當事者申述ノ聽取係爭物並ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第七條 當事者ノ自白アル場合ノ外當事者又ハ其代人ノ申述及ヒ說明ヨリ請求若クハ抗辯ノ證セラレサルコト又ハ尙ホ早キコトノ顯ハルルニ於テハ判事ハ其請求若クハ抗辯ヲ棄却シ又ハ他日本案ノ判決ヲ爲ス可キ旨ヲ言渡ス

右判事ノ心證カ係爭物及ヒ證書外ノ書類ノ調査ヨリ生スルトキモ亦同シ

第八條 受ケタル損害若クハ失ヒタル利益其他原因ニ爭ナク供給ス可キ價額ニ付キ爲ス可キ評價ノミニ爭ノ存スル場合ニ於テ判事ハ當事者又ハ其代人ノ陳述ヲ聽キ此評價ニ必要ナル元素ヲ得タルトキハ自ラ其評價ヲ爲スコトヲ得

第九條 事實ニ爭ナク法律ノ點ノミニ爭ノ存スルトキハ判事ハ當事者又ハ其代人ノ陳述ヲ聽キ法律ノ規定ヲ其精神ト明文トニ依リテ解釋シ且條理ト公道トノ普通原則ニ依リテ之ヲ補完シ自己ノ心證ヲ取ル

第二節 臨檢

第十條 境界、地役、占有、財産ノ損害及ヒ不動産工事ノ執行ニ關スル爭其他此ニ類似ノ爭ニ付テハ勿論裁判所ニ移送スルコトヲ得サル動産ノ形狀ヲ證スルニ關スルトキト雖モ判事ハ主張セラレタル事實ヲ直接ニ知ルコトヲ以テ訴訟事件ヲ明カナラシムルニ有益ナリト思考スルトキハ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申立ニ因リテ係爭物又ハ爭ヲ決定ス可キ元素ノ存在スル場所ニ臨檢スルコトヲ得

第三節 鑑定

第十一條 法律ニ於テ鑑定ニ依ル可キ旨ヲ定メタル場合ノ外判事ハ爭ノ判決ニ付キ特別ノ知識ヲ要スルトキハ何時ニテモ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申立ニ因リテ自己ノ考覈ヲ助ケンムル爲

メ鑑定人ノ報告ヲ爲ス可キ旨ヲ命スルコトヲ得

判事ハ鑑定人總員一致ノ説ト雖モ之ニ從フ義務ナシ

第二章 直接證據

第十二條 左ノ諸件ニ於テハ人ノ證言ヨリ生スル直接ノ證據アリトス

第一 私書

第二 口頭自白

第三 公正證書

第四 證人ノ陳述

第一節 私書

第十三條 私書ノ證據力ハ其私書ノ對抗ヲ受クル當事者ノ之ニ署名シ又ハ捺印シタルト否トニ從ヒテ輕重アリ

第一款 私署證書

第十四條 私署證書ハ之ヲ以テ對抗セラルル者ニ不利ナル事實ノ陳述又ハ追認ヲ記載シ且其署名及ヒ印章又ハ其一アルトキハ署名者捺印者ノ裁判外ノ自白即チ證書ヲ成スモノトス

右同一ノ條件ヲ有スル書狀ハ私署證書ト同一ノ證據力ヲ有ス

第十五條 自己ノ利益ニ於テ私署證書ヲ有スル者カ或ル者ヲ其署名者ナリト主張シ又ハ思考スル場合ニ於テハ爭ノ生スル前ト雖モ其者ニ對シ手跡署名及ヒ印章ノ追認ヲ請求スルコトヲ得署名者ナリト主張セラレタル者ハ其手跡署名及ヒ印章ノ真正ナルコト又ハ其一ノ真正ナルコトヲ明確ニ追認シ又ハ否認スルコトヲ得ルノミ

裁判所ヨリ本條ノ規定ノ口諭ヲ受ケタル者否認ヲ爲ササルトキハ裁判所ハ其否認セサルモノニ

付テハ之ヲ追認シタリト認定スルコトヲ得

第十六條 印章ニ關シテハ其印章ヲ提示セラレタル者ハ其印章ノ自己ノ印章ニ相違ナキコトヲ追認スルモ抑捺ハ自身又ハ自己ノ許諾ニテ之ヲ爲シタルヲ否認スルコトヲ得但總テノ方法ヲ以テ其證據ヲ供スルコトヲ要ス

此追認證書ヲ與フル前ニ右ノ異議ヲ留メサリシトキハ其後ニ至リ右ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得ス又其署名又ハ印章ヲ追認シタルトキハ其署名又ハ印章ノ獲ラレシ手段タル強暴、錯誤又ハ詐欺ヲ最早主張スルコトヲ得ス但強暴カ既ニ止ミ又ハ錯誤若クハ詐欺ヲ既ニ發見シ且此事ニ付キ何等ノ異議ヲ留メタルトキハ追認ヲ爲シタルトキニ限ル

第十七條 署名者ナリト主張セラレタル者ノ相續人、承繼人又ハ代人ニ對シテ追認ノ請求アリタルトキハ被告ハ或ハ自己ノ代表スル者ノ署名若クハ印章ヲ知ラサル旨或ハ其使用ノ不確實ナル旨ヲ陳述スルニ止マルコトヲ得

右ノ相續人、承繼人又ハ代人ハ印章ノ不正當ナル抑捺又ハ承諾ノ瑕疵ヨリ生スル無効ノ方法ヲ申立ツル權利ヲ失ハス但此事ニ關シ異議ヲ留ムルコトヲ怠リタルトキト雖モ亦同レ

第十八條 被告ハ異議ヲ留メシテ署名又ハ印章ヲ追認シタリト雖モ後ニ捺印白紙ノ濫用又ハ署名若クハ印章ノ偽造アリタルコトヲ證スル權利ヲ失ハス

然レトモ右ノ追認アリタルコトヲ知り其證書ニ依リ善意ニテ約定シタル第三者ニ證書無効ノ方法トシテ捺印白紙ノ濫用ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

第十九條 一人又ハ數人ノ證人カ私署證書ニ加署シ又ハ加印シタルトキハ其證人ヲ手跡驗真ニ召喚ス

第二十條 手跡、印章又ハ署名ノ驗真ノ請求ニ關スル方式並ニ期間及ヒ被告又ハ其代人ノ出席セサルニ因リ此等ノ者ニ於テ印章又ハ署名ヲ追認シタリト爲スコトヲ得ヘキ場合ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ定ム

署名者ナリト主張セラレタル者ノ明確ニ否認シ又ハ其相續人若クハ承繼人ノ追認ヲ爲ササル場合ニ於ケル手跡驗真手續ノ規則ニ付テモ亦同シ

第二十一條 雙務契約ヲ證スル私署證書ハ反對ノ利益ヲ有スル當事者間ニ正本ニ通ヲ作り且之ニ署名又ハ捺印スルコトヲ要ス

又各正本ニハ一通ヲ作りタル旨ヲ附記スルコトヲ要ス
然レトモ當事者ハ一通ノ證書ヲ作ルコトヲ得但其證書中指定シタル第三者ニ之ヲ寄託スルコトヲ合意シタルトキニ限ル

右ノ場合ニ於テ第三者ハ各當事者ノ求ニ應シテ其證書ヲ示ササル可カラズ但當事者雙方ノ承諾ナクシテ之ヲ交付スルコトヲ得ス

第二十二條 證書ノ調製及ヒ其數ノ附記又ハ證書ノ寄託ハ當事者カ合意ノ組成ヲ緊ラシメタル條件ト看做ス

然レトモ前條ニ從ヒテ證書ノ錄製アラサリシ契約ノ全部又ハ一分ヲ履行シタル當事者ハ最早條件ノ不履行ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二十三條 片務契約ヲ證スル私署證書ニ金錢其他ノ定量物ヲ供與シ辨濟シ又ハ返還スル諾約ヲ包有スル場合ニ於テ債務者カ證書ノ本文ヲ自書セサルトキハ債務者ハ其署名若クハ捺印ノ外尙ホ金額若クハ數量ノ文字ニ捺印スルコトヲ要ス但數人ノ債務者アルトキハ其中ノ一人此捺印ヲ爲スヲ以テ足レリトス

第二十四條 二通ノ正本及ヒ前條ノ方式ハ商事ニ付テハ之ヲ要セス

第二十五條 前數條ノ方式ニ從ヒ調製シタル私署證書ニシテ其對抗ヲ受クル者カ追認シ又ハ裁判上ニテ其者カ追認シタリト爲シタルモノハ其主文及ヒ之ト直接ノ關係ヲ有シ且之ヲ補完スル文言ニ付テハ其者ニ對シテ完全ナル證據トス

此他ノ文言ハ書面ニ因ル證據端緒ノミニ之ヲ用ユルコトヲ得

第三十八條ニ記載シタル自白不可分ナル原則ハ證書ノ各部分ニ之ヲ適用ス

第二十六條 證書カ第十八條ニ規定シタル如ク捺印白紙ノ濫用又ハ偽造ノ攻撃ヲ受ケタルトキハ其證據力ハ刑事裁判所ニ被告ノ送致アルニ因リテ停止セラレ其裁判所ノ判決ノ確定ト爲ルマテ民事ノ判決ヲ中止ス

嫌疑アル人ノ死亡其他ノ原因ニ由リテ刑事審問ノ開カレサリシトキハ民事裁判所ハ刑事不受理ノ理由ニ付キ裁判アルマテ本案ノ判決ヲ中止ス

又刑事審問中ナルトキハ民事裁判所ハ當事者ノ要求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其判決ヲ中止スルコトヲ得

第二款 署名捺印セサル證書

第二十七條 商人ノ帳簿ハ總テノ人ノ爲メ共商人ニ對シテ證據ヲ爲ス然レトモ其帳簿ヲ採用スル者ハ此ヨリ生スル自白ヲ分ツコトヲ得ス

此他右帳簿ノ證據力ハ商法ニ於テ之ヲ規定ス

第二十八條 非商人ノ帳簿及ヒ覺書ハ其者ノ爲メ證據ヲ爲サス

右ノ帳簿及ヒ覺書ハ其者ニ對シテ下ノ區別ニ從ヒテ證據ヲ爲ス

第二十九條 債權者ノ書面ハ左ノ場合ニ於テハ債權者ノ爲メ其債權者ニ對シテ證據ヲ爲ス

第一 債務者ノ辯護其他ノ免責ヲ明カニ掲グルトキ但債權者ニ於テ債務者ニ交付スル爲メ準備セル受取證書タルコトヲ證スルトキハ此限ニ在ラス

第二 債務者ノ證書又ハ從來ノ受取證書ニ免責ヲ書込ミ且其書額カ債務者ノ手ニ存スルトキ

第三十條 債務者ノ書面ニ其義務ヲ掲ケ且之ヲ以テ債權者ノ證書ノ用ニ供スルモノタルコトヲ記載スルトキハ其書面ハ債務者ニ對シテ證據ヲ爲ス

第三十一條 前二條ノ場合ニ於テ抹殺シタル書面ハ之ヲ斟酌セス但其抹殺カ詐害又ハ錯誤ニ出テタルコトノ證アルトキハ此限ニ在ラス

第三十二條 非商人ハ裁判上ニテ帳簿及ヒ覺書ヲ差出タス義務ナシ然レトモ任意ニテ之ヲ差出シタルトキハ爭ニ關スルモノヲ抄録シタル後ニ非サレハ之ヲ取戻スコトヲ得ス但抄録ヲ爲スニハ其者ノ出席ノ上又ハ之ヲ合式ニ召喚シタルトキニ限ル

第二節 口頭自白

第三十三條 口頭自白ハ一方ノ當事者ガ已レニ不利ナル權利上ノ結果ヲ生スルコト有ル可キ事實ニ付キ爲スモノナリ其自白ハ裁判上ノモノ有リ裁判外ノモノ有リ

第一款 裁判上ノ自白

第三十四條 裁判上ノ自白ハ自發ノモノ有リ又ハ民事訴訟法ニ規定シタル本人訊問ニ因リテ爲スモノ有リ

第三十五條 自白ハ其自白ニ繋ル權利ヲ處分スル能力ヲ有スル者ニ非サレハ有効ニ之ヲ爲スコトヲ得ス但法律上自白ノ證據ヲ禁シタル事實ニ非サルトキニ限ル

代理人ノ爲シタル自白ハ其管理行爲ニ關スル外特別ノ委任ニ依リタルトキニ非サレハ有効ナラス但裁判上ノ代人ノ自白ト其陳述取消ノ方式及ヒ條件トニ關スル民事訴訟法ノ規定ヲ妨ケス

第三十六條 前條ニ從ヒテ爲シタル自白ヲ相手方ノ受諾シ又ハ之ヲ裁判所ニ於テ認メタルトキハ其自白ハ之ヲ爲シタル者ニ對シテ完全ノ證據ヲ爲ス

然レトモ其自白ハ事實ノ錯誤ノ爲メニ之ヲ言消スコトヲ得
第三十七條 自白ハ法律ノ錯誤ノ爲メ之ヲ言消スコトヲ得ス

然レトモ相手方ノ權利ヲ直接又ハ間接ニ追認シタル者ハ其權利ノ原因及ヒ存續ヲ爭フ權能ヲ失ハス

第三十八條 複雑ナル自白ヲ援用セント欲スル者ハ陳述セラレタル數箇ノ事實ニ關シ其自白ヲ分ツコトヲ得ス但此等ノ事實カ相牽連シタルトキニ限ル

然レトモ主タル事實ヲ變更スル事實ノ主張ハ通常ノ證據方法ヲ以テ駁撃スルコトヲ得

第三十九條 裁判上ノ自白ノ効力ハ裁判所ノ管轄違カ公ノ秩序ニ關セサルモノタルトキハ其管轄違ニ因リテ無効ト爲ラス

反對ノ場合ニ於テハ自白ハ裁判外ノモノトシテノミ有効ナリ

第四十條 一方ノ當事者カ訴訟事件ノ或ル事實ノ存在ニ付キ陳述ス可キノ求ヲ受ケテ其事實ヲ爭ハサルニ因リ之ヲ追認シタリト看做ス場合ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第四十一條 一方ノ當事者カ廢疾其他ノ原因ニ由リテ語ルコトヲ得スト雖モ書面又ハ容態ヲ以テ裁判所ニ答フルコトヲ得ルニ於テハ裁判上ノ自白ノ規則ヲ之ニ適用ス

第二款 裁判外ノ自白

第四十二條 裁判外ノ自白ハ相手方又ハ其代人ノ面前ニ於テ口頭ニテ又ハ此等ノ者ニ送付シタル信書若クハ書類ニテ之ヲ爲シタルニ非サレハ其効ヲ有セス
此求ノ場合ノ外口頭ノ自白ヲ受ケ及ヒ證スル資格ヲ有スル官廳ニ於テ更ニ其自白ヲ爲サザリシ

トキハ人證ヲ許ス場合ニ非サレハ證人ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得ス

第四十三條 裁判上ノ自白ノ有効ナル爲メ要スル能力、其證據力、其言消及ヒ其不可分ニ關スル前數條ノ規定ハ裁判外ノ自白ニ之ヲ適用ス

然レトモ判事ハ確實ニシテ明白ナル自白ニ非サレハ之ヲ採用スルコトヲ得ス

第四十四條 上ノ規定ハ義務ノ全部又ハ一分ノ履行ヲ法律上ニテ默示ノ自白ト看做ス可キ場合ヲ妨ケス

第四十五條 裁判外ノ自白ハ有効ニ之ヲ言消シタリト雖モ相手方ノ利益ニ於テ時効ノ中斷ヲ生ス然レトモ自白ノ日以後ニ經過ス可キ時効ハ言消ノ日ヨリ再ヒ進行ス

第三節 公正證書

第四十六條 公正證書ハ公吏カ當事者ヨリ證スルコトヲ託セラレタル事實ニ付テノ證言ナリ又官廳ノ代人トシテ事ヲ行フ官吏ノ調製シタル證書ハ公正ナリ

證書ハ公吏カ場所、證書ノ性質及ヒ其證書ニ關係スル人ニ付キ管轄ヲ有シ且法律ニ定メタル方式ニ從ヒテ之ヲ作リタルニ非サレハ公正ナラス

公證人其他當事者ノ囑託ニ應ス可キ公吏ノ管轄及ヒ其證書ノ方式ハ特別法ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 前條ニ從ヒテ作リタル證書ハ偽造ノ申立アルマテハ公吏自身ニテ又ハ其面前ニテ爲シタル行爲及ヒ申述ニ付キ其吏員ノ陳述ノ證據ヲ爲ス

此證書ハ之ニ記載シタル日附ニ付キ右同一ノ證據ヲ爲ス
公吏ノ名ニテ作リ且其署名及ヒ印章ヲ具ヘタル證書ハ偽造ノ申立アルマテハ其吏員ヨリ出テタルモノト推定ス

偽造申立手續ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第四十八條 公正證書ノ證據力ハ偽造ノ申立ニ因リテ之ヲ停止ス其執行力ニ付テモ亦同シ
主文ト直接又ハ間接ノ關係アル文言ニ關シテハ第二十五條ノ規定ヲ適用ス

第四十九條 證書ニ公正證書トシテ有効ナル爲メ上ニ定メタル條件ノ一ヲ缺クコト有ルモ出捐ヲ爲ス總テノ當事者カ現實ニ之ニ署名シ又ハ捺印シタルトキハ其證書ハ第二十一條及ヒ第二十三條ニ定メタル條件ヲ履行セスト雖モ私署證書トシテ有効ナリ

第四節 反對證書

第五十條 當事者ハ秘密ニ存シ置ク可キ反對證書ヲ以テ公正證書又ハ私署證書ノ効力ノ全部又ハ一分ヲ變更シ又ハ滅却スルコトヲ得然レトモ其反對證書ハ公正證書タルトキト雖モ署名者及ヒ其相續人ニ對スルニ非サレハ効力ヲ有セス

然レトモ當事者ノ債權者及ヒ特定承繼人カ當事者ト約定スルニ當リ反對證書アルヲ知リタルコトヲ證スルニ於テハ之ヲ以テ其債權者及ヒ承繼人ニ對抗スルコトヲ得

第五十一條 不動產權利ニ關スル反對證書カ或ハ登記ニ因リ或ハ其附記ニ因リテ公ニ爲サレタルトキハ其反對證書ハ通常ノ効力ヲ取得ス總テ遡及ノ効力ヲ有セス

第五十二條 孰レノ場合ニ於テモ一方ノ當事者ノ總テノ承繼人ハ他ノ當事者及ヒ其相續人ニ反對證書ヲ以テ對抗スルコトヲ得

第五節 追認證書

第五十三條 追認證書ハ當事者ノ一方カ已レニ不利ナル公正又ハ私署ノ原證書ノ成立ヲ追認スル證書ナリ

右ノ證書ハ下ノ二箇ノ場合ヲ除キ原告ヲシテ原證書ヲ差出タス義務ヲ免カレシメス又其證書中ニ原證書ヨリ更ニ多ク又ハ更ニ少キ事項ヲ記シ又ハ之ト異ナリタル事項ヲ記スルモノハ其効ナ

レ但追認證書中ニ之ヲ原證書ニ代用ス可キ旨ヲ記載シタルトキハ此限ニ在ラス

第五十四條 左ノ二箇ノ場合ニ於テハ追認證書ハ原證書滅失ノ證アルトキ之ニ代ハルモノトス

第一 追認證書ニ原證書ノ事項ヲ再掲シタル旨ヲ記載スルトキ

第二 追認證書ノ日附ヨリ二十个年ヲ經過シ且之ヲ援用スル者カ其證書ノミヲ既ニ權利ノ行使ニ用非タルトキ

第五十五條 前條ノ場合ノ外原告カ原證書ヲ差出タスコトヲ得サルトキハ追認證書ハ其利益ニ於テハ書面ニ因ル證據端緒トシテ有效ナリ

總テノ場合ニ於テ追認證書ハ時効ヲ中斷ス

第六節 證書ノ謄本

第五十六條 裁判所又ハ當事者ヨリ正本ノ差出ヲ求ムルニ於テハ證書ノ謄本ハ之ヲ援用スル者ヲシテ其正本ヲ差出タス義務ヲ免カレシメス但其者カ正本ノ滅失ヲ證シタルトキハ此限ニ在ラス然レトモ公正ノ正本又ハ裁判上追認アリタル私署ノ正本カ原本トシテ公吏ノ許ニ藏メラレタル場合ニ於テ裁判所ニ其正本ヲ差出タスコトハ裁判所ノ命令ニ依リ民事訴訟法及ヒ公吏ノ規則ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第五十七條 正本ノ滅失シタルトキ其謄本ハ左ノ四箇ノ場合ニ於テハ正本ト同一ノ證據力ヲ有ス

第一 公吏ノ作リシ公正證書ノ正式謄本タルトキ

第二 公正證書ノ謄本又ハ裁判上追認アリ且原本トシテ公吏ノ許ニ藏メタル私署證書ノ謄本ヲ當事者ノ要求ニ因リ其相手方ノ面前ニテ其公吏ノ作リタルトキ

第三 當事者出席ノ上又ハ合式ニ之ヲ召喚シタル上ニテ公吏カ裁判所ノ命ニ依リテ其謄本ヲ作リタルトキ

第四 右三箇ノ場合ノ外適法ニ正本ヲ預リタル公吏ノ作リシ謄本カ異議ヲ受ケスシテ其日附ヨリ二十年ヲ經過シ且當事者間ニ於テ主張セラレタル權利ニ關シ裁判上又ハ裁判外ニテ既ニ採用セラレタルトキ

謄本ニハ左ノ諸件ヲ附記スルコトヲ要ス

右第一ノ場合ニ於テハ其謄本ハ正式謄本タルコト

第二ノ場合ニ於テハ當事者ノ面前ニテ作リタルコト

第三ノ場合ニ於テハ裁判所ノ命ニ依リテ作リタルコト

總テノ場合ニ於テ其謄本ヲ正本ト校合シタル旨又ハ其謄本ノ正本ニ符合スル旨ヲ之ニ附記スルコトヲ要ス

第五十八條 前條ニ記載シタル四箇ノ場合ノ外ハ公吏ノ作リタル證書ノ謄本ハ書面ニ因ル證據端緒ノ用ヲ爲スノミ

第五十九條 公吏ノ作リタル謄本ノ復寫ハ人證ヲ許ス可キ場合ニ限り單純ナル參考書ノ用ヲ爲ス

然レトモ公正證書ノ謄本ヲ登記ノ公簿ニ謄寫シタルトキハ其謄寫ハ書面ニ因ル證據端緒ナリ

裁判上追認アリタル私署證書ノ正本ノ右ニ同シキ謄寫ハ亦書面ニ因ル證據端緒ノ效力ヲ有ス

第六十條 物權又ハ人權ヲ創設シ、移轉シ、變更シ又ハ消滅セシムル性質アル總テノ所爲ニ付テハ其所爲ヨリ各當事者又ハ共一方ノ爲メニ生スル利益カ當時五十圓ノ價額ヲ超過スルトキハ公正

第七節 證人ノ陳述

證書又ハ私署證書ヲ作ルコトヲ要ス

人證ハ右ノ價額ヲ超過スルニ於テハ法律上明示若クハ默示ニテ例外ト爲シタルトキニ非サレハ裁判所之ヲ受理セス

第六十一條 債務契約ニ於ケル證書ノ必要ハ權利ノ最高ナル價額ニ依ル

第六十二條 請求又ハ抗辯ノ目的カ金錢ニ非サル場合ニ於テ相手方カ爭ノ價額五拾圓ヲ超過スル旨ヲ陳述シテ人證ニ異議ヲ申立ツルトキハ裁判所ハ訴訟ノ元素ニ從ヒ又ハ鑑定ニ從ヒテ豫メ價額ヲ爲ス

第六十三條 書面ヲ作リタル場合ニ於テハ書面ニ反スル事項若クハ書面外ノ事項ヲ證スル爲メ又ハ書面ノ意義ヲ變更ス可キ様其調製ノ際若クハ其前後ニ申述シタルモノヲ證スル爲メニハ縱令五拾圓ヨリ少ナキ利益ニ關スルモノ人證ヲ許サス

此禁止ハ辨濟、免除、更改其他ノ義務消滅ノ原因ヲ證スル爲メ又ハ書面ヲ以テ證シタル物權ノ消滅又ハ變更ヲ證スル爲メ上ニ定メタル制限内ニ於ケル人證ヲ妨ケス

總テノ場合ニ於テ主張セラレタル事實ノ日附及ヒ場所又ハ履行ノ爲メ日頃ニテ定メタル時期及ヒ場所ノ脱漏ハ人證ヲ以テ之ヲ補足スルコトヲ得但此事ヨリ生スル利益ヲ主タル利益ニ加ヘテ價額五拾圓ヲ超過セサルトキニ限ル

第六十四條 爭ノ利益カ五拾圓ヲ超過スル場合ニ於テハ原告又ハ被告ハ縱令其以下ノ數額ニ請求又ハ抗辯ヲ減スルモノ人證ヲ許サス

五拾圓ヲ超過セサル請求又ハ抗辯カ此數額ヲ超過シタル價額ノ殘餘ナルトキ亦同シ

第六十五條 前條ニ規定シタル二箇ノ場合ニ於テ證人訊問ニ因リ五拾圓ヲ超過シタル利益ナルコトヲ發見シタルトキハ人證ヲ許シタル裁判所ハ之ヲ取消スコトヲ要ス

此他證人訊問ニ因リ法律上之ヲ許ササル事情ヲ發見シタル場合ニ於テモ亦同シ

第六十六條 上ノ規定ハ增補利息、過意約款又ハ契約ニ從ヒテ返還ヲ受ク可キ果實ノ計算ヲ加フルカ爲メニ五拾圓ノ額ヲ超過スル場合ニ於テ原告又ハ被告カ證人ヲ以テ其主タル債權ヲ證スル爲メ此從タル債權ヲ拋棄シ得ル妨ト爲ラヌ

右ノ超過カ遅延利息又ハ要約セサル損害賠償又ハ請求後ニ返還ヲ受ク可キ果實ノミヨリ生スルトキハ全部ニ付キ人證ヲ許ス

第六十七條 書面ニ依リ全ク證セラレスシテ各別ニ人證ノ許サル可キ數箇ノ請求ヲ爲スコトヲ得ヘキ者ハ其原因ノ如何ニ拘ハラズ一箇ノ訴狀ニ其數箇ノ請求ヲ併合スルコトヲ要ス但其請求カ總テ滿期ノモノニシテ同一裁判所ノ管轄ニ屬スルモノタルトキニ限ル

右ノ手續ヲ爲ササルニ於テハ最早其脫漏シタル請求ニ付キ人證ヲ許サス

右ノ規定ハ同一ノ請求ニ對シ數箇ノ抗辯ヲ以テ對抗セント主張スル者ニ之ヲ適用ス

第六十八條 前條ニ記載シタル如ク併合シタル數箇ノ請求又ハ抗辯カ五拾圓ノ價額ヲ超過スルトキハ人證ヲ許サス但此請求又ハ抗辯カ相異ナル原因ヨリ生スルトキハ此限ニ在ラス

第六十九條 左ノ場合ニ於テハ爭ノ價額ノ如何ニ拘ハラズ人證ヲ許ス

第一 書面ニ因ル證據端緒ノ存スルトキ

證據端緒トハ之ヲ以テ對抗セラルル人又ハ其人ヲ代表シタル者ヨリ出テタル總テノ書面ニシテ主張シタル事情ニ付キ事實タルノ感ヲ起サシムルモノヲ謂フ

主張シタル事情ノ書面ニ因ル證據端緒アルトキハ書面外ノ事項又ハ書面ニ反スル事項ニ付

キ人證ヲ許ス

第二 原告又ハ被告カ不可抗力ニ因リ又ハ自己ノ過失若クハ懈怠ニ歸ス可カラサル意外ノ事

ニ因リテ其證書ヲ失ヒタルコトヲ證スルトキ

第三 主張シタル事情ノ有リタル當時利害關係人カ書證ヲ得ル能ハサリシトキ

第七十條 前條第三號ハ殊ニ左ノ場合ニ之ヲ適用ス

第一 財産取得編第二百二十條及ヒ第二百二十一條第一項ニ規定シタル急迫密託

第二 事變ノ不期ノ危険又ハ急迫ナル必要ノ場合ニ於テ負擔シタル義務

第三 合意外ノ原因ヲ有スル義務但此場合ニ於テ不當ノ利得、不正ノ損害又ハ法律ノ規定ヨリ生シタリト主張スル義務カ書面ヲ以テ證ス可キ性質ノモノタル權利行為ヲ推量セシムル

トキハ豫メ其證據ヲ供スルコトヲ要ス

第七十一條 法律カ人證ヲ許ス場合ノ外人證ヲ拒ムニ利益ヲ有スル當事者カ人證ニ依リテ證據ヲ舉クルコトヲ承諾スルトキハ裁判所ハ人證ヲ拒絕シ又ハ之ヲ許可スルコトヲ得

第七十二條 判事ハ證人ノ證據ニ因リテ拘束セラレス其心證ニ從ヒテ判決ス

第八節 世評

第七十三條 法律上特ニ世評ニ因ル證據ヲ許ス場合ノ外或ル事實カ顯著ナルトキ法律カ其規定ヲ此事實ニ適用ス可キコトヲ定メタル各箇ノ場合ニ於テハ此證ヲ用ユルコトヲ得

世評ニ因ル證據ニ於テハ證人ハ事實ニ付キ直接ニ自ラ知ラサルモ傳聞ニ因リ又ハ公然顯著ナルニ因リテ知リタル所ノモノヲ陳述スルコトヲ得

第三章 間接證據

第七十四條 間接證據ナル推定ハ法律カ直接證據ナキ場合ニ於テ知レタル事實ヨリ知レサル事實

ニ自ラ推及シ又ハ裁判官ノ明識ト思慮トニ委ヌル結果ナリ

右第一ノ推定ヲ法律上ノ推定ト謂ヒ第二ノ推定ヲ事實ノ推定ト謂フ

第一節 法律上ノ推定

第七十五條 法律上ノ推定ニハ其證據力ト其原因トニ從ヒテ左ノ區別アリ

- 第一 完全ニシテ公益ニ關スルモノ
- 第二 完全ニシテ私益ニ關スルモノ
- 第三 輕易ナルモノ

第一款 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第七十六條 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定ハ法律ノ明示シテ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス此推定ハ之ヲ左ニ揭ク

- 第一 既判力
- 第二 取得又ハ免責ノ時効

第七十七條 既判力ハ判決主文ニ包含スルモノニ存ス

第七十八條 既判力ハ真正ト推定セラル

然レトモ確定爲トラサル判決ハ民事訴訟法ニ定メタル方式及ヒ期間ニ於テ之ヲ攻撃スルコトヲ得

第七十九條 判決ノ確定ト爲リタルトキ同一ノ争ヲ再ヒ訴フルニ於テハ其争ハ下ノ區別ニ從ヒ既判力ニ依リテ之ヲ斥ク

第八十條 判決カ全部又ハ一分ニ付キ公ノ秩序ニ關スルトキハ既判力ニ因ル不受理ノ理由ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ補足スルコトヲ要ス

此他ノ場合ニ於テハ利害關係人ヨリ其不受理ノ理由ヲ以テ對抗スルコトヲ要ス

第八十一條 既判力ニ因ル不受理ノ理由ヲ以テ新請求又ハ新答辯ニ對抗スルコトヲ得ルニハ其請

求又ハ答辯カ舊請求又ハ舊答辯ニ比較シテ左ノ諸件アルコトヲ要ス

第一 權利又ハ事實ニ關シ争ノ目的ノ同一ナルコト

第二 主張ノ原因ノ同一ナルコト

第三 原告被告ノ權利上ノ資格ノ同一ナルコト

第八十二條 新請求又ハ新答辯ノ目的カ數量ニ付テノ舊請求又ハ舊答辯ノ目的ト異ナリタルトキハ新請求又ハ新答辯ノ目的ハ舊請求又ハ舊答辯ニ包含シタルモノト看做ス但舊請求又ハ舊答辯ヲ裁判セシ裁判所カ新請求又ハ新答辯ノ數量ヲ正當トスルニ於テハ之ヲ許與スル權力ヲ有セシトキニ限ル

第八十三條 舊争カ合意又ハ遺言ノ銷除、廢罷又ハ解除ヲ目的トシタルトキハ其争ノ際存在シタルモ當事者ノ知リテ申立テサリシ他ノ同性質ノ原因ハ當事者之ヲ拋棄シタルト推定セラレ更ニ之ヲ新争ノ原因トシテ用ユルコトヲ得ス

方式ノ瑕疵アル證據ヲ其瑕疵ノ爲メ無効トスル舊争中ニ申立テサリシ他ノ方式ノ瑕疵ニ付テモ亦同シ

本條ノ適用ニ於テ銷除ノ訴ノ爲メニハ承諾ノ各種ノ瑕疵及ヒ各種ノ無能力ヲ同性質ノ原因ト看做ス

第八十四條 當事者カ或ハ自身ニテ同一ノ資格ヲ以テ既ニ舊訴訟ニ出テタルトキ或ハ舊訴訟ニ於テ其前主若クハ代理人ニ因リテ代表セラレタルトキ或ハ利害關係人ノ結合カ暗ニ相互代理タルトキハ當事者ノ權利上ノ資格ハ同一ナリトス

第八十五條 刑事裁判所カ犯罪ノ所爲ノ爲メニ要求セシ民事上ノ賠償ニ付キ判決シタル場合ノ外尙ホ重罪、輕罪又ハ違警罪ノ判決ハ犯罪ニ附著スル民事上ノ利益ニ付キ既判力ヲ有ス但犯罪所

爲ノ眞實其犯罪ノ性質及ヒ被告人ノ罪責ニ付テノ裁判ニ關スルモノニ限ル

第二款 私益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第八十六條 法律上ノ推定ハ左ノ場合ニ於テハ私益ニ關スル完全ノモノナリ

第一 法律カ人ノ身分ニ關スル或ル資格ヲ付與シ又ハ拒絕スルトキ

第二 法律カ或ル所爲ヲ其規定ニ背キタルモノト推定シテ取消ストキ

第三 法律カ制規ノ公示ナキニ因リ第三者ニ知レサルモノト推定シテ或ル權利ノ行使ヲ拒絕スルトキ

此法律上ノ推定ハ法律ノ明示シテ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス

然レトモ和解ヲ許ス場合ニ於テハ此推定ハ口頭自白ヲ以テ何時ニテモ之ヲ覆ヘスコトヲ得

第三款 輕易ナル法律上ノ推定

第八十七條 上ノ法律上ノ推定ニ非サルモノハ輕易ナル法律上ノ推定ナリ此推定ニ付テハ法律カ

反對ノ證據ヲ明許セサルトキト雖モ總テ之ヲ許ス

右反對ノ證據ハ前二章ニ規定シタル條件ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ舉グルコトヲ得

又輕易ナル法律上ノ推定ハ次條ノ場合ニ於テハ事實ノ推定ヲ以テ之ヲ廢止スルコトヲ得

第二節 事實ノ推定

第八十八條 法律カ裁判所ニ其裁判ノ元素ヲ訴訟ノ事情ニ付キ採取スルコトヲ許ス特別ナル場合

ノ外尙ホ裁判所ハ人證ヲ許スコキ場合ニ於テハ何等ノ直接ノ證據ヲモ舉ケサルトキト雖モ事情

ヨリ生スル心證ニ從ヒテ爭ヲ決スルコトヲ得

第二部 時效

第一章 時效ノ性質及ヒ適用

第八十九條 時效ハ時ノ效力ト法律ニ定メタル其他ノ條件トヲ以テスル取得又ハ免責ノ法律上ノ

推定ナリ但動産ノ瞬間時効ニ關スル第四百四十四條以下ノ規定ヲ妨ケス

第九十條 正當ナル取得又ハ免責ノ推定ハ完全ニシテ公ノ秩序ニ關スルモノトス此推定ハ第九十

六條及ヒ第六十一條ニ規定シタル如ク法律ノ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ

證據ヲ許サス

第九十一條 取得時効ノ效力ハ占有ノ有益ニ始マリタル日ニ遡ル

免責時効ノ效力ハ債權者カ其權利ヲ第二百五條以下ニ記載シタル區別ニ從ヒテ行フコトヲ得

ヘカリシ日ニ遡ル

第九十二條 或ル訴權ノ行使ノ爲メ法律ニ定メタル期間ハ其訴權ノ性質ニ因リテ取得時効又ハ免

責時効ノ一般ノ規則ニ從フ但法律カ明示又ハ默示ニテ例外ヲ設ケタル場合ハ此限ニ在ラス

第九十三條 時効ハ總テノ人ヨリ之ヲ援用スルコトヲ得

又時効ハ總テノ人ニ對シテ進行ス但法律ニ依リ時効停止ノ利益ヲ受クル人ニ對シテハ此限ニ在

ラス

第九十四條 總テ融通物ハ時効ニ罹ルコトヲ得但法律上之ニ異ナル規定ヲ設ケタルモノハ此限ニ

在ラス

不融通物及ヒ讓渡スコトヲ得サル物ハ時効ニ罹ルコトヲ得

公有ノ財産ハ動産ト雖モ亦同シ

第九十五條 自己ノ財産ニ付キ又ハ他人ニ對シテ行フコトヲ得ル法律上ノ權能ハ幾許ノ時期間之

ヲ行ハサルモ爲メニ喪失セス但法律、合意又ハ遺言ニ於テ之ニ異ナル定ヲ設ケタル場合ハ此限

ニ在ラス

第九十六條 判事ハ職權ヲ以テ時効ヨリ生スル請求又ハ抗辯ノ方法ヲ補足スルコトヲ得ス時効ハ其條件ノ成就シタルカ爲メ利益ヲ受クル者ヨリ之ヲ援用スルコトヲ要ス時効ヲ援用スル當時併セテ正當ノ取得又ハ免責ナキコトヲ追認スル者ハ時効ヲ拋棄シタリト看做ス

第九十七條 時効ヲ援用スルニ利益ヲ有スル當事者ノ總テノ承繼人ハ或ハ原告ト爲リ或ハ被告ト爲リ其當事者ノ權ニ基キテ時効ヲ援用スルコトヲ得

債權者ハ財産編第三百二十九條ニ從ヒテ右ト同一ノ權利ヲ有ス

第九十八條 時効ハ訴訟中何時ニテモ之ヲ援用スルコトヲ得又控訴ニ於テモ始メテ之ヲ援用スルコトヲ得然レトモ上告ニ於テハ始メテ之ヲ援用スルコトヲ得ス

第九十九條 年又ハ月ニ依リテ成就ス可キ時効ハ曆ニ從ヒテ之ヲ算ス

日ニ依リテ成就ス可キ時効ハ午前零時ヨリ午後十二時マテヲ一日ト爲シテ之ヲ算ス時効ノ進行ノ始マリタル日又ハ其中斷若クハ停止ノ後再ヒ進行ノ始マリタル日ハ之ヲ算セス最後ノ日ハ全ク經過スルコトヲ要ス

第二章 時効ノ拋棄

第一百條 時効ハ豫メ之ヲ拋棄スルコトヲ得ス但第二百十條第二項ニ記スル如ク占有者カ將來ニ向ヒテ其占有ノ容假ヲ認ムル權利ニ妨ナシ

成就シタル時効ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得又其進行中ト雖モ既ニ經過シタル時期ノ利益ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得

此場合ニ於テハ第一百十八條以下ニ記載セル相手方ノ權利ヲ追認シタル場合ニ於ケルト同シク時

效ハ中斷ス

第一百一條 拋棄ハ默示タルコトヲ得ルト雖モ明カニ事情ヨリ顯ハルルコトヲ要ス

第一百二條 成就シタル時効ヲ有效ニ拋棄スルニハ取得シタリト推定セラルル權利ヲ無償ニテ讓渡シ又ハ消滅シタリト推定セラルル義務ヲ無償ニテ負擔スル能力アルコトヲ要ス

第一百三條 債權者ハ其權利ヲ詐害シテ債務者ノ爲シタル時効ノ拋棄ニ對シテハ財産編第三百四十條以下ニ定メタル條件及ヒ方法ニ從ヒ自己ノ名ヲ以テ之ヲ攻撃スルコトヲ得

第三章 時効ノ中斷

第一百四條 經過シタル時期ノ利益カ下ニ記シタル原因ノ一ニ由リテ消滅スルトキハ時効ハ中斷ス中斷シタル時効ハ中斷ノ原因ノ止ミシ時ヨリ更ニ進行ス

第一百五條 時効ノ中斷ハ自然ノモノ有リ法定ノモノ有リ

自然ノ中斷ハ取得時効ニ關シテノミ生ス

法定ノ中斷ハ取得及ヒ免責ノ時効ニ共通ナリ

第一百六條 動産不動産又ハ包括動産ノ占有者カ其ノ所有者又ハ第三者ノ所爲ニ因リテ一个年以上其占有ヲ奪ハレタルトキハ自然ノ中斷アリ

占有ヲ取戻シタルトキハ時効ハ更ニ進行ス

若シ不可抗力ニ因リテ占有ヲ奪ハレタルトキハ自然ノ中斷ナシ

第一百七條 自然ノ中斷ハ各利害關係人ノ爲メニ其效ヲ生ス

第一百八條 占有者カ或ル時間任意ニテ其占有ヲ止メシトキハ其占有不繼續ノ效力ハ第三百二十九條ニ於テ之ヲ規定ス

第一百九條 法定ノ中斷ハ左ノ諸件ヨリ生ス

第一 裁判上ノ請求

第二 勸解上ノ召喚又ハ任意出席

第三 執行文提示又ハ催告

第四 差押

第五 任意ノ追認

右ノ手續又ハ追認ノ行為カ時効ノ爲メ害ヲ受クル者ノ權利ニ明カニ關係スルコトヲ要ス

第一百條 法定ノ中斷ハ中斷ノ所爲ヲ行ヒタル者及ヒ其承繼人ノ爲メニ非サレハ其効ヲ生セス

第一百一條 本訴ト附帶訴ト反訴トヲ問ハス裁判上ノ請求ハ時効ヲ中斷ス但其請求カ方式ニ於テ

無効タルトキ又ハ管轄違ノ裁判所ニ之ヲ爲シタルトキモ亦同シ

然レトモ右但書ノ場合ニ於テ中斷ハ初ノ請求ヲ棄却セシ判決アリタル時ヨリ二个月内ニ更ニ合

式ノ訴ヲ提起セサルニ於テハ之ヲ不成立ト看做ス

第一百十二條 中斷ハ左ノ場合ニ於テモ亦之ヲ不成立ト看做ス

第一 請求カ其基本ニ於テ棄却セラレタルトキ

第二 原告カ取下ヲ爲シタルトキ

第三 訴訟手續カ民事訴訟法ニ定メタル時間休止シテ無効ト爲リタルトキ

第一百十三條 裁判上ノ請求ヨリ生スル中斷ハ訴訟ノ提起ヨリ其判決ノ確定ト爲ルマテ繼續ス

第一百十四條 勸解上ノ召喚又ハ任意出席ニ因ル時効ノ中斷ハ主タル請求ハ勿論其反對ノ請求ヨリ

モ生ス

召喚ノ無効ハ方式ノ瑕疵ニ因ルモ管轄違ニ因ルモ中斷ヲ妨ケス但初ノ召喚ノ無効ト爲リタルヨ

リ一个月内ニ更ニ合式ノ召喚ヲ爲スコトヲ要ス

合式ノ召喚ノ上勸解不調ノ場合及ヒ被告ノ缺席ノ場合ニ於テ中斷ハ一个月内ニ裁判所ノ請求ヲ爲ササルトキハ之ヲ不成立ト看做ス

第一百十五條 執行文提示ヨリ生スル中斷ハ一个年内ニ差押ヲ爲ササルトキハ之ヲ不成立ト看做ス

右ノ中斷ハ方式ノ瑕疵ニ因リテ其提示ノ無効ナルトキト雖モ尙ホ成立ス但催告ヨリ生スル中斷

ノ爲メ下ニ定メタル條件ヲ履行スルコトヲ要ス

第一百十六條 義務履行ノ催告ハ義務ノ目的、原因及ヒ債務者ヲ明カニ指示シ且六个月内ニ裁判上

又ハ勸解上ノ請求ヲ爲シタルトキニ非サレハ時効ヲ中斷セス

第一百十七條 差押ヨリ生スル中斷ハ其差押ノ手續カ合式ニ終結マテ繼續シタルニ非サレハ其効力

ヲ存續セス

假差押ハ裁判所ノ定メタル期間ニ裁判上ノ請求ヲ爲シタルニ非サレハ時効ヲ中斷セス

時効ノ利益ヲ受クル者ニ對シテ差押ヲ爲ササルトキハ其差押ハ此者ニ告知シタル後ニ非サレハ

之ニ對シテ中斷ノ効力ヲ有セス

第一百十八條 任意ノ追認ヨリ生スル時効ノ中斷ハ裁判上ヨリ又ハ口頭タルト書面タルトヲ問ハス

裁判外ノ行為ヨリ生スルコトヲ得

裁判上ノ追認ハ自發ナルコト有リ又ハ判事ノ訊問ヨリ生スルコト有リ

第一百十九條 追認ハ明示又ハ默示ナルコトヲ得

占有者カ占有物ニ關スル果實又ハ賠償ノ要求ニ承服スルトキ又ハ之ニ反シテ占有者カ物ニ付キ

爲シタル必要若クハ有益ノ費用ノ爲メ賠償ヲ要求スルトキハ殊ニ取得時効ニ對スル默示ノ追認

アリトス

債務者カ利息又ハ債務ノ辨濟ノ請求ニ承服スルトキ又ハ之ニ反シテ債務者カ提供ヲ爲シ若クハ

恩惠期限ノ請求ヲ爲ストキハ殊ニ免責時効ニ對スル默示ノ追認アリトス

第二百二十條 眞ノ所有者ノ權利ヲ追認シタル占有者ハ其所有者及ヒ其承繼人ニ對シ新時効ヲ再ヒ始ムル權利ヲ失ハス然レトモ占有者ハ最早其以前ノ善意ノ利益ヲ援用スルコトヲ得ス
若シ其占有者カ容假ノ占有者ト爲リタルトキハ將來ニ向ヒ何人ニ對シテモ時効ノ利益ヲ失フ但財産編第八十五條第二項及ヒ第三項ノ場合ノ適用ヲ妨ケス

第二百二十一條 追認ニ因リテ中斷シタル免責時効ハ即時更ニ進行ス然レトモ其時効ハ最初短期ノモノタリシトキト雖モ將來ニ向ヒテハ長期時効ノ期間ニ從フ

第二百二十二條 時効ヲ中斷スル追認ハ自己ノ財産ヲ管理スル能力又ハ時効ニ罹ルコト有ル可キ財産ヲ他人ノ爲メニ管理スル能力ヲ有スル者ニ於テ之ヲ爲シタルトキハ有效ナリ

然レトモ婦、無能力者又ハ委任者ノ利益ニ於ケル不動産ノ取得時効ヲ中斷スル爲メ夫、後見人又ハ代理人ノ爲シタル追認ハ不動産ノ請求ニ承服スル一般又ハ特別ノ權力アルニ非サレハ有效ナラス

第二百二十三條 時効ヲ中斷スル追認ノ所爲ニ付キ争アルトキハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得

第二百二十四條 保證連帶及ヒ不可分ノ場合ニ於テ各利害關係人ニ對スル追認其他ノ方法ニ因ル時効中斷ノ效力ハ債權擔保編第二十七條、第六十一條、第八十一條及ヒ第八十九條ニ於テ之ヲ規定ス

第四章 時効ノ停止

第二百二十五條 權利ノ行使カ權利上又ハ恩惠上ノ確定若クハ不確定ノ期間ニ服シ又ハ其發生カ停止條件ニ繫ルトキハ其期間ノ滿了又ハ條件ノ成就ノ時ニ非サレハ時効ハ進行ヲ始メス

第二百二十六條 時効ハ物權又ハ人權ニシテ其成立、廣狹又ハ行使カ相續ニ繫ルモノニ對シテハ其相續後ニ非サレハ進行ヲ始メス

第二百二十七條 遺言又ハ前主ノ合意ニ對シ相續人ニ屬スル銷除訴權又ハ抗辯ノ時効ハ其遺言又ハ合意ヲ相續人ニ對シテ援用シ又ハ其相續人ヲ害スル權利行使ノ基礎トシテ用非タル後ニ非サレハ進行ヲ始メス

第二百二十八條 上ノ場合ニ於テ時効ハ第三所持者ニ對シテ停止セス但所有權ノ取得時効又ハ抵當ノ消滅時効ヲ中斷セント欲スル利害關係人ニ於テ自己ノ未定ノ權利ノ追認證書ヲ得ント請求スルコト又ハ裁判上其權利ヲ單ニ追認セシムルコトヲ妨ケス

第二百二十九條 時効カ其進行中ニ停止セラレルトキハ既ニ經過シタル時間ハ其時効ノ更ニ進行ヲ始ムル時ニ之ヲ通算ス

第二百三十條 時効ハ法律ニ定メタル人ノ利益ニ於ケルニ非サレハ停止セス

第二百三十一條 期間五個年以下ノ時効ハ成年者ニ對スル如ク未成年者及ヒ禁治產者ニ對シテ進行ス但後見人カ此等ノ者ノ權利ヲ行フコトヲ怠リ又ハ正當ノ原因ナクシテ此權利ヲ覺知セサル場合ニ於テハ此等ノ者ヨリ其後見人ニ對スル求償權ヲ妨ケス

五個年ヲ超ユル時効ニ關シテハ其期間ハ成年ニ達シタル未成年者又ハ精神ノ回復シタル禁治產者ヲレテ常ニ其權利ヲ行フ猶豫ヲ得セシムル爲メ最後ノ一個年停止ス

第二百三十二條 時効ハ婦ニ對シ第三者ノ利益ニ於テ進行ス但夫カ婦ノ爲メニ管理スル財産ニ關シ其夫ノ方ニ懈怠アル場合ニ於テハ婦ヨリ夫ニ對スル求償權ヲ妨ケス

然レトモ法律ニ規定シタル場合ニ於テハ時効ハ婦ノ爲メ最後ノ一個年停止ス

第二百三十三條 前一條ノ規定ハ無能力者自身ニテ爲シタル行為ノ銷除訴權ノ時効停止ニ關シ財産

編第五百四十五條及第五百四十六條ニ定メタルモノヲ妨ケス

第二百二十四條 配偶者ノ一人ヨリ他ノ一人ニ對シテ行フ可キ權利ニ關シテハ婚姻中ト雖モ時効ハ進行ス

然レトモ其時効ハ最後ノ一个年停止ス又一个年以下ノ時効ニ關シテハ其最後ノ半期間停止ス

第二百四十四條ノ場合ニ於テハ動産回復ノ期間ハ三ヶ月トス

第二百三十五條 時効ハ財産ノ管理人ト其管理ヲ受クル者トノ間ニ於テ其保存スルコトヲ任セラレタル權利ニ付テハ管理人ノ爲メニ停止ス

時効ハ管理カ止ミシ以後ニ非サレハ更ニ進行セス又第二百四十四條ノ場合ニ於ケル動産ノ時効ニ關シテハ三ヶ月ヲ以テスルニ非サレハ成就セス

第二百三十六條 上ニ定メサル場合ニ於テ時効ノ期間ノ滿了スル時ニ當リ有權者カ交通ノ塞カリタルニ因リ又ハ地方ノ裁判事務ノ停止セラレタルニ因リテ其權利ノ效用ヲ致サシメ又ハ時効ヲ中斷スル爲メ手續ヲ爲スコト能ハサリシ時ハ有權者其妨碍ノ止ム後直チニ請求ヲ爲スニ於テハ其失權ヲ免カルルコトヲ得

右ノ規定ハ陸海軍人カ戰亂ノ時ニ於テ服役ノ爲メ其權利ヲ行フコトヲ妨ケラレタル場合ニ於テハ其利益ノ爲メ之ヲ適用ス

第二百三十七條 物權又ハ人權ノ不可分ヨリ生スル時効ノ停止ハ財産編第二百九十一條、第四百四十六條及ヒ債權擔保編第八十九條第二項ニ於テ之ヲ規定ス

第五章 不動産ノ取得時効

第二百三十八條 不動産ノ取得時効ニ付テハ所有者ノ名義ニテ占有シ其占有ハ繼續シテ中斷ナク且平穩公然ニシテ下ニ定メタル繼續期間アルコトヲ要ス

財産編第八十三條及ヒ第八十五條ニ定メタル如キ強暴、隱密又ハ容假ノ占有ハ時効ヲ生セス

第二百三十九條 占有者カ時効ニ因リテ取得セントスル物ニ付キ或ル長キ時間所有者ノ行爲ヲ爲スコトヲ任意ニテ止メシトキハ其占有ハ不繼續ニシテ時効ヲ生セス

占有者カ再ヒ所有者ノ行爲ヲ爲スコトキハ其以前ノ占有ノ時間ハ占有者ノ爲メニ之ヲ算セス
第二百四十條 占有カ上ニ定メタル條件ノ外財産編第八十一條ニ記載シタル如キ正權原ニ基因シ且財産編第八十二條ニ從ヒテ善意ナルトキハ占有者ハ不動産ノ所在地ト時効ノ爲メ害ヲ受クル者ノ住所又ハ居所トノ間ノ距離ヲ區別セス十五年ヲ以テ時効ヲ取得ス

占有者カ正權原ヲ證スルコトヲ得ス又ハ之ヲ證スルモ財産編第八十七條ニ規定シタル如ク其善意カ證セラルトキハ取得時効ノ期間ハ三十年トス

第二百四十一條 性質上登記ヲ爲ス可キ正權原ニ基因シタル時効ハ其證書ニ依リ登記ヲ爲シタル後ニ非サレハ之ヲ算セス

第二百四十二條 方式上無効タリ又ハ裁判上取消サレタル權原ハ時効ノ爲メニ有益ナラス

第二百四十三條 前主ノ占有ヲ其相續人及ヒ包括若クハ特定ノ承繼人ノ占有ニ併合シ又ハ繼續スルコトハ財産編第九十二條ニ於テ之ヲ規定ス

第六章 動産ノ取得時効

第二百四十四條 正權原且善意ニテ有體動産物ノ占有ヲ取得スル者ハ即時ニ時効ノ利益ヲ得但第三百二十四條及ヒ第三百三十五條ニ記載シタルモノヲ妨ケス

此場合ニ於テ反對カ證セラレサルトキハ占有者ハ正權原且善意ニテ占有スルモノトノ推定ヲ受ク

第四百十五條 動產物ノ占有者カ正權原ヲ有シ且善意ナル場合ニ於テモ其物カ所有者ノ盜取セラレタルモノ又ハ遺失シタルモノナルトキハ其所有者ハ盜難又ハ遺失ノ時ヨリ二十年間ハ占有者ニ對シテ其物ノ回復ヲ請求スルコトヲ得但占有者カ其物ヲ有償ニテ受ケタルトキハ其讓渡人ニ對スル求償ヲ妨ケス

背信ニ因リテ隱匿シ又ハ詐欺ヲ以テ得タル物ニハ本條ヲ適用セスシテ前條ノ規定ニ從フ

第四百十六條 盜取セラレ又ハ遺失シタル物ヲ競賣又ハ公ノ市場ニ於テ又ハ此類ノ物ノ商人若クハ古物商人ヨリ善意ニテ買受ケタル者アルトキハ所有者ハ其買受代價ヲ辨償スルニ非サレハ回復ヲ爲スコトヲ得ス

此場合ニ於テハ右ノ代價ニ付キ所有者ハ買主ニ對シ又買主ハ讓渡人ニ對シテ求償權ヲ有シ終ニ盜取者又ハ拾得者ニ遡ル

第四百十七條 無記名債權證書ヲ盜取セラレ又ハ遺失シタル場合ニ於テ其證書回復ノ期間及ヒ條件ハ特別ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百十八條 上ノ場合ニ於テ回復者カ占有ノ無權原タリ又ハ惡意タルコトヲ證スルトキハ時効ハ三十年ヲ經過スルニ非サレハ成就セス

第四百十九條 上ノ規定ハ用方ニ因リテ不動産ト爲リタル動產カ其附著シタル不動産ヨリ分離セラレタル場合ニ於テハ其動產ニ之ヲ適用ス

上ノ規定ハ財産編第十二條ニ從ヒ用方ニ因ル動產ニ之ヲ適用セス但其物カ土地ヨリ分離シタルトキハ此限ニ在ラス

又上ノ規定ハ記名債權ニモ包括動產ニモ之ヲ適用セス但此等ノ物ニ關スル時効ノ期間ハ第二百二十八條以下ニ記載シタル區別ニ從ヒ不動産ニ關スルモノト同一ナリ

第七章 免責時効

第二百五十條 義務ノ免責時効ハ債權者カ其權利ヲ行フコトヲ得ヘキ時ヨリ三十年間之ヲ行ハサルニ因リテ成就ス但法律上別段短キ期間ヲ定メ又ハ債權時効ニ罹ラサルモノト定メタルトキハ此限ニ在ラス

第二百五十一條 債務ノ元本カ年賦ニテ辨濟ス可キモノタルトキハ利息ヲ包含スルト否トヲ問ハス時効ハ各年賦ノ要求期ニ達シタル時ヨリ各別ニ之ヲ算ス

第二百五十二條 債權カ無期又ハ終身ノ年金權ナルトキト雖モ其時効ハ證書ノ日附ヨリ三十年ヲ以テ成就ス

然レトモ右ノ日附ヨリ二十八年ノ後ニ至リ債權者ハ債務者ニ對シ時効ヲ中斷スル爲メ雙方ノ費用ヲ以テ其權利ノ追認證書ヲ得ント要求スルコトヲ得

若シ債務者右ノ要求ヲ拒絕シ債權者裁判上自己ノ權利ヲ追認セシムル必要アルトキハ其費用ハ全ク債務者ノ負擔タリ

第二百五十三條 動產質又ハ不動産質ノ返還ヲ得ル爲メノ對人訴權ハ適法ナル方法ニ因リテ債務ノ消滅シタル後ニ非サレハ時効ニ罹ラス

第八章 特別ノ時効

第二百五十四條 人ノ身分ニ關スル訴權ハ法律カ其行使ヲ特別ノ期間ニ繫ラシムル場合ニ非サレハ時効ニ罹ラス

第二百五十五條 相続人又ハ包括權原ノ受遺者若クハ受贈者ノ分限ヲシテ效用ヲ致シシムル爲メノ遺產請求ノ訴權ハ相続人又ハ包括權原ノ受贈者若クハ受遺者ノ權原ニテ占有スル者ニ對シテハ相続ノ時ヨリ三十年ヲ經過スルニ非サレハ時効ニ罹ラス

第五百五十六條 免責時効ハ左ニ掲グル諸件ノ辨濟ノ訴權ニ對シテハ五個年トス

- 第一 明確ナル金額ノ填補又ハ遅延ノ利息
- 第二 無期又ハ終身ノ年金權ノ年金
- 第三 養料又ハ恩給ノ一期ノ支拂金
- 第四 借家賃又ハ借地賃
- 第五 果實又ハ日用品ノ每期ノ給與額
- 第六 教師番頭手代使用人乳母其他ノ雇人ノ謝金又ハ給料ニシテ一个年毎ニ定メラレタルモノ

此他一般ニ一个年毎ニ又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メタル金額又ハ有價物ニ係ル債務ニ付テモ亦同シ但其辨濟ノ方法如何ニ拘ハラズ且下ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

第五百五十七條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ三个年トス

- 第一 醫師產婆藥劑者ノ治療世話及ヒ調劑ニ關スル其訴權
- 第二 前條第六號ニ指定シタル教師使用人其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一个年ヨリ短ク一个月ヨリ長キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テハ其訴權
- 第三 技師工匠測量師製圖師ノ經畫意見及ヒ工事ニ關スル訴權
- 第四 不動産ニ關スル築造地均其他ノ工作ニ付テノ請負人ノ訴權

第五百五十八條 公證人辯護士執達吏其他ノ公吏カ職務ニ關シテ受ク可キモノニ付テノ其訴權ニ對スル時効ハ二個年トス

此場合ニ於テ時効ハ右各人ノ債權ヲ生セシメタル行為又ハ訴訟ノ終了後ニ非サレハ進行ヲ始メス

然レトモ終了セサル事件ニ關シテハ右各人ハ五個年餘ニ過ル行為ノ爲メニ謝金ヲ要求スルコトヲ得ス

此規定ハ右各人カ其職務ノ爲メニ爲シタル立替金及ヒ支出金ニ之ヲ適用ス

第五百五十九條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ一个年トス

- 第一 非商人ニ爲シタル供給ニ關スル日用品衣服其他動產物ノ卸賣商人又ハ小賣商人ノ訴權但商人又ハ工業人ニ爲シタル供給ト雖モ其者ノ商業又ハ工業ニ關セサル場合ニ於テハ亦同シ
- 第二 右ノ區別ヲ以テ注文者ノ材料又ハ動產物ニ付キ仕事ヲ爲ス居職ノ職工又ハ製造人ノ訴權
- 第三 生徒又ハ習業者ノ教育衣食及ヒ止宿ノ代料ニ關スル校長塾主師匠又ハ親方ノ訴權

第六十條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ六個月トス

- 第一 第五百五十六條第六號及ヒ第五百五十七條第二號ニ指定シタル教師使用人其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一个月又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テハ其訴權
- 第二 旅店又ハ料理店ノ主人ヨリ供給シタル宿泊料飲食料及ヒ消費物ニ關スル其訴權
- 第三 日雇月雇ノ職工又ハ勞力者ノ給料及ヒ共仕事ニ際シ此等ノ者ノ爲シタル些少ノ供給ニ關スル其訴權

第六十一條 前五條ニ規定シタル時効ハ現實ニ辨濟セザリシコトヲ明白シタル債務者之ヲ援用スルコトヲ得ス

第六十二條 裁判所書記辯護士ハ裁判ノ時ヨリ公證人ハ證書調製ノ時ヨリ執達吏ハ其職務執行ノ時ヨリ三个年ノ後ハ其職務ノ事件ニ關シテ交付セラレタル書類ニ付キ責任ヲ免カレ其非類

返還ノ證ヲ提示スル義務ヲ免除セラル
第百六十三條 本章ニ規定シタル時効ハ當事者ノ間ニ明確ナル計算書、數額ヲ記載シタル債務ノ追認書又ハ債務者ニ對スル判決書アルトキハ之ヲ適用スルコトヲ得ス此場合ニ於テハ時効ハ三十個年トス

附則

第百六十四條 本法實施ノ當時ニ於テ進行中ナル時効ハ上ニ定メタル條件、禁止、中斷及ヒ停止ニ從フ

其期間ニ關シテハ舊時効カ新時効ヨリ一層長キ期間ヲ要スル場合ニ於テハ占有者又ハ債務者ハ本法實施ノ時ヨリ算シテ舊時効ノ經過ス可キ殘期カ新時効ノ期間ヨリ短キトキハ舊時効ヲ利スルコトヲ得

新時効ヨリ一層短キ期間ノ舊時効ニ關シテハ其期間ハ本法ニ定メタルモノニ等シキ期間ニ違スル様之ヲ延長ス可シ

○
朕民事訴訟法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治二十三年三月二十七日

内閣總理大臣兼內務大臣 伯耆山縣有朋
海軍大臣 臣伯耆西鄉從道

司法大臣 臣伯耆山田凱義
大藏大臣 臣伯耆松方正義
陸軍大臣 臣伯耆大山 熾
文部大臣 臣子爵榎本武揚
逓信大臣 臣伯耆後藤象二郎
外務大臣 臣子爵青木周藏
農商務大臣 臣 岩村通俊

法律第二十九號

民事訴訟法目錄

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄

第三節 管轄裁判所ノ指定

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第六節 檢事ノ立會

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第二節 共同訴訟人

- 第三節 第三者ノ訴訟參加
- 第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人
- 第五節 訴訟費用
- 第六節 保證
- 第七節 訴訟上ノ救助
- 第三章 訴訟手續
- 第一節 口頭辯論及ヒ準備書面
- 第二節 送達
- 第三節 期日及ヒ期間
- 第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復
- 第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止
- 第二編 第一審ノ訴訟手續
- 第一章 地方裁判所ノ訴訟手續
- 第一節 判決前ノ訴訟手續
- 第二節 判決
- 第三節 闕席判決
- 第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續
- 第五節 證據調ノ總則
- 第六節 人證
- 第七節 鑑定

- 第八節 書證
- 第九節 檢證
- 第十節 當事者本人ノ訊問
- 第十一節 證據保全
- 第二章 區裁判所ノ訴訟手續
- 第一節 通常ノ訴訟手續
- 第二節 督促手續
- 第三編 上訴
- 第一章 控訴
- 第二章 上告
- 第三章 抗告
- 第四編 再審
- 第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟
- 第六編 強制執行
- 第一章 總則
- 第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行
- 第一節 動産ニ對スル強制執行
- 第一款 通則
- 第二款 有體動産ニ對スル強制執行
- 第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行

第四款 配當手續

第二節 不動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第二款 強制競買

第三款 強制管理

第三節 船舶ニ對スル強制執行

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

第四章 假差押及ヒ假處分

第七編 公示催告手續

第八編 仲裁手續

民事訴訟法

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從フ

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス

果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲クルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額算キトキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 賃貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借貸ノ額ニ依ル但一个年借貸ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ算キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一个年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ算キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ヲ屬束ス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ

區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

移送ノ申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル

普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

第十一條 軍人軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人軍屬ニ之ヲ適用セス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ所在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依リテ定マル

然レトモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限り前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判

籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條 內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財產又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其財產ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財產ノ所在地トス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラヌ本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ本權竝ニ占有ノ訴及ヒ分割竝ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス

地役ニ付テハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

第二十四條 相續權 遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ共裁判所ノ管轄區内ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除ク外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動産上ノ裁判籍ニ訴ヲ起スコキ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第二十條ノ規定ニ從フ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ效力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス

第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ

第二 專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除斥セラルコト無シ

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得
偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルル場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告共覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因ハ之ヲ説明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其説明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因共後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ説明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得ス
若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所共申請ヲ裁

判事

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所共申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス共申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス可シ
ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス可シ

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其中請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セラルル疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス

此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要セス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

- 第一 公ノ法人ニ關スル訴訟
- 第二 婚姻ニ關スル訴訟
- 第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟
- 第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟
- 第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人腐缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ト法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルトキハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲ爲スコトヲ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴訟ヲ起ス可キ場

合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滯ノ爲ニ危害ノ恐アル場合ニ限リ特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ

申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滯ノ爲メ危害ナレト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得

第二節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツトキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボサス

第五十條 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シテ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキニ限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ效ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於テ爲スコヤ總テノ送達及ヒ呼出ノ爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲ニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同シ

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトヲ問ハス原告被告若クハ主參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十三條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助(從參加)スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

第五十四條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有效ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ存スル期間内ニ故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相抵觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

第五十五條 從參加人ハ訴訟ヨリ脫退シタルトキト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケサルトキ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラザリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セサリシトキニ限リ其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタルト主張スルコトヲ得

第五十六條 從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ

申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ

從參加ハ故障、異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五十七條 原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊シタ

ル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得
利害關係ノ存否ニ付キ争アルトキハ從參加人其關係ヲ疏明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル
右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出
シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任
スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ
被告ヲ脱退セシム可シ

第五十九條 原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシ
ト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キコトヲ恐ルル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴
訟ヲ告知スルコトヲ得

訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書
面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ

此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其際本ヲ
送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラズ之ヲ續行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

第六十二條 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告ト爲リタ
ルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者

ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ争フトキ又ハ陳述ヲ爲ササルトキハ被告ハ原告ノ申立ニ應スルコトヲ
得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受クルコトヲ
得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨリ脱退セシム可シ
其物ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ效力ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス
辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此
等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト
爲スコトヲ得

第六十四條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコト
ヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載
セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十五條 訴訟委任ハ反訴主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行
爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲ス權ヲ授

與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セス

第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ効力ナシ

然レトモ辯護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 訴訟代理人數人アルトキハ共同若クハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其効力ナシ

第六十八條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限り其効力ヲ失フ

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ

此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコ

トヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限り之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第七十一條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルトキニ限り原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

第五節 訴訟費用

七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

第七十三條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ス

然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セサリシトキ又ハ判事ノ意見鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルコトヲ得サリシトキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラズ其負擔ニ歸ス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生シシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルトキハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限り其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得
共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ

爲ニ生シタル費用ヲ負擔セス

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト共原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルトキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

第八十二條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レトモ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且進行スルトキニ限り費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得
費用ノ點ニ限リタルトキト雖モ相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ中立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシムル決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前關係人ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
第八十四條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬レタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除ク外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得
申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書相手方ニ付與ス可キ計算書ノ原本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ検査ヲ命スルコトヲ得
裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ分擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ顧ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節 保證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ

左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生セス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ナキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ
此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルトキハ此限ニ在ラス

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出タスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限リ之ヲ求ムルコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出タスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟

費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ニ付テモ之ヲ付與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコトヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤヲ調査スルコトヲ要セス

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セザリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリトモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ效力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟済スルコトノ假免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及ヒ執行行為ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ボサス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟済ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦自己

ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得

第一百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟済ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

第一百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與並ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一百二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限リ抗告ヲ爲スコトヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第一百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第一百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第一百五條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判所、訴訟物及ヒ附屬書類ノ表示

第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立

第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係

第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述

第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用井ントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述

第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印

第七 年月日

第六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ

此他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲クルコトヲ得ス

第七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其冒頭、事件ニ關スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル

證書カ既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

第九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サレ且中間斷ナク辯論ノ終了スルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言渡ス

第十條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル

當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルコトヲ許サス文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要用ナル部分ニ限り之ヲ朗讀スルコトヲ得

第十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯レサルトキハ自白シタルモノト看做ス

第十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ共同ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ共同ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト

看做スコトヲ得

第百十三條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

第百十四條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ援用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作リタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得
第百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得
此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

第百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得

第百二十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

第百二十一條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ

第百二十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行為ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但其罰ス可キ行為カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホストキニ限ル

第百二十三條 裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命ヲ取消スコトヲ得

第百二十四條 裁判所ハ開チタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハシム但裁判所構成法第百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者數又ハ啞ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

第百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス
第百二十八條 辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第百十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス
前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取

扱フコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 辯論ノ場所、年月日

第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告闕

席シタルトキハ其闕席シタルコト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第二百三十條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解

第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但共供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述ニ異ナル

トキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載

ニ同シ

第二百三十一條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ

又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス

可シ

第二百三十二條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルトキハ

共裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第二百三十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所

書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第二百三十四條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得

第二百三十五條 此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ

於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可シ

第二節 送達

第二百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記

ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲

ス

第三百三十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

第三百三十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第三百三十九條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

第四百十條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

第四百十一條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總代理人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第四百十二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限り其代理人ニ之ヲ爲ス然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ效力ヲ有ス

第四百十三條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ假住所選定ノ届出ハ遅クトモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲レ又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トヲ問ハス又何時ニ到達スルトヲ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第四百十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マカリシトキニ限り效力ヲ有ス

第四百十五條 送達ハ其受取ヲ拒マカリシトキニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マカリシトキニ限り效力ヲ有ス

第四百十六條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十七條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 第二百三十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第四百四十五條第二項ニ準

シ送達ヲ爲ス可シ但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル

前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第四百四十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第五百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲ス可キ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限リ之ヲ施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲ス可キ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル謄本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ
本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限リ效力ヲ有ス

第五百十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證竝ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ述ソルトキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第四百四十三條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル
第五百十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏竝ニ其家族從者ニ對スル送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス
送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第五百十六條 原告若クハ被告ノ所在地知レサルトキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ其規定ニ從フコト能ハス若クハ之ニ從フモ其效ナキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ

此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所、當事者竝ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲グルコトヲ要ス

第五百十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當ナル期間ヲ定ムルコトヲ得

同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲シタ

ルモノト看做ス

第三節 期日及ヒ期間

第一百五十九條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム

第一百六十條 期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限リ日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第一百六十一條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス但在廷シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シタルトキハ之ヲ送達スルコトヲ要セス

第一百六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ審問其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行爲ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第一百六十三條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル

原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲ササルトキハ期日ヲ忘リタルモノト看做ス

第一百六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ遅キ起期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第一百六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス

第一百六十六條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一个月ノ期間ハ三十日トシ一年ノ期間ハ曆ニ從フ期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルトキハ其日ヲ期間ニ算入セス

第一百六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告若クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數三里ヲ超ユルトキモ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第一百六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル

前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セス
不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限ル

休暇事件トハ裁判所構成法第二百二十八條第二百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

第一百六十九條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アルトキニ限り之ヲ許ス

第一百七十條 期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レトモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ滿了ヨリ之ヲ起算ス

第一百七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テノ申請ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セサルトキハ相手方